

いなベグリーン・ツーリズムの推進 に向けた地域の拠点づくり成果報告書



【川原地区】



【二之瀬地区】



【篠立地区】



【古田地区】



【鼎地区】

いなべ市

目次

第1章 圏域の地域特性

第1節 位置・自然	3
第2節 歴史・沿革	4

第2章 推進計画の概要

第1節 計画の目的・概要	5
第2節 計画の背景	6
第3節 いなベグリーン・ツーリズムとは	7
第4節 モデル地区	7
第5節 モデル地区における人口分析	8
第6節 計画の期間（平成27年度から）	15
第7節 計画の基本目標	15
第8節 計画の基本方針	15

第3章 地域調査

第1節 いなベグリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート	16
第2節 空き家・未利用施設の調査	31
第3節 観光資源の調査	49
第4節 地域安全調査	56
第5節 京都産業大学調査のまとめと提言	60

第4章 基本方針の展開

第1節 いなベグリーン・ツーリズムを推進する際の基本的なコンセプト	61
第2節 いなベグリーン・ツーリズムの検討の方法	62
第3節 いなベグリーン・ツーリズムの対象者と内容	63

第5章 モデル地区別計画

川原地区	65
二之瀬地区	67
篠立地区	69
古田地区	71
鼎地区	73

第6章 グリーン・ツーリズムの推進に向けて

第1節 推進体制	75
第2節 目標指標	77
第3節 今後の展開	78

附属資料

- ・「若手企業人地域交流プログラム」を活用したこれまでの取り組み 83
- ・いなベグリーン・ツーリズム推進計画策定モデル地区委員会設置要綱 91
- ・いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会名簿 93
- ・いなベグリーン・ツーリズム推進にむけた経緯 94
- ・いなベグリーン・ツーリズム推進事業説明会、計画策定委員会 97



第1章

圏域の地域特性

第1節 位置・自然

旧員弁郡定住自立圏域は、北部・西部を岐阜県と滋賀県に接し、東部・南部は桑名・四日市圏域に接しています。

本圏域は、北に多度山地、西に鈴鹿山脈をいだき、圏域のほぼ中央を流れる員弁川を挟んで緑豊かな自然と平野に囲まれています。

当圏域は豊かな田園地帯にある一方で、名古屋市の中心部から約30kmの距離にあり、西は滋賀県、北は岐阜県と接し、東海圏と関西圏の結節点に位置する地理的優位性を活かして日本を代表する自動車関連企業など優良企業が立地しています。

圏域を東西に三岐鉄道北勢線、三岐鉄道三岐線の2路線が走り、国道365号、421号が圏域中央部を横断、306号が圏域西部を南北に縦断しています。これらの鉄道や国道に沿って市街地が形成されています。

【位置】



【面積】



市・町	面積
いなべ市	219.58 km
東員町	22.66 km
圏域合計	242.24 km



第2節 歴史・沿革

本圏域を構成するいなべ市（北勢町、員弁町、大安町、藤原町）及び東員町は、古くから地形的にも文化的にも密接に交流し、純農村地帯として栄えてきました。

圏域名である“いなべ”は、約 1,300 年前の奈良時代に始まり、当地域には物部氏の支系・猪名部族が居住していたことから、郡名が「猪名部」と名づけられました。その後「員弁」と表記されるようになりましたが、その歴史の長さが裏づけられています。

本圏域は旧藩政時代の一時期を除いて桑名藩に属し、明治4年の廃藩置県以降、安濃津県（その後三重県と改称）に属しました。

明治22年の町村制の施行を経て、昭和28年の町村合併促進法が施行された当時、本圏域は2町 15 村ありましたが、その後、合併や編入などにより、昭和30年代から40年代にかけて北勢町、員弁町、大安町、藤原町、東員町が誕生しました。

その後、地方分権の推進や少子高齢化の進行など、社会情勢の急激な変化を見据えつつ、多様化・広域化する住民サービスへの適切な対応を行うために、さらなる合併によってスケールメリットを活かし、自治体としての基盤強化を図る必要性が高まりました。

そのため、平成10年に員弁郡5町（北勢町、員弁町、大安町、東員町、藤原町）の首長及び議長による「合併検討委員会」が発足し、平成13年には「任意合併協議会」が設置されました。その後東員町が離脱し、4町での合併協議が進められることとなりました。そして、平成14年に「法定合併協議会」が設置され、合併に必要な協議を重ねた後、平成15年12月1日に新設合併として「いなべ市」が誕生し、平成25年の市政10周年を経て、現在に至っています。



第2章

推進計画の概要

第1節 計画の目的・概要

全国的に少子高齢化が進行し人口が減少する中、旧員弁郡定住自立圏域（いなべ市・東員町）では、出産・子育ての中心である20歳から40歳までの年代が都市部へ流出しており、今後より一層人口減少が加速することが危惧されています。

また、担い手不足による地域の衰退、空き家・未利用施設の増加、高齢化や獣害被害による耕作放棄地の増加などが課題となっており、このような課題を解決するためにも、住みたい・住み続けたいと思えるまちづくりを行い人口流出に歯止めをかける必要があります。

このようなことから、過疎化や高齢化が著しい圏域内の中山間地域において、住民を主体とした体験型・着地型の観光としてグリーン・ツーリズムに着目した取組を実施することで、地域の活性化や振興を図ることを目的とします。

【必要性】

山間部の地域などでは、出産・子育て世代の都市部への流出などにより人口が減少し、著しい高齢化に直面しています。このような現状の中、地域の担い手不足、公共施設の統廃合、空き家・耕作放棄地などの増加により地域の活力が低下しつつあることから、地域の活性化を図る必要があります。

【平成26年度】

今後のいなべグリーン・ツーリズムの本格的な展開に向けて、地元企業、大学、いなべ市・東員町や外部人材など産学官民の幅広い関係者が連携し、5つのモデル地区を拠点として、それぞれの拠点における特性を活かした取組を検討・先行的に実施するとともに、5年間程度の推進計画を策定します。

【平成27年度以降】

平成26年度で作成する推進策定計画に基づき、圏域全体で取組を展開し、中山間地域における所得の確保や就業機会の創出を図ります。



第2節 計画の背景

平成の大合併により新しく誕生した本市は、有名な観光地や名産品を持たず地域的なブランド力に弱点がある一方、平成 32 年に東海環状自動車道が本市に接続する予定となっており、旧員弁郡定住自立圏域は東海、関西両地域へのアクセスの要所という地理的特性を活かし、圏域における交流・定住人口の増加を図っていくことが喫緊の課題となっています。

これまで本圏域では、平成 19 年より着地型観光やブランド産品創出を中心に『いなべブランド』の創出・発信に取り組み、平成 24 年からは総務省「若手企業人地域交流プログラム」を活用し、これまで多くの事業※に取り組んできました。

本圏域が取り組んできたこれらの事業を通じて、圏域には緑豊かな自然や「田舎」の風景を有する中で観光資源が多くあることがわかりました。

しかし、これらの多くは顕在化しておらず、眠っている状態にあります。そこで、本圏域が取り組むべき方向として、良好な交通アクセスと、前述した地域の特性を活かしたグリーン・ツーリズムによって交流人口の確保や定住の促進に繋げ、地域の活性化を図ることとなりました。

※「若手企業人地域交流プログラム」を活用した事業は 83 頁以降に掲載

【若手企業人地域交流プログラム】

大都市圏の企業に勤務する若手企業人が、一定期間（1～3 年間）地方の自治体に派遣され、地域独自の魅力や価値の向上につながる業務に携わることにより、地方の元気づくりを推進するとともに、地方と大都市圏の交流の架け橋となる人材として将来的な活躍を期待。

【派遣対象】

三大都市圏内に本社機能が所在し、全国的に事業を展開している民間企業の入社概ね 3～5 年の社員

【受入市町村】

定住自立権に取り組む市町村等、原則として異業種 2 名 1 組で派遣

※三大都市圏内の民間企業・官公庁から人材の派遣を受けている市町村は、1 名のみの受入であっても対象とする。

【派遣期間】

1～3 年程度

【財政支援措置】

若手企業人を受け入れる自治体の財政負担に対して地方財政措置（1 名あたり特別交付税 350 万円）を講じる。

第3節 いなベグリーン・ツーリズムとは

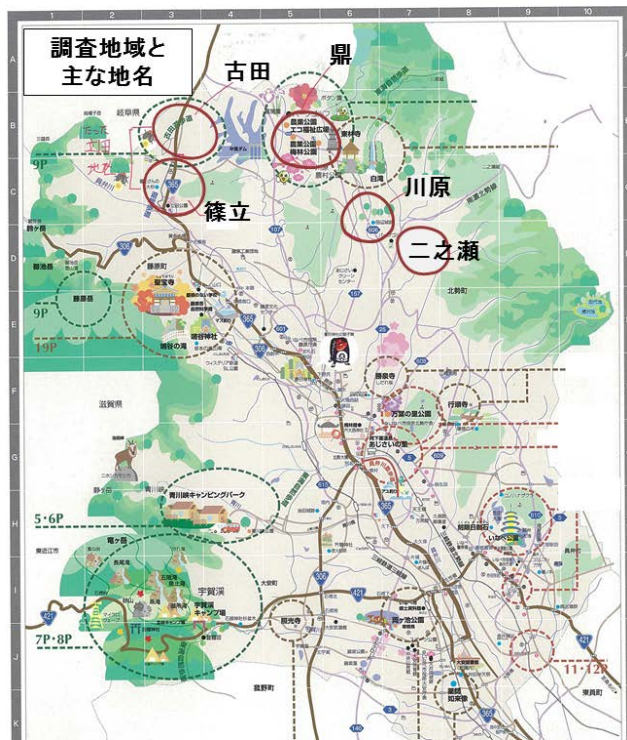
【グリーン・ツーリズムとは】

農山漁村において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動です。グリーン・ツーリズムの取り組み例としては、農作業体験、加工体験や農産物直売所などがあります。

【いなベグリーン・ツーリズムとは】

本圏域における「いなベグリーン・ツーリズム」は、一般的なグリーン・ツーリズムの考え方を活かし、発展させた、「地域に住む人が地域に愛着をもち、生きがいを感じられる生活ができること」、「地域への来訪者が価値ある体験を通じて楽しめること」の2つの視点から、地域の抱える課題を解消すること、地域の魅力ある資源を掘り起こすことを2つの柱とし、“住み続けたい”“住みたい”“訪れたい”と思える活力ある地域の創出に取り組み、地域の活性化を目指すものとします。

第4節 モデル地区



【モデル地区】

- いなべ市北勢町
 - ・川原地区（赤）
 - ・二之瀬地区（紫）
- いなべ市藤原町
 - ・篠立地区（青）
 - ・古田地区（茶）
 - ・鼎地区（橙）

【モデル地区】

モデル地区の選定に当たっては、「辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律（昭和37年法律88号）」に規定する要件を満たしたいなべ市内の辺地該当地区の5地区としました。

第5節 モデル地区における人口分析

いなべグリーン・ツーリズムを推進するにあたり、各モデル地区の現在の状況を正しく把握し、それぞれの地域特性への理解を深めるため、モデル地区について経年人口と年齢構成の2つの視点から人口分析を行いました。

○経年人口分析（縦棒グラフ+折れ線グラフ）

いなべ市合併後の平成16年から平成27年までの各地区の総人口の移り変わりを棒グラフに示しています。また地区ごとの一世帯あたりの平均人員の推移を折れ線グラフに示しています。数値が高いほど、地区の中に多世代世帯が多いと言えます。

※基準日は各年の1月1日現在です。

※県地区の老人ホームに入居している方を含んでいます。

○年齢構成分析（横棒グラフ）

平成26年12月1日現在の各地区の年齢構成を示しています。緑が男性、朱が女性を表しており、棒が長いほどその世代の方が多いことを示しています。

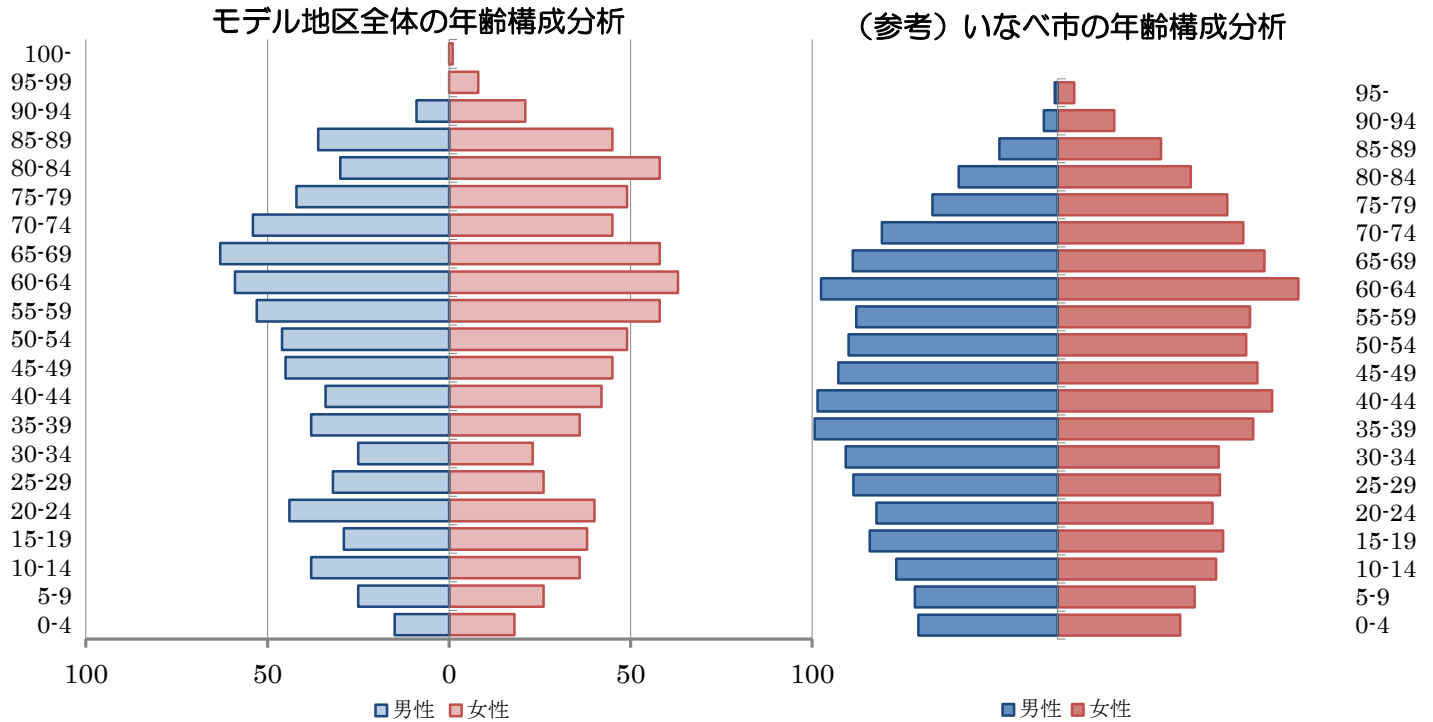
※県地区の老人ホームに入居している方を除外しています。

○年齢三区分別分析

国勢調査に用いられている分類手法で、年少人口（0歳から14歳）、生産年齢人口（15歳から64歳）、老年人口（65歳以上）の三区別にわけ、分析を行います。



【モデル地区全体】



三区分別人口（年齢）	モデル地区	いなべ市全体
年少人口（0～14）	10.5%	12.5%
生産年齢人口（15～64）	55.0%	59.4%
老年人口（65～）	34.5%	28.1%

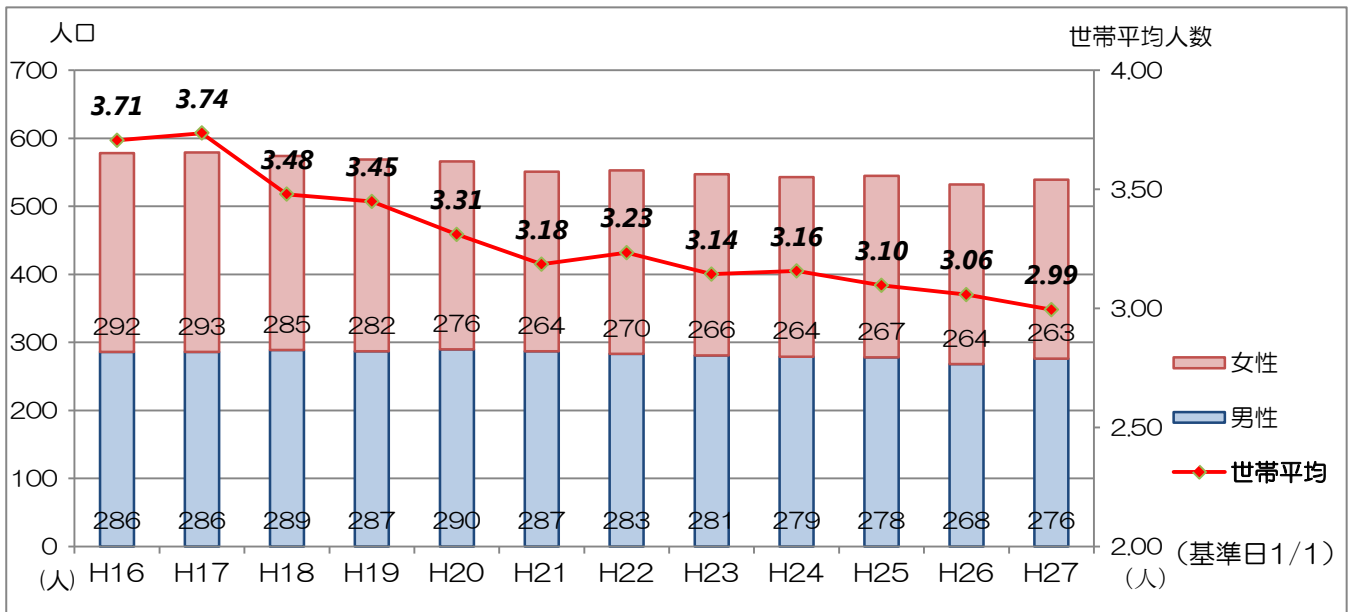
モデル地区全体では、人口ピラミッドがひょうたん型を示しています。これは主に農村部に見られる形で生産年齢人口が都市部へ流出したためこのような形になると考えられます。

いなべ市全体の人口ピラミッドと比較すると、モデル地区において25歳～44歳の男女が特に少ないことが読み取れます。年少人口の層は一定数いるものの、出産・子育て世代になるにつれ減少していることから、共働きなど生活の多様化に伴う便利な場所への移住や、「家を継ぐこと」に対する意識の変化などの要因により流出していると考えられます。出産・子育て世代の減少は直接的に少子化へとつながることから、この層の流出を防ぎ、流入を促していくことが重要です。また、最も層の厚い60歳代の世代が今後10年間で後期高齢者へ移行し、地域の担い手不足がより深刻化していくことが予想されます。

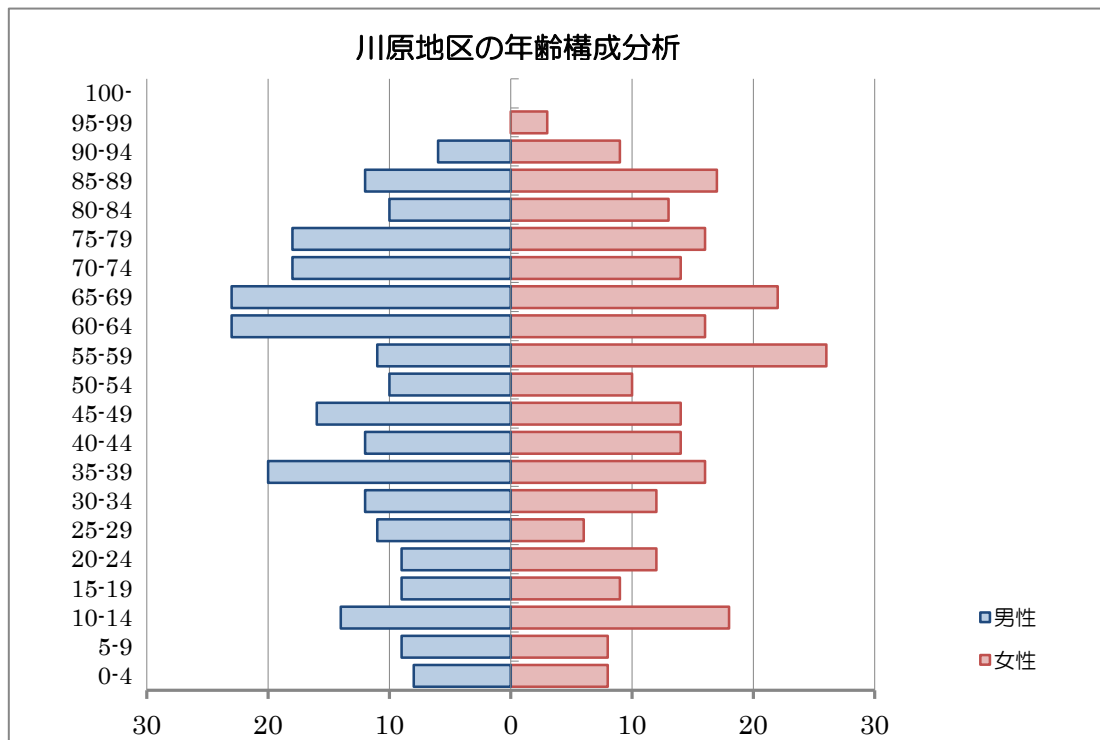
これらのことから、地域活動を担う中心的な層（60歳～70歳）が多い今、活力ある地域づくりに取り組み、地域愛が培われる環境を形成していくことで、人口減少に歯止めをかけていくことが必要です。

【川原地区】

人口推移・世帯平均推移



年齢別人口構成

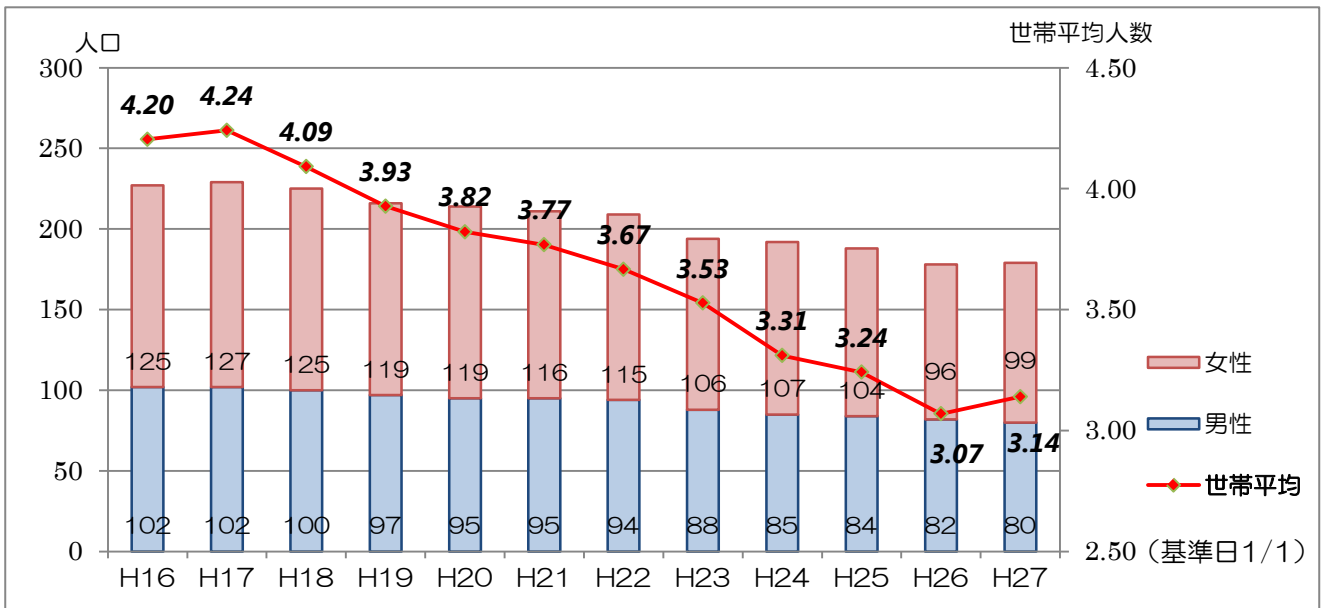


川原地区では、10年間で総人口の6.7%にあたる39人の人口が減少しています。人口が減少する一方で世帯数は増加しており、主に外国人労働者の単身世帯の増加が要因と考えられます。

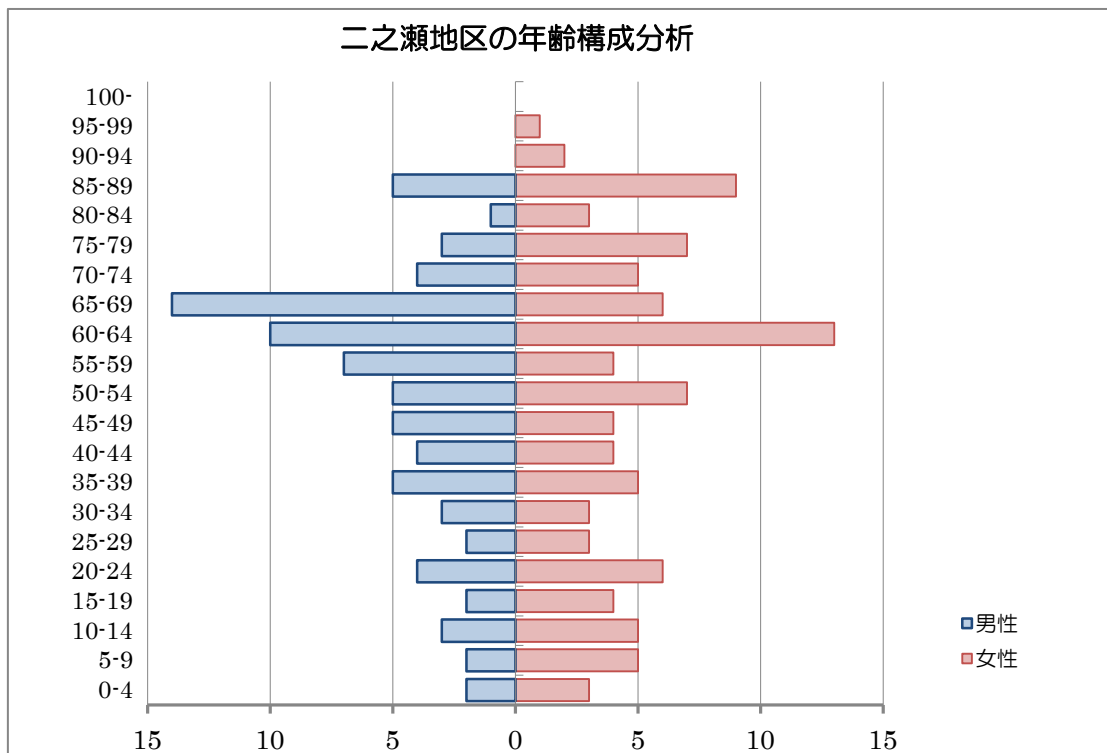
年齢別人口構成では、若年者（15歳未満）率が13%、高齢化（65歳以上）率が35%となっています。また、平均年齢は50.4歳です。

【二之瀬地区】

人口推移・世帯平均推移



年齢別人口構成

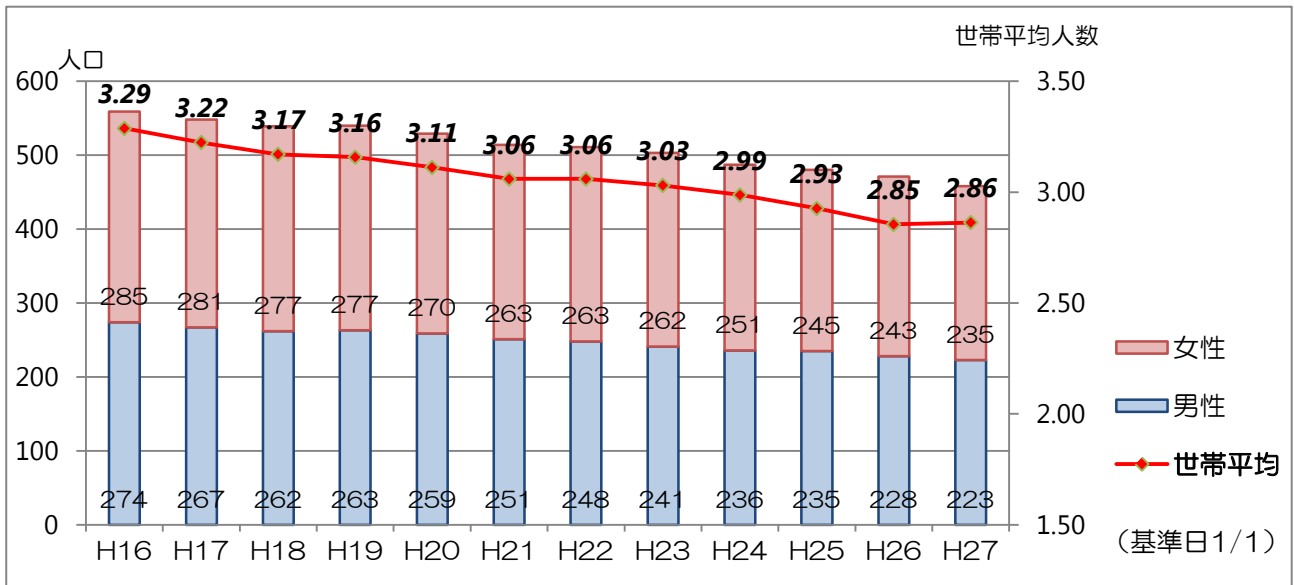


二之瀬地区では、10年間で総人口のおよそ21.1%にあたる48人の人口が減少しています。また他地区に比べ、1世帯あたりの人員が多い傾向にあります。

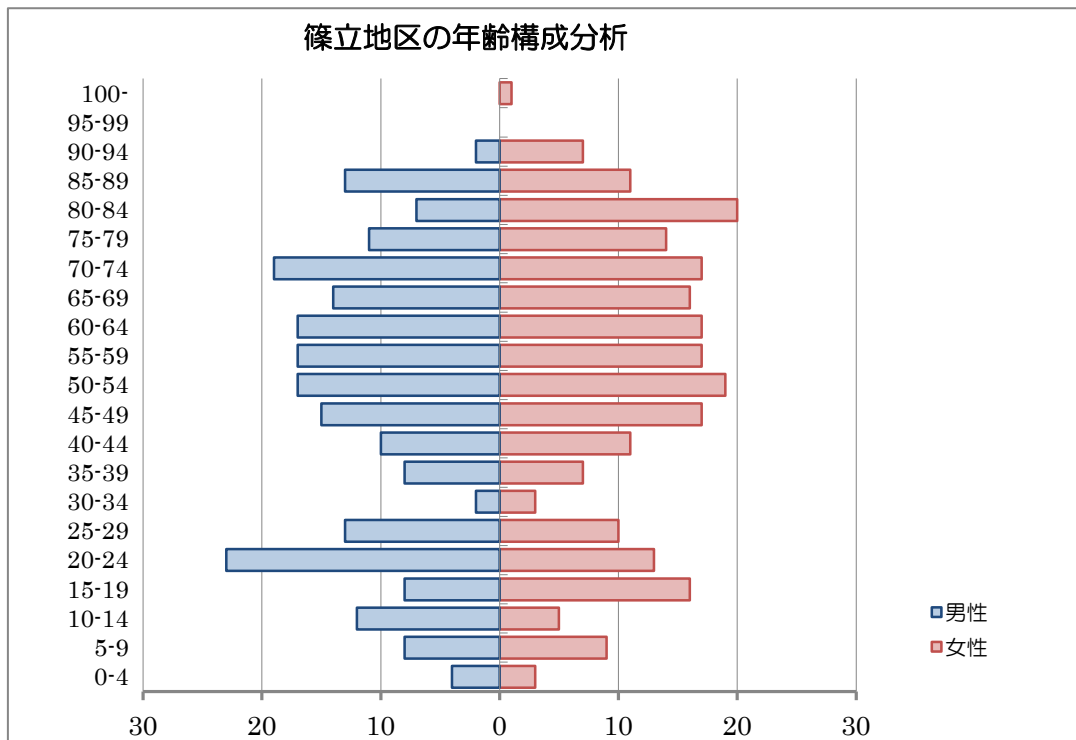
年齢別人口構成では、若年者（15歳未満）率が11%、高齢化（65歳以上）率が33%となっています。人口ピラミッドをみると、男女ともに60代、80代後半の方が多ことから、10年前は三世帯同居の形態が多かったものの、近年では若年層の流出によって二世帯同居の形態が多くなっていることがうかがえます。平均年齢は51.1歳です。

【篠立地区】

人口推移・世帯平均推移



年齢別人口構成

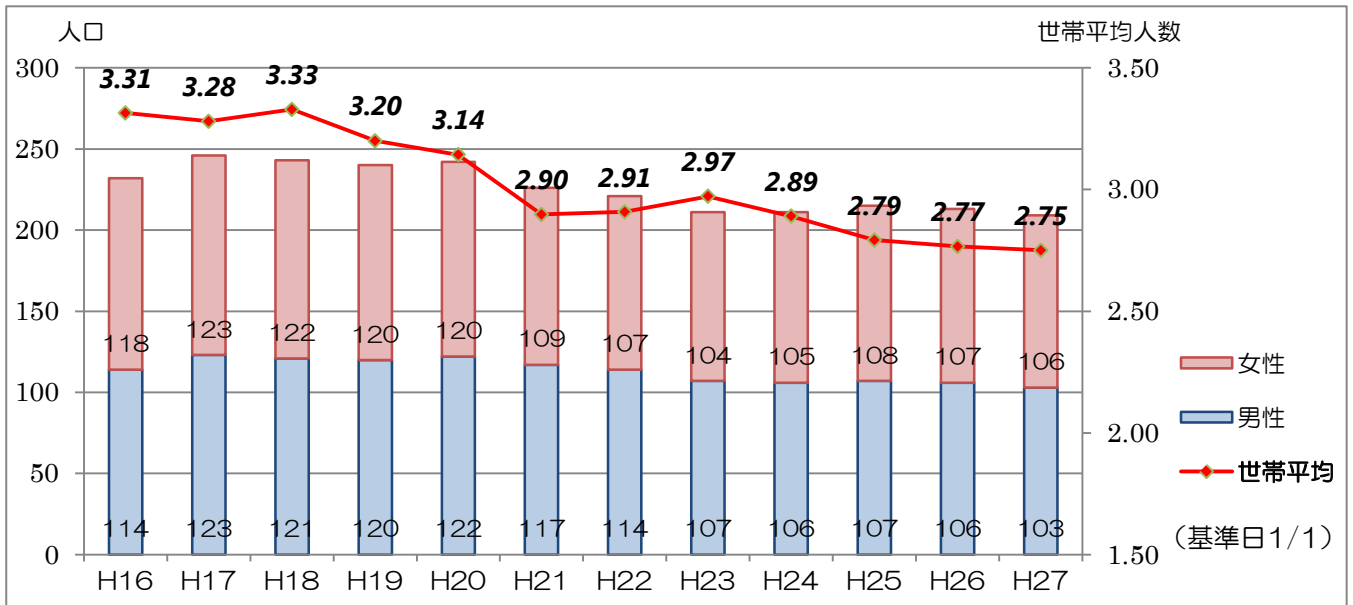


篠立地区では、10年間で総人口のおよそ18.1%にあたる101人の人口が減少しています。

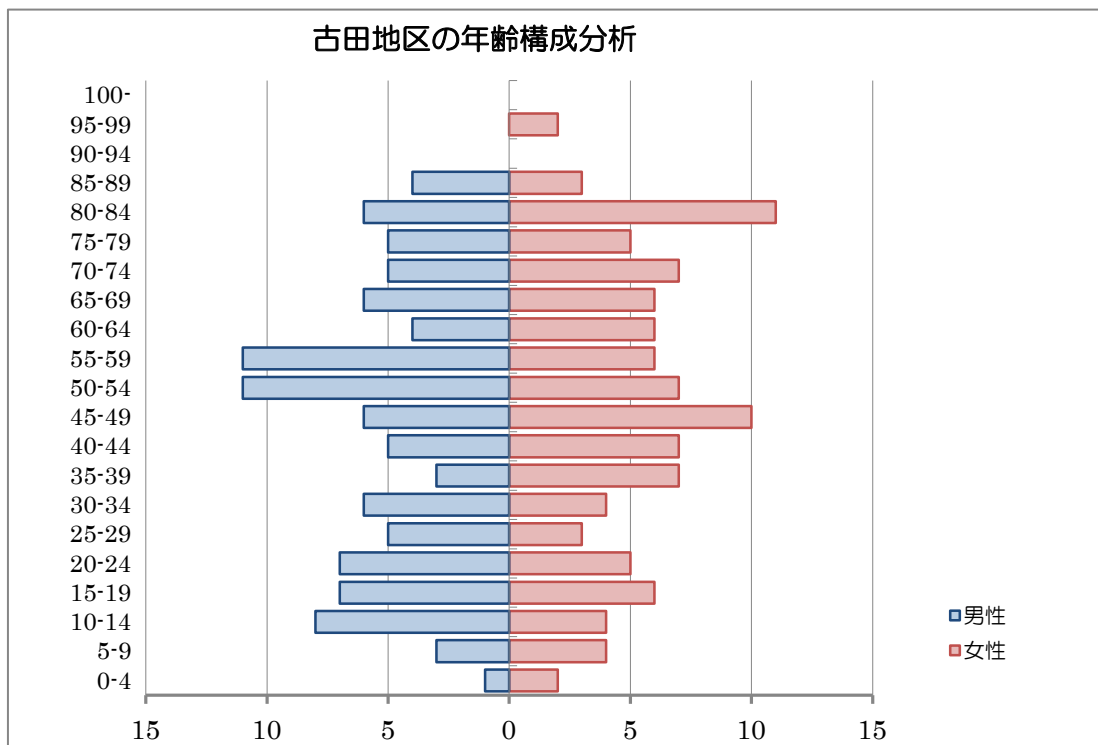
年齢別人口構成では、若年者（15歳未満）率が9%、高齢化（65歳以上）率が34%となっています。人口ピラミッドはひょうたん型で、30代の方が男女ともに少ない傾向にあり、要因としては白石鉱山の閉鎖が考えられます。またその後の新貝団地の開発によりその下の世代が増加したと考えられます。平均年齢は50.5歳です。

【古田地区】

人口推移・世帯平均推移



年齢別人口構成

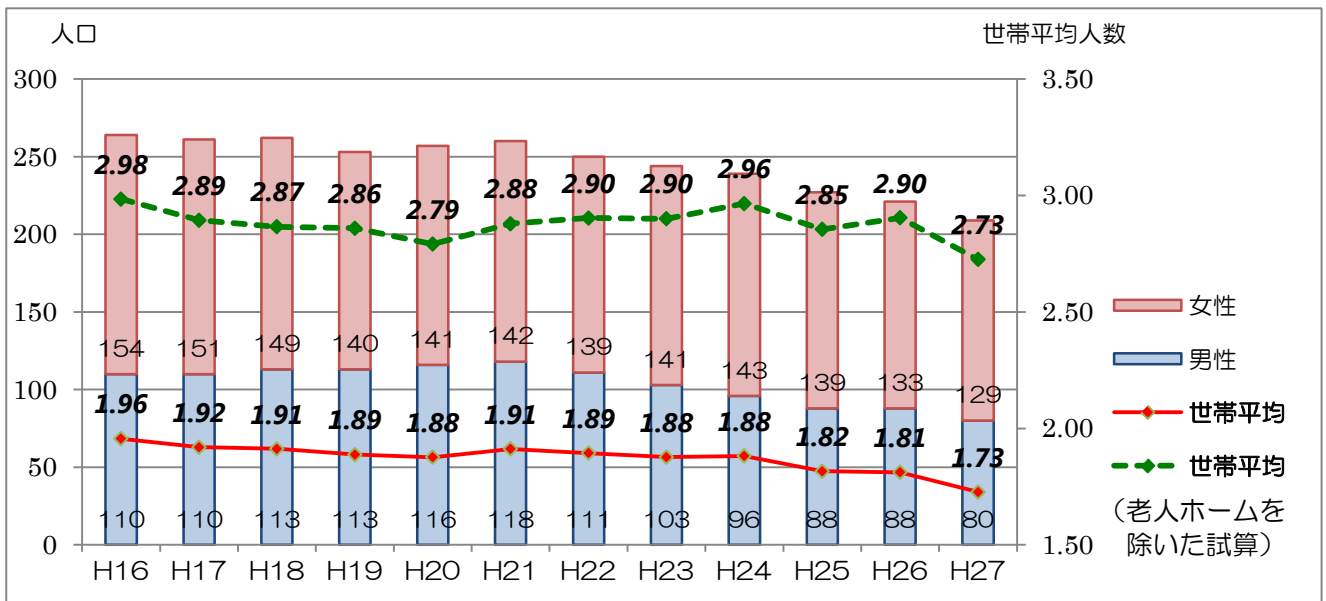


古田地区では、10年間で総人口のおよそ9.9%にあたる23人の人口が減少しています。

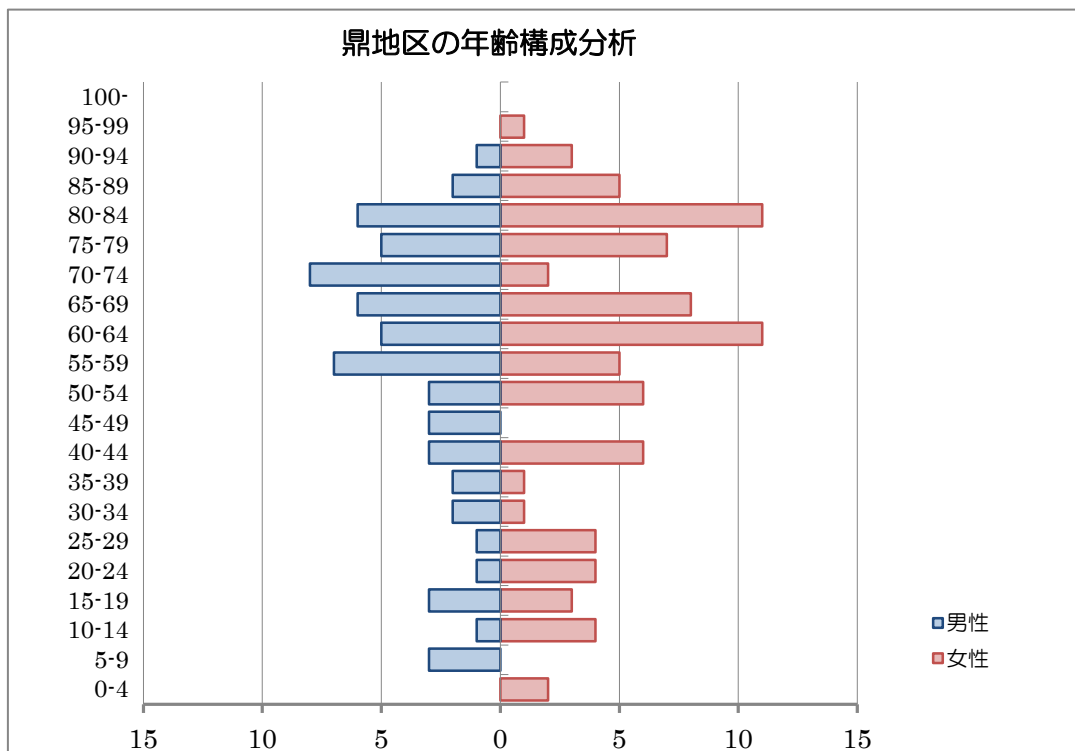
年齢別人口構成では、若年者（15歳未満）率が11%、高齢化（65歳以上）率が29%となっています。立田地区（古田地区・篠立地区）に見られる特徴として、0歳～4歳の層よりも、5歳から14歳の層が多い傾向にあります。山村留学などが理由と考えられます。平均年齢は48.1歳です。

【県地区】

人口推移・世帯平均推移（※老人ホーム入所者を含む）



年齢別人口構成（※老人ホーム入所者を除く）



県地区では、10年間で総人口のおよそ20.8%にあたる55人の人口が減少しています。また、平均世帯員数が1.73人（H27）ですが、これには老人ホームの入居者が単身世帯として計上されていることによると思われます。老人ホームの人数を除外して試算すると2.73人となりました。

老人ホームの人口を加味していない年齢別人口構成では、若年者率が7%、高齢化率が45%となっています。平均年齢は57.1歳です。

第6節 計画の期間

平成27年度から平成31年度の5年間とする。

第7節 計画の基本目標

緑豊かな自然や、自然と共生できるゆとりある空間がある本圏域において、魅力ある地域を形成していくことが重要となっており、障害や疾病の有無にかかわらず子どもから高齢者まで誰もが生きがいをもって暮らし、いきいきと輝く笑顔が地域に満ち溢れ、住民一人ひとりが、認め合い支え合って暮らす、住民が主役のまちづくりを進めることが重要となります。

また、そこに住む人がその地を誇りと思える地域づくりが重要となります。

この計画において目指すべき地域の姿は、“いつまでも住み続けたい”、“住んでみたい”、“訪れてみたい”と思える地域です。

“いつまでも住み続けたい” “住んでみたい” “訪れてみたい” と思える地域

豊かな自然・いきいきと輝く笑顔・誇りと自信

光り輝く地域

緑豊かな自然に囲まれ、住民一人ひとりが、認め合い・支えあい、だれもがいつまでも安心していきいきと暮らせ、住まう人が誇りと思える活力に満ちた地域

第80節 計画の基本方針

- (1) いなべ市の豊かな自然を活用した、「地域（地元）に喜ばれる」「地域を愛する」グリーン・ツーリズムを推進します。
- (2) いなべ市の豊かな自然を活用した、農業体験などの参加・体験型観光を含めた、多様なグリーン・ツーリズムを推進します。

このことから、交流活動による生きがいづくりや、農産物の販売や農作業体験の受け入れ等による交流人口の拡大と雇用の創出を図ることにより、地域の活性化を目指します。

第3章

地域調査

第1節 いなペググリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート

いなペググリーン・ツーリズム推進計画の策定にあたり、平成26年12月にモデル地区に在住の世帯を対象に「いなペググリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート調査」を実施しました。この結果から、主な市民意識の動向をまとめました。

(1) 調査対象数等

	川原	二之瀬	篠立	古田	県
配布世帯 (配布部数)	145世帯 (290部)	60世帯 (120部)	160世帯 (320部)	75世帯 (150部)	54世帯 (108部)
回収数 (回収率)	222部 (76%)	73部 (60%)	232部 (72%)	102部 (68%)	74部 (68%)

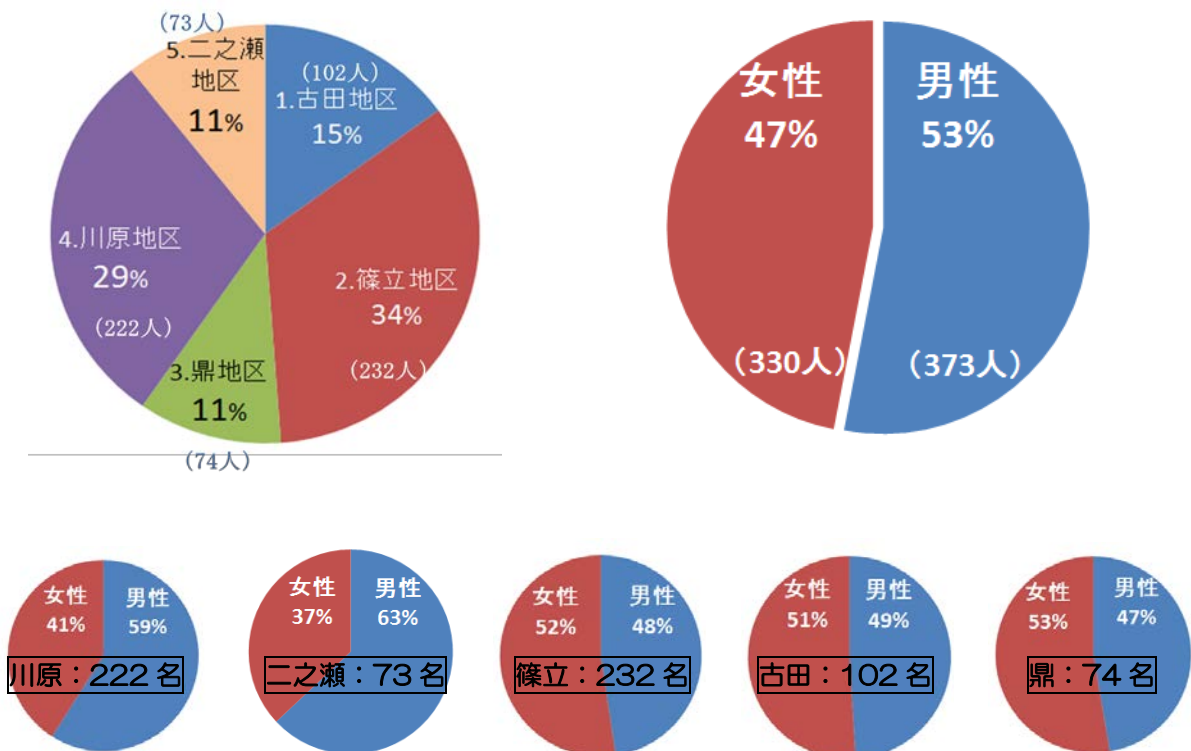
(2) 調査方式

自治会による自記入式アンケート・定量調査

(3) 調査期間

平成26年11月21日から12月31日

(4) 各地区の回答者数

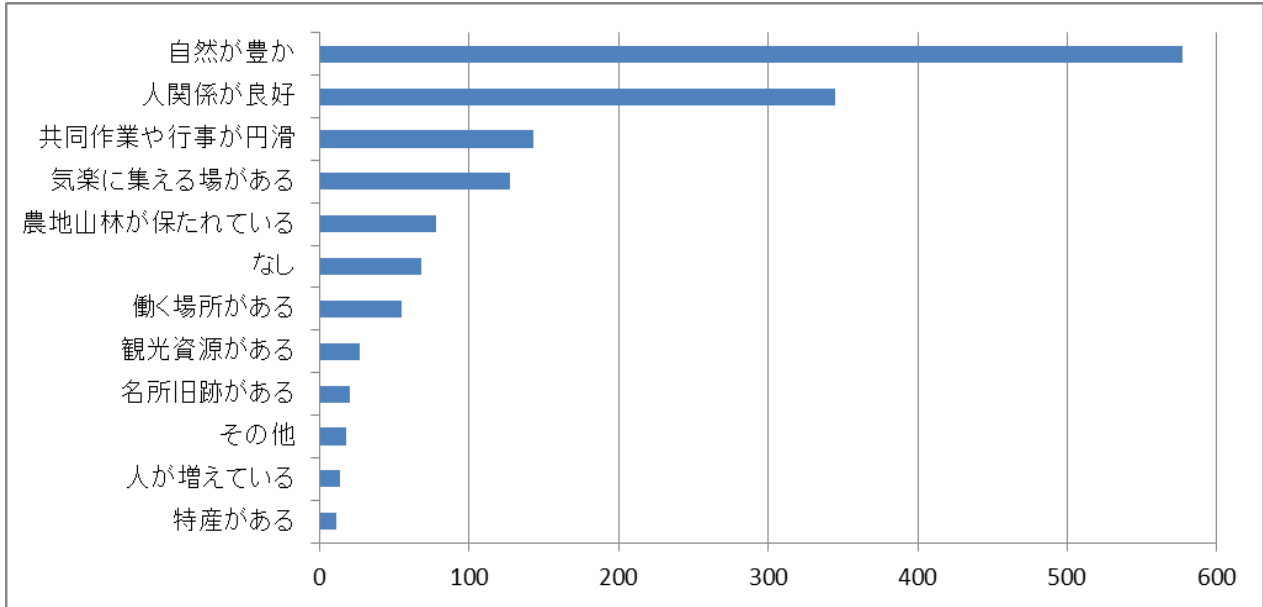


(1) 地域の良いところ

問 地域の良いところについてお答えください。(〇は3つまで)

地域の良いところは、自然資源と人柄(人間関係の豊かさ)への評価が各地区とも高い。一方で、観光資源や特産・名所旧跡などの“場所・モノ”といった物理的な資源への評価は少ない。

(複数回答)

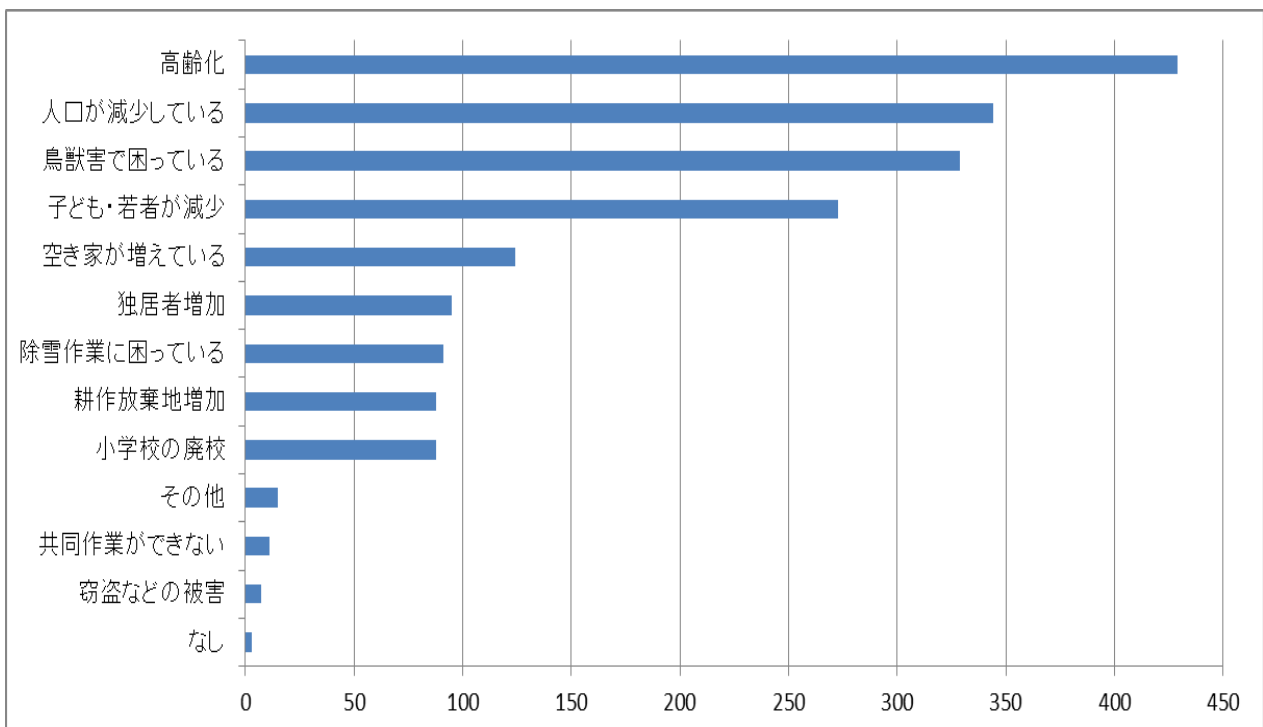


(2) 地域の課題

問 地域が抱えている課題についてお答えください。(3つまで)

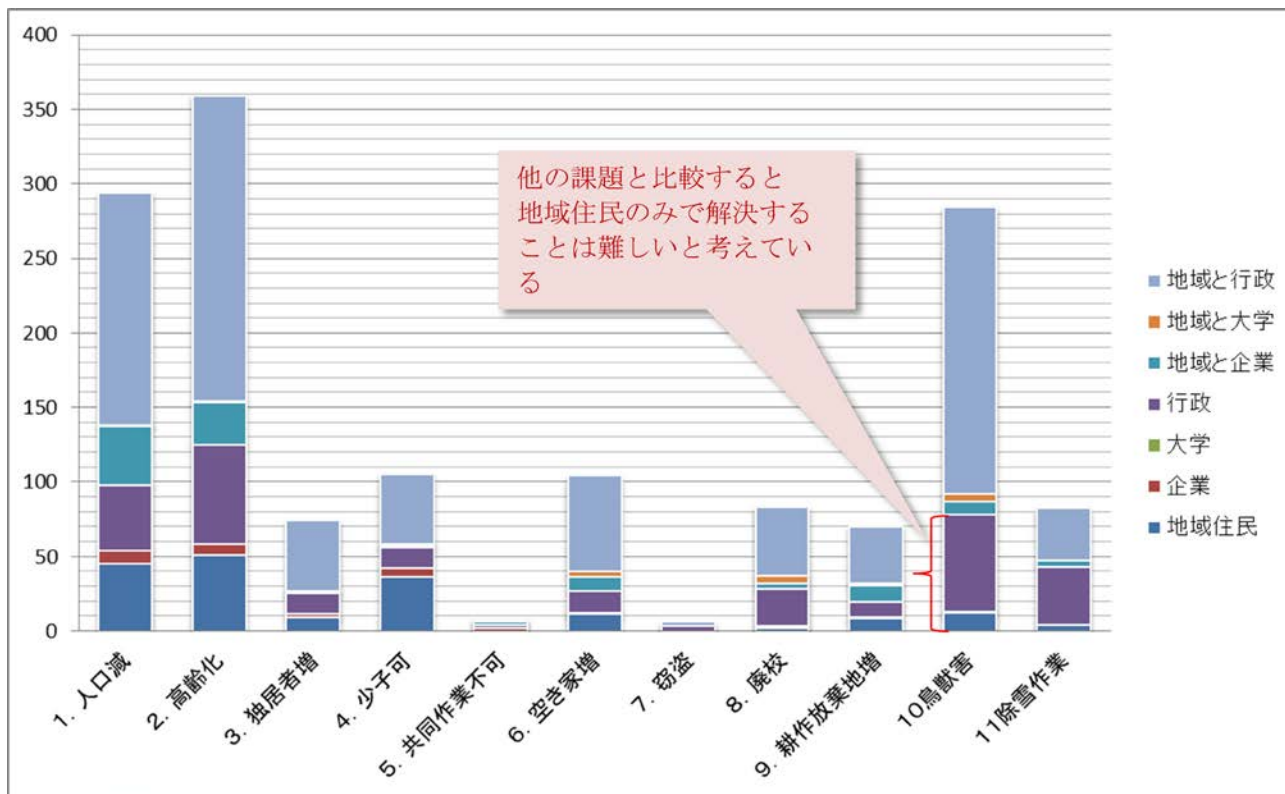
地域の課題は、高齢化、人口減少、鳥獣害、少子化の順となっています。特に高齢化はもっとも大きな課題として意識されています。地域固有の課題としては、鳥獣害対策があげられています。

(複数回答)



問 その課題を解決するためにはどの団体が取り組むと有効であるかお答えください。

各地域課題へ取り組むべき団体は、地域と行政が一体となって取り組むことへの認識が高く“地域住民が取り組むべき”という意見も多く見られます。鳥獣害については、地域住民で解決することは難しいと考える傾向が見られます。

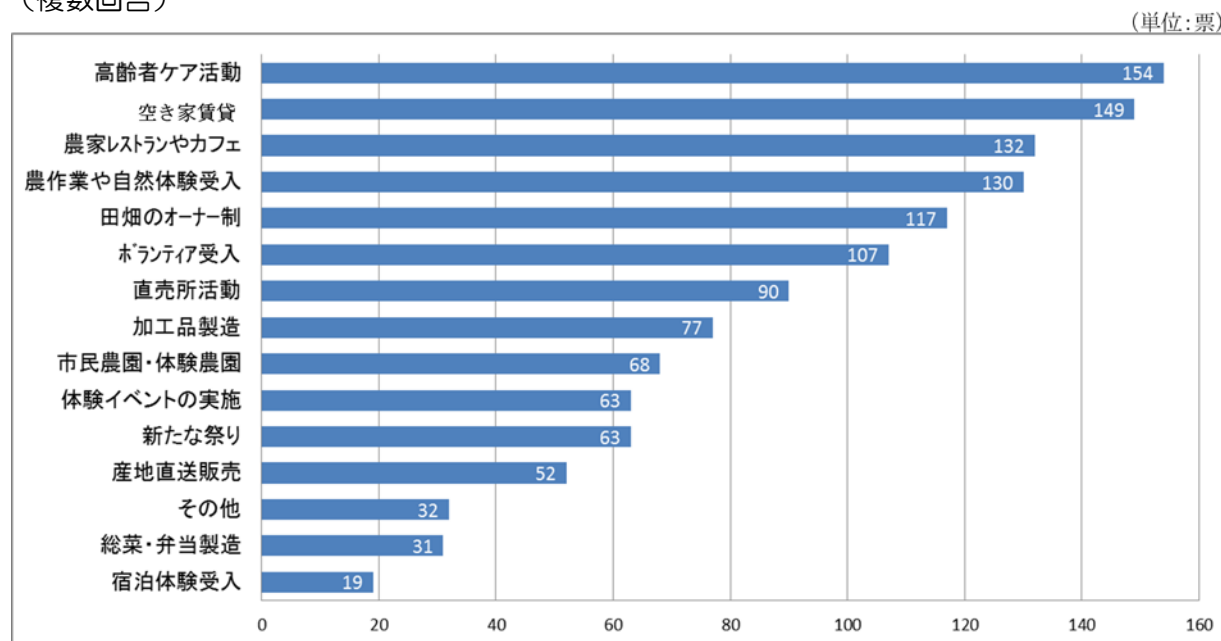


(3) 地域を盛り上げていく活動について

問 その課題を解決するためにはどの団体が取り組むと有効であるかお答えください。

「高齢者ケア活動」や「空き家賃貸」など生活の課題に密着した活動への興味が高いと言えます。GTの要素としては、農家レストランや農作業受け入れなどがあげられています。

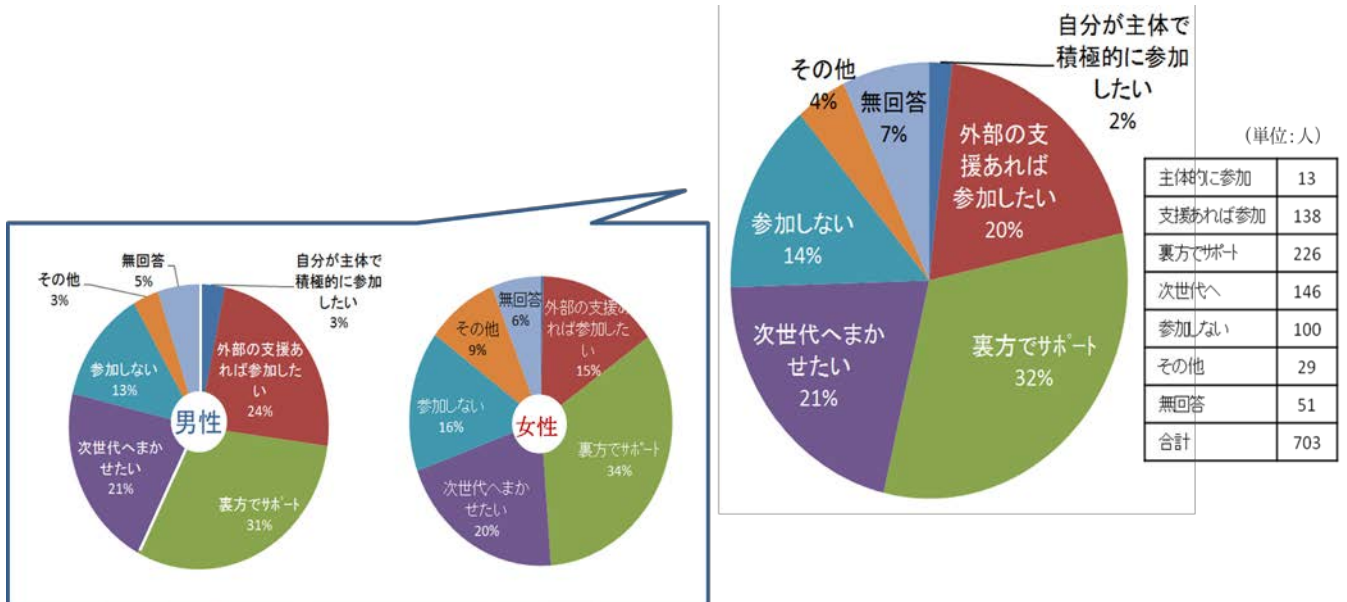
(複数回答)



(4) グリーン・ツーリズムへの参加意向

問 今後地域でグリーン・ツーリズムを行うことになった場合、あなたは参加しますか。

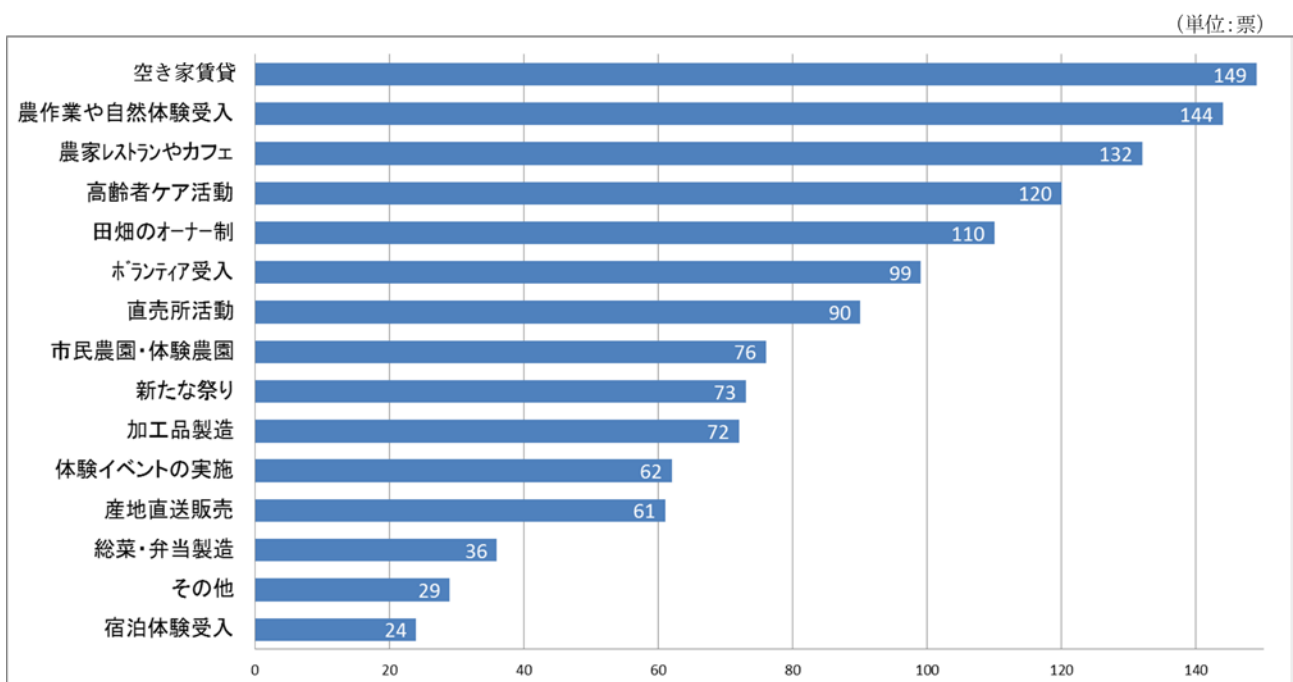
“主体的・外部の支援があれば・裏方で参加”までを参加意向がありと捉えると、全体では、約半数には何らかのカタチで参加する可能性がある。男性と女性を比較すると、女性は半数以下に対し男性は56%に参加意向がある。



(5) 地域の活性化に期待する活動

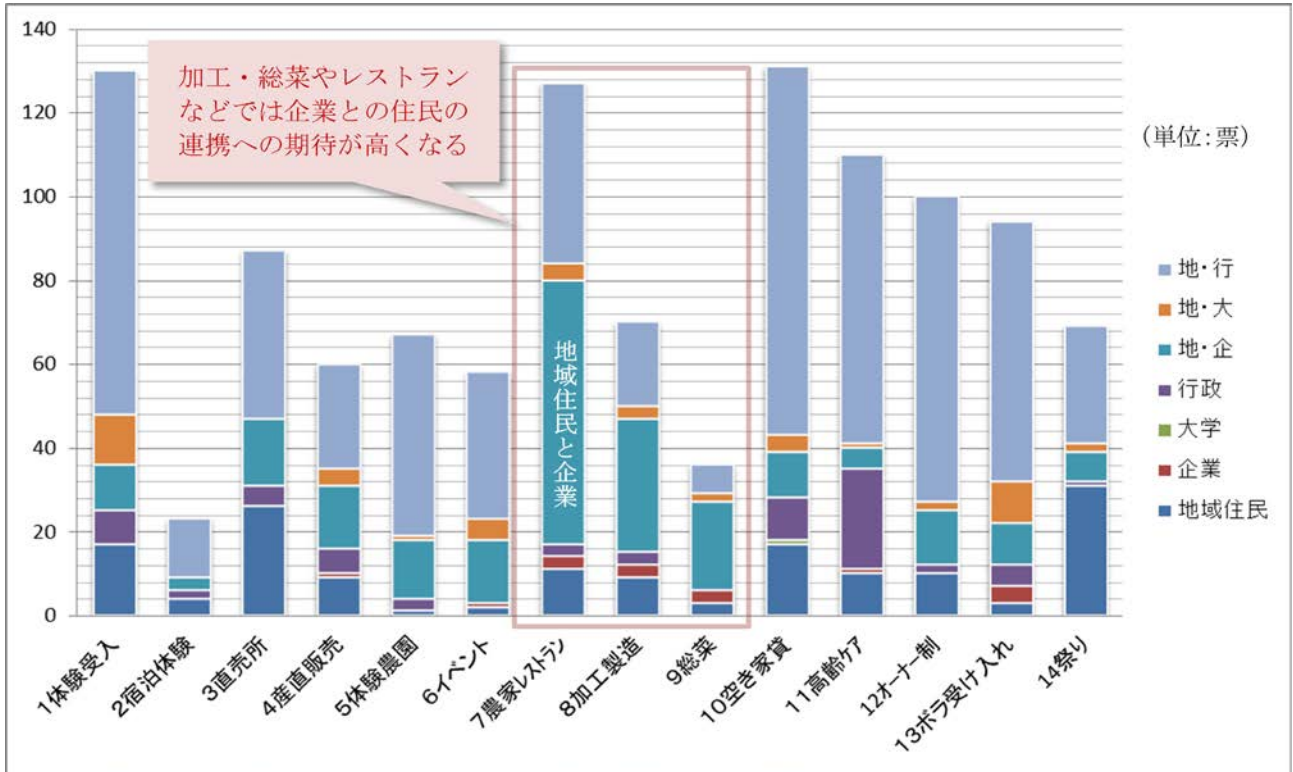
問 あなたの地域において、地域が活性化されると思われる活動をお答えください。

“興味があること”と比較すると、体験受入や農家レストランなど交流に近い活動が上位になり順位に入れ替わりが見られるものの、上位7位までは同じ項目が並ぶ。



問 あなたの地域において、地域が活性化されると思われる活動をお答えください。

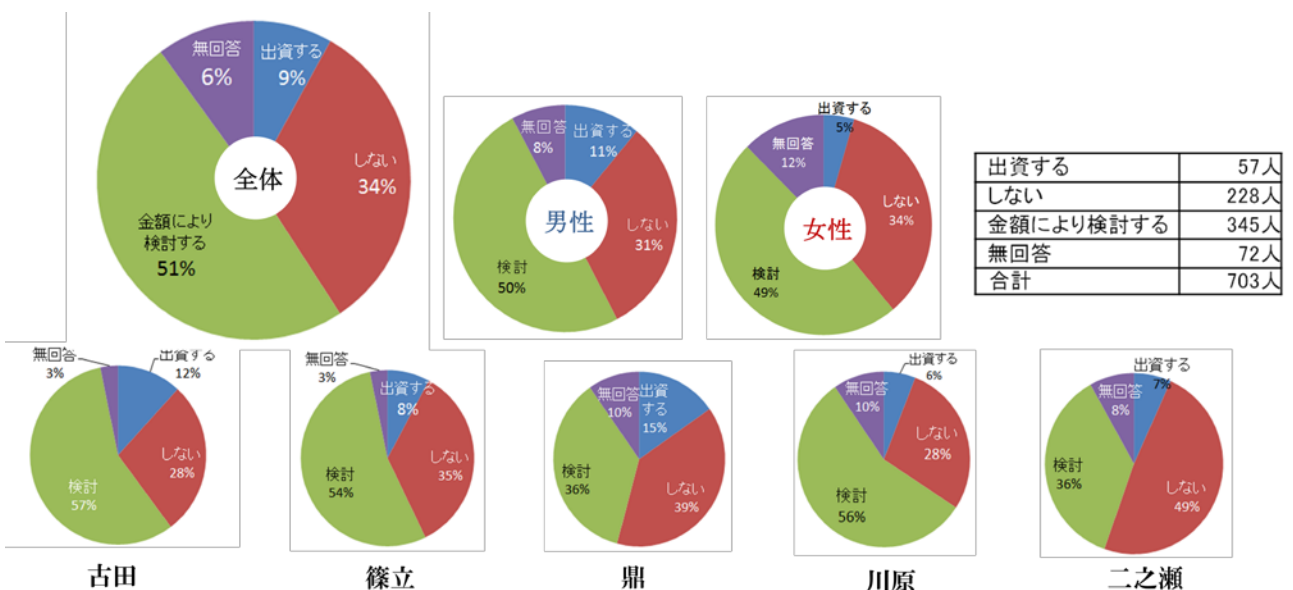
地域活性化の各項目に取り組むべき団体のあり方は、地域住民と行政が一体となって活動すべきという認識が高い。農家レストランは企業への住民と企業との連携への期待も大きい。また、直売・総菜・イベントなど商品の加工や販売・イベント面でも企業との連携を望んでいる。



(6) 出資の意向

問 あなたの地域で地域事業を始めることになり、出資を求められた場合出資するかお答えください。

地域事業への出資は、金額により検討するが最も多く、出資しないは全体の約3割。この傾向は各地区でも同様で、男女間でもほぼ同じ傾向が見られた。



(7) 地域の魅力

記載事項
県から川原に通じる坂の上から見る藤原岳の風景や梅林公園から見る藤原岳
川原線の峠を望むダムと藤原岳、ねがい県橋
廃村となった深尾地区の有効利用
・藤原町山口にある「Attente」の焼きたてパン。(モーニングにしている。) ・北勢其原にある「tina tina」というカフェがかわいい雑貨屋さんもしている・「Vente Vente」という美容院の裏で陶芸教室をしている ・「こんま亭」のタルトが美味しい「Amiens」のパフェがおいしい。モーニングも・PoPo Cafe がご当地メニューあり、おいしいモーニングあり・石樽に「コナラ」という隠れ家カフェがある
梅の販売、山芋も作っていた
パークゴルフ場、ボタン園、梅林
いなべ市農業公園(梅祭り、梅もぎ体験など) いなべ市エコ福祉広場(ボタン祭り、パークゴルフ等) 水源公園、中里ダム
散歩しながら山菜(ワラビ等)が採れる
中里ダム(鈴養湖) 神社の大杉、広野林道、大洞林道
中里ダムの有効利用、つり、ボート、カヌーの解放
水道水がおいしい
遊学祭、もみじ祭り、拘留孫岳、風穴、元観音、長楽寺
遊学祭、収穫、雪
そば畑とそば打ち。三岐鉄道、聖宝寺、藤原岳
川にも山にも近い所が良いと思います。立田のホタル
遊学祭などの地域のイベント。休日に小学校で保護者が指導してソフトボールをしている。
藤原岳、阿下喜温泉
山から流れるおいしい水が多くある場所。ホタルが見れる川。立田小学校の行事いろいろ。
藤原岳、御池岳、烏帽子ヶ岳。峯、鈴鹿山脈の登山。※尚、登山道の整備を充分にしたらならば。
遊学祭、収穫祭もみじ祭
篠立の水、藤原岳、牧田側の川下り(大垣市上石津町と)

記載事項

湧水の水くみ場

素晴らしい公園があるので手を入れて遊びに来てほしい

ホタルがよく見れる川がある

いなべの源流、ナローゲージの北勢線

ホタルの里、紫光窯、長楽寺(馬頭観音)。1年を通して何らかの花や花気が咲き、木々の新緑から黄葉、紅葉があり、ハイキングや散歩やランニング、サイクリングができる場所(コース)の途中で軽い食事ができたり喫茶ができるよう総合的に考えながら、自然と触れ合ったもらえる場所づくりを新しく作る必要がある

風穴、遊学祭、ほたる

遊学祭や夏祭りや秋祭りと言った祭りがたくさんあり楽しめること。

篠立の風穴、篠立の遊学祭

白石公園(紅葉の季節、春の桜の花の見物)、散策(散歩)

おいしい水の湧く所。ジョギングできるようなコース、学校、篠立南、古田の農道、東海自然歩道、古い街並みを整備し、馬籠とかのようにつけものや手焼きせんべいを売る。シルバーさんとかで古い空家を使い、小さな店を作っては？

自然と地域づくり

立田公園の桜、紅葉

梅祭り

長楽寺と林道からみる風景

山の神が年に一度行われる

風穴、ホタルの飛び赤尾川、竜王の大杉、遊学祭

篠立地区の中心地に広がる山林の公園化(国道と県道にはさまれた山林(竹林含む)の竹、木を整理し区民の憩いの森化したい)

農業公園、聖宝寺、もみじ祭り

地域の明るさ

いなべ市が一望できる拘留孫岳 特に三国岳、烏帽子岳、拘留孫岳の立田三山への登山はオススメ

龍王登山

立田小学校のホタルの飼育・発表 年間4回のイベント 長楽寺

記載事項
長楽寺(歴史が古い仏像) 山の上からの眺め(立田公園、展望台、拘留孫岳)、もみじ、いちよう
三重用水ダムの利用 員弁大池の利用 風穴の利用
黄金大橋から見下ろす稲穂が黄色く波うった時の景色、夕方 4 時ころ 日の入り前の影がとてもきれいです。(秋の田んぼの収穫前)
地区主催の遊学祭(5月)、地区主催の収穫祭ともみじ祭(11月)、小学校行事 学習発表会(1月)、小学校行事 ホタル研究発表会(6月)、ボランティアによる森の学校(土曜学校)、地区・小学校行事 山の神(12月)
5月遊学祭を行う風穴の探検や物作り、食べ物、餅つき。 11月収穫祭もみじ祭 野作物の販売小さい子のゲーム、食べ物の販売。10月秋祭り
藤原の湧き水、遊学祭、古田遊歩道 etc
山の神、遊学祭、ホタルの会
ホタルが飛び交う川
テニスコート(無料)、四季の草花(古田地区のみの在来種の群生 ゲンノショウコ・ナシテンハギ etc)、東の田から見る風景、歩いて岐阜に行ける所、積雪、空気、飲料水
とても綺麗な水、ホタル、裸足で遊び回れる自然
カブトムシが捕れる森や天井に竜の絵が描かれたお寺、お城の跡
古田遊歩道、ほうすけクラブの古田里山楽考
教育
アケビが採れる森
小魚が泳ぎホタルが舞うきれいな川。蛙の大合唱。鹿の運動会にタヌキの夜間のみまわり。朝の空は星が輝き自然のプラネタリウム。人はやさしく、心に余裕がありあたたかい古田。
赤尾川(ホタル)
秋葉山からの風景、東林寺の白滝
東林寺(白滝)、自然歩道(秋葉神社周辺)
田切川での川遊び
養老の裏滝があって夏場等には避暑地に最適。桜公園の高台からの遠景は素晴らしい。
登奈井尾村の紅葉が綺麗。桜公園
登奈井尾林道を歩いて川で魚釣り

記載事項

眺めの良い山登り（遠見地区）綺麗な水流の登奈井尾林道の散策。農作業体験（米づくり）

東林寺の白滝、おいしいお米

丸山神社、東林寺、登奈井尾林道、秋葉神社その上流等を含めた観光

東林寺の滝、秋葉神社からの景色

桜がきれいな公園、見晴らしの良い高台

東海自然道の活用

化石が採取できる場所

登奈井尾林道の紅葉

秋葉神社及びその周辺の眺め

山芋

東林寺の白滝、白滝のライトアップ

東林寺の白滝、秋葉神社

白亀薬社

雪が降ったらカマクラが出来ます。

農作業体験（米づくり、野菜づくり）

隠れてはいないが、石樽峠は綺麗&滋賀まで行けて最高

タケノコがよく取れるやぶ、イモリが多く住む川

子供たちが遊べる公園やキャンプが出来るところをつくったらどうか？東林寺をもっと綺麗に

夏は白滝が涼しくていい場所だと思います

気軽に行ける温泉（六石高原ホテル、阿下喜の温泉）。大きなキャンプ場（青川）

東海自然歩道（四季）

農業公園、秋葉公園からの景色

桜、紅葉、川遊び

ブランド米、川原の白滝、秋葉神社

秋葉神社近くに眺めのよさと新緑紅葉はとてもよい

四季を彩る自然の美しさ。マイナスイオンを感じられる東林寺。

記載事項
東林寺、赤宮さんの景色
秋葉山からの景色、林道ハイキング、棚田風景
東林寺の白滝、山菜採り、きのこづくり
自然が多い 日尾神社など他地区に無い美しいところ
二之瀬の日尾神社には大杉（400～500年）があり、古い神社なので紹介したい。
弁当谷、洞谷のわき水は自由に採れ、以前は名古屋方面から採水に多くの人が見えた
1.大きな杉（一本杉、二本杉、三本杉）がある日尾神社 2.佐風尾林林道は自然歩道にちょうどいいと思う。 3.洞岸林道の自然（特に川辺の美しさ）
二之瀬味の景色（春、秋）が美しい
二之瀬日尾神社 杉の木
日尾神社
四季を身近で感じられる風景
自然、農業体験
二之瀬生産森林組合の佐風尾林道（いなべ随一の完全舗装林道）を保育所、小学校、中学校、市民の散歩、遠足、ドライブ、自転車乗り、山観光等に利用する
ふなみそ



(8) 地域に伝わる自慢の料理

記載事項
じゃがいもとたら（魚）の汁。みそ汁みたいに作り、最後に長ねぎを入れる。※魚のくさみを消すのに酒を少し入れる。
アホ炊き。（本づけしたたくあんを一度塩を抜いて、煮干しや昆布を入れてもう一度味付けをして柔らかく炊く{酒、しょうゆ、サラダ油、とうがらし）
山菜
芋を入れてつく餅。さつまいもを入れて一緒に着く。餅が柔らかくて甘くなりおいしいです。
山椒の佃煮
いばら餅
川のり（員弁川の源流で自然に川の石に生えるのり）現在は見たことがない
かきもち、土地の葉とみそのセット、かやくごはん、山芋料理
いも団子、里芋と米（もち米とうるち米）を炊いて、ついて、丸めて、焼いて、みそだれやショウガダレ、ごまだれをつける。いばらもち、小麦粉をこねてあんを入れ、がんとち葉ではさみ、むしあげる。草もち、米こともち米を蒸し、ヨモギを入れついて団子にする。（あんこいれとかきなこをまぶすなど）
押し寿司(箱寿司)・・・子供の頃箱にすし飯を入れてその上に具を飾り押しした彩りの綺麗なお寿司をよく作ってもらいました。
山菜汁、かきもち(かやの実入)、草餅、山菜(天ぷら)
法要の時の引き出物に太巻きすしを作出したことがある
ヒラタケの酢しょうゆ煮 ヒラタケを湯がき、さまして大きい物は手で裂きしぼる。鍋に砂糖としょうゆ、酢を入れ煮立たせる。ヒラタケを入れてゆっくり煮る。
あほだき①たくあんの古づけを塩抜き②半月切りにし、大きな鍋で油で炒め③しょうゆ・みりん・とうがらし等で味付け)
鮎味噌
長芋 焼く、蒸す
酢素麺
・がんとちだんご ・カボチャの餅 ・大根と厚揚げの煮物
とうがらし汁 葬儀の時につくる
柿、あまぼし、さつまいも、野菜の漬け物
いとこ苧（さといも、小豆、大根等）あほだき（たくわん）

記載事項

かやくご飯

芋汁

自分の料理（ワラビ寿司）※灰汁を抜いたワラビを芯にしてわさびをご飯の上のにせ海苔に巻く

里芋団子※白米+里芋を煮る。小判型にする。フライパンまたはホットプレートで焼く。みそ、しょうが
たまり、五平みそなどをつける

あほだき（つけものを水抜きにすることから所帯無し炊きとも）※つけただいこんをだして二日ほどつけて
出して（アホにする）刻んで輪切りにして水で炊き柔らかくなったら油を入れてたまりを入れてだしを入れ
てしばらく煮る

蒸しダンゴ※ガンダチの葉二枚で包んだあんこ入りのダンゴ

菜漬け（小さい大根の葉っぱと根の部分）

ダイコン汁

いばら餅、味ご飯

鍋の底でこげたご飯を菜漬けでお握りにする

葬儀のお汁（たまり汁）には必ず唐辛子が入っていました。今は個人の葬送もなくなり戦中より自然消滅し
ました

山芋汁料理、

養泉寺などででるお汁

スモモ、山桃、50年前子供の頃食べていた。

いばもち、雑煮

山菜料理(山菜天ぷら、きゃらぶき)

子供の頃にサトウキビを畑につくってもらって食べた。粟、キビをつくり餅で食べた。

菜づけ（カブラ漬け）、赤みそ汁（大きな大根）

むしダンゴ、昔は春の田植えのとき（あぜのはら祭り）昔秋の取り入れ後の祭りなど

アワ（アワモチ）※モチのように臼でついた

山芋汁、芋煮

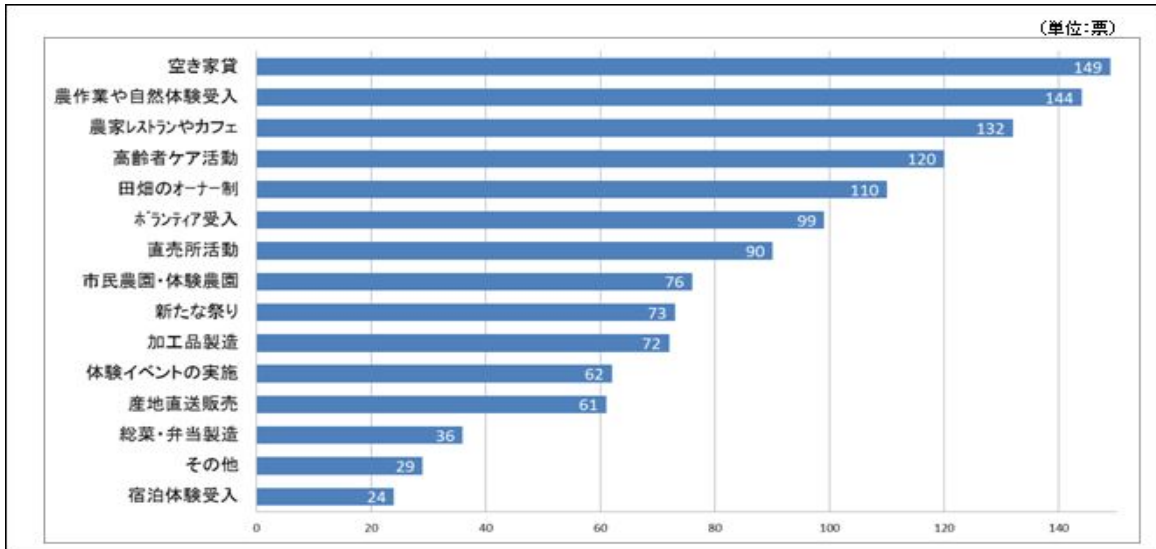
以前自宅で行った葬儀のときにつくったとうがらし汁、山芋をすり鉢ですって山芋汁をつくる

ふなを骨がくだけるまで炊き味噌と混ぜる←カルシウム大

報恩講のおとき

【参考】

市民アンケート調査の「地域活性化に期待する活動」について、全国の状況を参考として今後の取り組みの参考として記載します。アンケートの結果にもとづいて、今後いなべ市の各モデル地区において実施するのであれば、これからはこのような先進地の状況を鑑み、地域に適したやり方に応用して実践することが重要となります。



※アンケート調査結果の上位7項目について次のとおり参考事例等を記載します。

1. 空き家の貸し出し

項目	内容
先進地の状況	空き家バンクを設置して空き家情報を提供する自治体もあり、移住を進める際の重要なアイテムになりつつあり、事業効果は高い。
市の現状の一部	いなべ市でも課題となっているとおり、仏壇の問題や家主が手放さないなど、様々な要因により、賃貸に関する合意が得られず進まないケースも多いかと考えますが、不在家主に一定のペナルティを科すことで解決するケースもあります。 【参考】 ①定期的な草刈り、家屋の清掃等の義務付け ②それができない場合は、行政などへの管理委託等 ③それも無理であれば、手放していただく
課題や問題点	賃貸に関する問題より、移住してきた人（家族）が地域に溶け込むことができるかどうかの方が大きな課題であり、地域をあげて受け入れる体制が重要となります。

2. 農作業や自然体験の受け入れ

項目	内容
先進地の状況	交流事業の基本的な実践メニューであり、既に全国の各地で行われていることから、最もなじみのある普遍的な実施の手法となります。
市の現状の一部	既にいなべ市内でも小学校や保育所で実践されていると思われる内容で、芋掘りやバケツ稲などがこれにあたります。そのため実施のフィールドを今回のモデル地区に設けることで容易に実施できることとなります。
課題や問題点	受け入れる側の人材にエンターテイメント性が求められることや、安全面での対策及び徹底などが課題となります。また、先進地において体験の受け入れのみで利益を出しているところは少ないことから、主たる収入源を別に確保し、副業として体験の受け入れを提供することが重要となります。



3. 農家レストランやカフェ

項目	内容
先進地の状況	食は1日に3度の機会があり、人間の生活には欠かせないものであることから、飲食を通じて地域の活性化に取り組むケースは多くあります。また、地域性や季節感も表現もしやすいことから人気を得ています。
市の現状の一部	既に多くの事例があり、いなべ市にも全国的に有名な「フラル」があるなど、気軽に実践できると思われがちですが、料理を表現するセンスが求められます。
課題や問題点	飲食店は、設備投資に経費を要することから、国や県の補助金などを有効に活用することが重要となります。また、運営には、食材費・人件費・光熱水費などの経費を要することから、わずかでも利益につなげることが重要となります。 それ以前の問題として、人がたくさん来るお店になれば儲けは出ます。ランチだけの提供で席数20前後、1日1.5回転ほどでは儲けはできません。

4. 高齢者ケア活動 ～グリーン・ツーリズム的な視点からの解説～

項目	内容
先進地の状況	一人暮らしのお年寄りへのお弁当の宅配、食材の提供などは、人とのかかわりを基礎として地域に住むお年寄りを守る基本的な活動につながることから、貢献度は高いと考えられます。
市の現状の一部	運転代行や健康相談などは、法律に抵触する可能性もあることから、行政や社会福祉協議会との連携が大切であり、事業として実施するには役割分担が重要となります。
課題や問題点	高齢者ケアについては、採算性よりボランティア性が高い活動になると考えられます。

5. 田畑のオーナー制

項目	内容
先進地の状況	空き家の貸し出しと同様にグリーン・ツーリズムではごく一般的な手法となります。従来の農作業にとっては収穫の前からオーナーが付くことで、売り上げが確約されます。
市の現状の一部	オーナーが自ら収穫する姿を見ることは励みになり、質が高ければ高額取引となる可能性があります。天候不順などで質が低下すると保証が求められることがあります。
課題や問題点	オーナーを見つけることは容易ではありません。 【参考】 ①市民：市の広報誌、地域新聞 ②市外住民：新聞広告など

6. ボランティア受け入れ

援農や農村生活支援等のボランティアは、東日本大震災以降に急激に増加しており、社会全体に「地域への貢献」に対する意識が増加しています。該当者は20代から30代前半の男女、50代後半以降の男性に多くみられ、自己の存在意義を認めてもらうことが主たる目的となっています。

7. 直売活動

全国に1万軒以上の直売所が存在し、市場規模は1兆円を超え、いなべ市にも既に有名店が数軒存在するなど、最もメジャーな農山漁村の産業です。しかし、今回の実践地区では、既存の直売所と競合するようなやり方ではなく、日曜市や物産イベント、軽トラ市的な活動により、コミュニティを盛り上げるための活動を実施することが効果的であると思われます。

第2節 空き家・未利用施設の調査（京都産業大学報告書抜粋）

（1）空き家調査

学生チームは、10月初旬から空き家調査および企画提案の準備に入った。まず、インターネット等でいなべ市について調査し、メンバー全員でいなべ市の特徴や問題点について理解を深めた。ついで、さらに議論と準備を重ね、平成26年11月7日、いなべ市の現状を自分たちの目で確認するため、予備調査を実施した。

その後、他の自治体の作成した空き家調査票などを参考に、同年11月26日に篠立地区で試験調査を行い、空き家調査のノウハウを確認した。これをもとに、オリジナルの空き家調査票を作成し（資料1）、同年12月5日、平成27年2月4日にすべての地区で空き家調査を実施した。

調査では学生たちは数名ずつの班に分かれ、一軒一軒、空き家の現状を調査票に記録した。その際、いずれの地区においても当該地区長様に地区内をご案内いただくとともに、地区の状況（たとえば獣害の問題）などについてお話いただいた。地区の方から直接空き家をご紹介いただけたことで、調査チームはきわめて円滑に調査を進めることができた。

また、各地区の状況をお話しただけで、単なる空き家調査を超えて、いなべ市の各地域についてより深い理解を得ることもできた。

2月4日の調査が終了した時点で、指定された5地区のうち、鼎北地区を除くすべての地区で一通りの調査をおこなった。

なお2月4日には、「みずほのおかげ市場」で日紫喜廣幸さんならびにご子息の幸久さんからは、いなべ市の農業事情や直販所の役割等においてお話を、また、「ふるさといなべ市の語り部の会」の伊藤忠さんからは、いなべの歴史や伝統文化についてのお話を、それぞれ聞かせていただいた。

	○（使用可能）	△（要修繕）	×（使用不要）	合計
川原地区（南部）	4	3	2	9
川原地区（北部）	6	4	1	11
二之瀬地区		1		1
篠立地区（南部）	6	4	1	11
篠立地区（北部）	7	4	1	12
鼎地区（南部）	6	4	1	11
合計	29	20	6	55

	未調査件数
古田地区	1
鼎地区北部	16
合計	17



(2) 企画提案

空き家調査と並行して、学生たちは、空き家の活用企画についてもアイデアを検討した。ここでは市側の要請もあり、実現可能性よりも、「学生らしいアイデア」であること、つまり面白さ、突飛さを重視し、未熟な生煮えのアイデアであっても、あえて報告することとする。今後実施されるであろう本格的な議論のたたき台、あるいはひとつの刺激となれば、十分その役割は達せられると考えるからである。

これも資料として、学生たちが作成した空き家活用の企画案を添付する。以下では、アイデアとして出されたものの骨子を列挙する。

- ①ライブハウス——空き家を飲食提供付のライブハウスに改修し、地元のバンドの活動の場とする。また、いなべ市全体を会場とした音楽イベントを開催し、これと連携して空き家を活用する。
- ②映画村——空き家を映画セットに活用できるようにし、若手映画人などの映画製作を支援する。またこれらセットを一種のテーマパークとしても活用できるようにし、学生が自分たちで簡易な映画を撮影できるようにする。
- ③空き家ウェディング——空き家を結婚式場に改修し、素朴で味わいのある結婚式を提供する。婚活イベントや移住対策などとセットで考えることもできる。
- ④芸術村——空き家をアトスペースとして改修し、若手の芸術家をいなべ市に誘致する。これにより、芸術家コミュニティを作り出し、また地域と都市の人々の交流を促進する。
- ⑤サバイバルゲーム——若者から中年まで人気のサバイバルゲームの会場を、豊かな自然や空き家を活かして設置する。クラインガルテンの居住区を、着替えや休憩用の施設として活用する。
- ⑥そば打ち——いなべの地元の食材、とくにそばを中心とした企画を、旅行会社などと連携して企画、実施する。
- ⑦ペット連れで宿泊できるバーベキュー施設——豊かな自然を生かしてバーベキュー等が可能な宿泊体験施設を作る。ただし、ペット連れ可とする。都市部のペットを飼いつつアクティブな活動を楽しむ層を取り込む。
- ⑧異国風体験施設——空き家を、外観はそのまま内装を異国風に改修し、日常生活では味わえない異国風の生活を体験できる空間とする。
- ⑨犬カフェ——空き家を改修して、野犬の保護施設とするとともに、動物好きの集う交流スペースとする。また、そのために都市部の退職者等に呼びかける。
- ⑩天文台計画——クラインガルテンに望遠鏡を設置し、天文観測・宿泊施設とする。子供や天文ファンを中心に、観測ツアーなどを実施する。



【空き家活用の企画書】 ライブハウス

<p>コンセプト</p>	<p>いなべ市にライブハウスを造り、イベントを定期的に主催する。</p>
<p>ターゲット</p>	<p>バンド活動を行いたいと考えているいなべ市民。</p>
<p>ゴール設定</p>	<p>音楽を通して出演者同士で交流を深めたり、いなべ市発のバンドをプロデュースすることで、いなべ市の知名度を上げる。</p>
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	
<p>現在のところ、いなべ市にライブハウスは存在しないが、三重県には確認できただけでも12のライブハウスが存在している。（ライブハウス、クラブ、ホール合わせて12件）</p> <p>全国のライブハウスの総数は明確にはわからなかったが、確認できただけでも900件以上は存在する。</p> <p>そのうち313件は東京。</p> <p>ギター、ベース、ドラム市場は先進国で安定、新興国で拡大している。</p> <p>2000年初期において、国産エレキギター国内販売数と輸入本数の合計が300000本以下であったが、2011年にて、国産エレキギター国内販売数は100000本以上。</p> <p>エレキギターの輸入本数は約400000本。あわせて500000本以上と上昇していることから、楽器を演奏する人口は上昇しているため、それに伴いライブハウスを使用したい人口は相当数存在していると予想できる。</p> <p>音楽には年齢制限がないので、若者はもちろんのこと、お年寄りでも演奏したい方は存在する。</p> <p>いなべ市に、音楽に興味を持つ人が多ければ多いほど、ライブハウスの需要は高まる。</p>	
<p>企画内容（企画説明・メリット等）</p>	
<p>いなべ市でライブハウスを開くことで、楽器演奏、バンド活動、音楽が好きな人達の集いの場をつくる。</p> <p>いなべ市にバンド活動をしたいと考えている人がいるならば、イベントを定期的に行うことで、その人達の活動拠点になる。地元のバンドマンが出演するということになれば、地域の人(バンドマンの友人含め)が主な客層であろう。いなべ市にはライブハウスはなく、ライブに触れたことのない人は多いと思われるので、ライブをしたいという人たちにも、ライブを生で見たいという人たちにも、活動スタートのきっかけを与えることができる。</p> <p>いなべ市や三重県のバンドしか出演しないという状況であれば経営は厳しいが、ライブハウスそのものが有名になれば、他県からのツアーバンドも増加し安定した経営が望める。</p> <p>ライブハウスの知名度を上げるためには、有名なバンドやアーティストを呼び、ライ</p>	

ブをしてもらうことが手っ取り早い。無名のライブハウスがそれを行うのは至難の業なので、市役所の協力が欲しいところ。

また、いなべ市発のバンドがメジャーデビューすることがあれば、そのバンドがよく使用していたライブハウスの知名度は上昇する。

そういった工夫をしながら、日々数多くのイベントを実施していけばバンドをしている人間からの、いなべ市への注目度は上昇する。

ライブハウスの業務は主にイベントの主催なのだが、ライブハウスは飲食店として届け出をする。

しかし、ほとんどのライブハウスは飲食業務は片手間で行っており、そこに力をいれているライブハウスはほとんどない。

なので飲食にも力を入れて、たとえば空き家を区画、もしくは階層で分けて、片方をレストランにしてしまうなどすれば、他のライブハウスとの差別化を計れるだけでなく、客は食事を行ったついでにライブを見て帰るということもできる。



調査メンバー
越智あかね
狩野雄亮
多田伸哉
寺田龍一
二宮稔之
濱山直子
藤原由依
三宅匠
脇尚吾

いなべ市調査報告

京都産業大学 法学部
耳野ゼミ4回生

発表の流れ

1. 空き家調査
調査方法 調査結果 意見・感想
2. 空き家活用策
空き家のロケーション施設「映画村」
3. いなべ市の魅力
観光の可能性と改善点




1-1. 空き家調査

- 11/7 11/26 12/5 2/4 4回の調査
- 調査方法
 - 撮影
 - ビデオカメラ
 - メモ



1-3. 空き家調査 - 意見・感想

- 修繕が可能なら、使用できる空き家が多い。
- 獣害改善の必要あり
- 中の状態を知る必要あり



【空き家活用の企画書】 空き家のロケーション施設「映画村」

<p>コンセプト</p>	<p>いなべ市の5地区から全国に先駆けて空き家の抱える問題を広く伝えるために、空家を映画作りの拠点に生まれ変わらせる。</p> <p>以前は生活の拠点であった家が、何十年も空き家として放置され、家本来の機能を果たさなくなっている。私たちが普段の暮らしから触れることのなかった空き家が問題視される現代において、今後空き家が増え続ければ地域のコミュニティが消滅することも危惧される。日本が抱える問題ともいえる空き家を、世代を超えて広く伝えることは人々に興味・関心を与え、地域再生の大きな手掛かりになる。とりわけ、映像資料として保存することは後世に伝えていくうえで最適な手段と考える。そこで、いなべ市の5地区に点在する空き家を映画のロケーション施設に利用し、国内や世界に向けて空き家の現状や問題について視覚を通して訴える。いなべ市および住民を巻き込んだ宣伝・広告活動事業を推進するとともに、新たな観光資源となる映画・映像作品のロケーション地に生まれ変わらせる。</p>
<p>ターゲット</p>	<p>学生に焦点をあてる。特に京都では、毎年秋に京都国際学生映画祭や京都国際映画祭が催されるなど、今も映画文化の拠点となって日本や世界に発信していることから、学生を含め関心が高まると予想される。</p>
<p>ゴール設定</p>	<p>学生が作成した映画・映像作品、アート作品をいなべ市から全国に向けて紹介する。そして、ロケで使用された空き家に宿泊できるよう整備し、全国で初の空き家とロケーション施設を組み合わせた宿場町にする。</p>
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	<p>◆三重県内の映画ロケーション機構および映画祭</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伊勢志摩フィルムコミッション <p>コメント：</p> <p>伊勢志摩地域で映像を活用した地域の活性化や文化の振興、さらには観光情報の発信や観光客の誘致を図るとともに、映像産業に対して伊勢志摩地域におけるワンストップ・サービスの窓口対応を行うことを目的として平成14年に設立され、伊勢志摩地域の広域連携による映像産業の誘致と撮影支援、ならびに関連事業への支援・協力等をおこなっている。</p> <p>URL：http://www.iseshima-fc.jp/</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NAVIGA <p>コメント：</p> <p>伊賀地域で行われる映画やTVドラマなどのロケ撮影を支援するために、撮影に関する地域の情報提供、撮影地の調整、エキストラ協力、その他の手配などを行う窓口。伊賀地域の特性・魅力を内外に発信するとともに、地域の活性化・まちづくりに取り組んでいる。</p>

URL : http://www.igafilm.jp/?page_id=40

・伊賀の国忍者映画祭 2014 (2014年8月22日(金)~25日(月))

URL : <http://iga-ninja.com/>

三重県では、伊勢志摩が全国屈指のロケ地として有名であり、数多くの有名作品の映画等が誕生し、TV番組を中心とした様々な撮影が行われるなど、ロケ地として高い評価を得ている。伊賀市では、NAVIGA にロケ地の候補として廃墟（空き家など）が6件登録されている。（リカーショップ旧店舗、学校施設・産業会館などの公共施設）また、伊賀市では歴史的文化、食文化をあわせて映画文化を新たに提案し、同市を再発見できる持続可能な観光資源として忍者映画祭を企画している。

以上から、県内では映画やロケ地に対する関心が高く、伊勢志摩や伊賀市にとっては観光資源の重要な要素といえる。こうした状況で新たな映画文化をいなべ市に創造することは、日の目に出なかった場所にスポットライトが照らされ、今まで気づかなかった良さや問題など、新たな発見が生まれる。そして、市や住民が一体となって作品制作に協賛でき、年齢性別を超えたコミュニケーションが達成できる。しかし、映画・TV・CMなどのロケーション地を確保することは、近隣住民の理解と同意がなければ困難である。とりわけ、いなべ市の5地区（川原、二之瀬、篠立、古田、鼎）の空き家を全面的にロケーション施設として活用することは、空き家の定義を確立したうえで所有者の許諾を得なければ実現できない。

見込み成果として、学生が自主制作した映画・映像・アート作品を、地元の中日新聞、ケーブルテレビから紹介していただく。最終的には、映画製作会社（東映、東宝、日活ほか）やロケーションオフィスがロケ地に指定し、実際に作品が製作され、伊勢志摩や伊賀市にならぶ映画観光資源となることが理想である。

需要については、学生をターゲットとしているので、映画のロケ地巡りやアート作品に興味がある学生（芸術大学生や美術、装飾関連の専門学校生、サークル、部活動、愛好会）が集える場所としたい。こうした学生を全国から取り込むことで、1つのコミュニティの場を築き、学生の参画によっていなべ市の空き家と周辺地域を芸術性の高いロケーション施設へと発展させたい。しかし、空き家だけに限定した映画・映像作品、アート作品は何度も制作できるわけではなく、今回であれば、学生が手がけた作品を空き家の現状や問題と組み合わせた宣伝活動の一環としている。よって、世間の注目を集めることが、空き家をロケーション施設および宿場町として活用することに大きく関係してくる。

◆男性と女性の目線より需要が見込まれるもの一例

- ・映画参加型のイベントを主催し、空き家に宿泊しながら撮影現場に立ち会える
- ・ロケーション施設に合わせた衣装や乗り物の貸し出し

- ロケーションオフィスを設置し、日帰りや宿泊しながらオリジナル作品を制作できる
- 空き家の離れや蔵を、撮影用セットの収納場所にする
- 空き家の内装を映画館風に改築し、製作品を鑑賞できる
- あらかじめ準備された台本の役になりきった宿泊プラン
- 映画・映像作品のレンタル施設（映画館風に改築した空き家で鑑賞できる）
- 「おもや」「はなれ」「くら」での宿泊プラン
- 全国の学生が集う映画祭および学園祭の実施
- 地域交流の場としての体験型施設（特産品、伝統工芸品の手作り体験など）

以上のように、空き家をロケーション施設として使用した宿場町を提案する。

企画内容（企画説明・メリット等）

京都国際学生映画祭（公益財団法人学生コンソーシアム京都）といなべ市が連携し、5地区（川原、二之瀬、篠立、古田、鼎）に建存する空き家を舞台にした映画・映像作品のほか、空き家を素材としたアート作品の制作を提案する。京都の学生だけでなく、国内外問わず募集することで「空き家」について興味・関心を持たせる。募集者多数の際は、あらかじめ募集者が制作した作品をいなべ市が審査し、その中から製作者を選ぶ。1年間のシーズンを通して5地区の空き家と周辺の景観を撮影し、完成した映画・映像作品をいなべ市、京都で試写会する（アート作品はいなべ市、京都の展示場で公開）。審査によってグランプリ作品を選び、入選者にはいなべ市から製作者へ賞金または特産品が授与される。また、空き家の問題と活用のPR活動として、作品を国内・国外のメディア（テレビ、ネット動画）で配信する。

ロケ地として使用された周辺地域を、宿場町として機能できるよう整備する。空き家に関しては、映画・映像作品の中でどのように使用されたか（〇〇の家、集会所、宿など）をロケ地のマップに表記し、それぞれに1つのタイトルがついた宿場に再生させる。また、5地区の空き家は、大正～昭和にかけて建築されたものが多いため、伝統的な日本式の家づくりである「おもや」、「はなれ」、「くら」を都会や外国から訪れた観光客にアピールできる。観光地での宿泊はホテル、民宿、ユースホステルがある中で、日本独特の家づくりが残された空き家で過ごせる時間は貴重であり、特に外国人観光客にとっては、ホームステイの気分で宿泊できる絶好の機会だと伺える。

アート作品として使用した空き家は、鼎地区のイベント施設への再利用（月と太陽社）をモデルに、アートとしての価値を尊重しつつ、実演および体験型イベント施設として活用する。

例：硬水を使用したコーヒーの試飲会、実演販売

クラフト教室

アート作品の展示会

特産品の直営販売

そのほか各種イベント（ゴールデンウィーク、クリスマスなど）

空き家がメインの作品を、文化の拠点である京都から全国へ発信し、いなべ市が最初のモデルケースとなって宣伝・広告活動を学生の手で推進する。

◆メリット

- 映画・映像作品およびアート作品として活用することで、広く空き家の存在を広告・宣伝できる。
- 国道や高速道路が近くを走るため、自動車での交通利用に最適。
- ロケ地の活用によって、空き家だけでなくいなべ市を知る窓口になる。



【空き家活用の企画書】 空き家ウェディング～幸せのパワースポットはここだよ～

<p>コンセプト</p>	<p>結婚式にも自由を！両家の絆を田舎で深めよう！ 結婚式とは新郎・新婦の新しい門出を祝うための行事であるが、両家の両親にとっても人生の大きなイベントになり得る。 両家の繋がりが深くなっていくことを予想すると、親族同士がお互いのことをよく理解することが良好な関係を築くためには必要である。 そこで空き家を活用した親族のみで執り行われる結婚式（若しくは披露宴）を提案します。空き家と神社を活用した日本らしい結婚式で一生の思い出を作りませんか？</p>
<p>ターゲット</p>	<p>結婚式を挙げたいが予算的に厳しい方 親族だけで結婚式を挙げたい方 神前結婚を挙げたい方 結婚後のんびりしたところに住みたい方 幸せになりたい方</p>
<p>ゴール設定</p>	<p>空き家と結婚式といなべ観光の3本柱で地域活性化に繋げる 結婚式を挙げた新郎・新婦がいなべを居住の場として選定する 空き家が結婚式場に生まれ変わり、幸せのパワースポットが定着すること</p>
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県内の競合分析 三重県全域に48カ所・桑名に4カ所（※ゼクシィで検索した結果） ・ 県外の競合分析 日本全国の結婚式場数2853事業所（平成14年） 人口10万人当たりの結婚式場ランキング（都道府県別統計とランキングで見る県民性） 1位福島県（2.21軒）、2位群馬県（2.04軒）・・・30位三重県（1.28軒） ・ 成果の見込み 結婚式の新たなスタイルを確立できる可能性あり（結婚式+住居の提供）
<p>企画内容（企画説明・メリット等）</p>	<p>結婚式と宿泊込みの親族だけの婚礼行事を実施する 結婚式はいなべの神社にて神前結婚を執り行う 披露宴は空き家を活用した場所で行う 両家の家庭の味を料理として振る舞う いなべの特産品も何らかの形で料理に加える 空き家は庭が広いので、庭で立食という形も検討する プチ新婚旅行として結婚式仕様の車に乗っていなべを観光 365号線を利用して新郎・新婦のオリジナルカレンダーの作成 いなべに住む場合には空き家をプレゼント</p>

【空き家活用の企画書】 芸術村

<p>コンセプト</p>	<p>「空間を芸術に」 空家の点在する地域を中心に、若手の芸術家を誘致し、住んでもらう。このことによつて、いなべ市内に芸術家村を作り出す。</p>
<p>ターゲット</p>	<p>若手の芸術家の作品に関心をもつ都市部の男女をターゲットとする。(20-40代男女(家族層・大学生))</p>
<p>ゴール設定</p>	<p>外部からの人の流入</p>
<p>現状分析(県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか)</p>	<p>三重県観光連盟 HP にて「美術館・芸術」で検索したところ、ヒットしたのが、「19件」</p> <p>近隣府県の状況 愛知県：愛知観光協会 HP にて同検索をかけたところ、ヒットしたのが「43件」 滋賀県：びわこビジターズビューローHP にて同検索をかけたところ、ヒットしたのが「39件」</p> <p>「美術館・芸術」に関して県外と比較すると2倍もの差が存在する。</p>
<p>企画内容(企画説明・メリット等)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・空き家の中身を改装し、芸術品・美術品を展示できるようにする。そこに観光・見学で来訪者が来るというかたち。 ・デザイナー、芸術家などを誘致し、空き家をアトリエとして使用してもらいつつ、展示会場としても使用。 そのさい、訪れた観光客が「自分化」できるかが大きなポイントとなる。つまり、見に来た人々が「そこにいる自分に満足している状態」(他では味わえない、かけがえのない経験をしている状態)を作ることができるか否かが、重要である。 <p><各プレーヤーメリット></p> <p>芸術家のメリット：低予算でアトリエを持つことができ、また活動の場・展示の場の確保が可能になる。また、芸術家どうしの交流等の副次的効果も期待できる。</p> <p>市のメリット：空き家に人が住まうことで劣化を防ぎ、かつ、コンテンツが生まれていくことで集客ツールの一つとなり、外部からの訪問客の流入の増加を見込める。</p>

【空き家活用の企画書】 サバイバルゲーム場

<p>コンセプト</p>	<p>県地区北部のクラインガルテンとその付近の空き地を、サバイバルゲームの場所として活用する。</p>
<p>ターゲット</p>	<p>都市部の中高年サラリーマンや富裕層をターゲットとし、非日常のシューティングゲームに没頭する場所を提供する。</p>
<p>ゴール設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム場が設営されることで、物品販売や事務等の雇用が期待されるだけでなく、サバイバルゲームの実施に加え、イベント企画といった関連字義用の展開が見込める。 ・中高年サラリーマンや富裕層だけでなく、20～30代の若い層の人たちもいなべ市に頻りに足を運ぶなど、幅広い層の取り込みが可能である。
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在サバイバルゲーム専用フィールドが全国に100か所以上あり、千葉県は30か所程度の専用フィールドがある。どこもルールを守れる20歳以上ならば4,000円程度の参加費で参加する事ができる。 （未成年の場合、親権者の同意や後見人の同行により参加できるところもある）
<p>企画内容（企画説明・メリット等）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いなべ市には「PBF イナベ」とよばれるサバイバルゲーム専用の場所がある。そこといなべ市が連携し、広大なクラインガルテンの敷地をサバイバルゲーム場に変える。 ・ゲーム場として機能するためには、ゲーム場はもちろん、砂利やアスファルトといった、駐車可能な水はけのよいスペースがあることや、戦線離脱の際の休憩場所、装備品のレンタル場所などが必要となる。ここで活用するのが、8戸のクラインガルテンである。ゲームで使用する装備品が汚れたときにシャワー室を使ったり、着替えるときの更衣室に利用したり、消耗品となるBB弾などの消耗品や昼食の販売・提供施設にしたりと、快適にゲームを楽しむための設備が、空き家の活用で容易に準備ができるのである。 ・さらに、クラインガルテンから離れた空き家を宿泊施設として利用し、人口の多い名古屋や四日市、ゲーム場、宿泊施設を往復するバスツアーがあれば、事業を拡大できる。他の空き家活用策（ex.キャンプ場）とリンクさせることで、事業拡大を図ることができるのも利点の1つである。 ・使用道具がそろっていたり、交通を円滑にするツアー型であったりといった、初心者にはやさしいサバイバルゲーム施設であることはもちろん、いなべ市固有の田舎を誇張としたゲームフィールドであれば、名古屋などの都市部にいるサラリーマンも足を運んでくれると思われる。

【空き家活用の企画書】 そば打ち、大食い、旅行会社とコラボ

コンセプト	いなべ市の気候を活かしたそばの企画を立て、空き家をその会場とする。
ターゲット	他府県の方
ゴール設定	地元の食材を活かすイベントを仕掛けることで、観光客を増やし、地域を活性化させる。
現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）	<p>①手打ちそば</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験＋食事代で約 1500 円 ・地産の野菜を使った料理も一緒に提供する ・地元の方が作った郷土料理なども <p>②第2回簡単料理コンテスト</p> <p>平成 25 年 2 月 16 日(土)、石榑小学校調理室を会場に、そば粉をはじめとした、いなべ産品の地産地消とブランド化を推進するために開催</p> <p>③「いなべの里新そば祭り」いなべ市員弁運動公園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 5 回いなべの里新そば祭りは 11 月 9 日に開催 ・当日は、雨の中 6 千人を超える来場、そばは各ブース 500 円前後で購入できる ・早食い大会も実施、5 分間の間に一杯 160 グラムのそばを何杯食べられるかを競う →12 人限定で、賞品あり ・そば打ち体験、7 割そばを 5 人前打てる（所要時間 1 時間）材料代として 500 円 <p>④「いなべ梅まつり」3 月 8 日～3 月 30 日 いなべ市藤原町 梅林公園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入園料 500 円 ・地元物産コーナー、花苗の販売 <p>⑤ ツアー・オブ・ジャパン 2015」</p> <p>国内最大のステージレース「ツアー・オブ・ジャパン」(TOJ) の 2015 年大会で、新しい開催地として三重県いなべ市でレースが行われることになった。また、いなべ市では自転車愛好者による観光を誘致する「サイクルツーリズム」を進めようという機運があり、サイクルラックの整備などを検討している。今後はロードレース開催と合わせて、自転車を活用した町おこしに本格的に取り組んでいく構えだ。いなべ市は鈴鹿山脈と養老山地に挟まれた緑豊かな土地柄で、市関係者によると、TOJ のコースは地形の特徴を生かした 1 周約 15km の山岳コースを想定しているという。</p>
企画内容（企画説明・メリット等）	<ul style="list-style-type: none"> ・都会の子供たちを対象とした、農業体験 ・いなべの有名な食べ物、果物を食べられるツアー →食べ物をツアーの目的とするツアーは満員が多い ex.「苺づくしの 1 日 日帰りツアー」 料金大人 8000 円 JR 新宿駅(7:30)→セツコのイチゴ園(収穫)→岡部酒造(見学・試飲)→里山ホテルときわ路(昼食)→ヨネビシ醤油(見学)→砂の湯(入浴)→JR 新宿駅(19:00)

【空き家活用の企画書】 ペットと共に宿泊、バーベキューを楽しむことができる宿泊施設

コンセプト	空き家をペット同伴可能の宿泊施設として活用する。
ターゲット	ペット同伴者（年齢、性別は問わない）
ゴール設定	<ul style="list-style-type: none"> ・地域資源を生かし、いなべ市街の人を誘致し地域活性化を図る。 ・市民を悩ませている空き家を再利用することで、市民／観光客相互に利益をもたらす。
現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）	<p>日本ペットフード協会の推計によると、2013年に日本で飼育されている犬・猫は約2,062万頭で、そのうち犬は約1,087万頭、猫は約974万頭となっている。日本国内では約4世帯に1世帯の割合で犬か猫を飼っている計算になるが、犬・猫以外のペットも含めるとより多くの割合で何らかの動物が人間と生活を共にしていることになる。</p> <p>株式会社JTBインターネット宿泊予約サイトにおいて、ペット同伴可能の宿泊施設は東海地方で79件ヒットした。（内三重県11件）いなべ市にペット同伴宿泊施設は無く、また三重県全体でもホテルタイプやペンションタイプが多く、空き家を活用した施設は見当たらなかった。</p> <p>成果の見込みとして、上記に記した日本でペットと共に生活している人の割合（日本ペットフード協会推計：日本国内では約4世帯に1世帯の割合で犬か猫を飼っている）を見ると、需要があると思われる。</p>
企画内容（企画説明・メリット等）	<ul style="list-style-type: none"> ・ペットと共に宿泊、バーベキューを楽しむことができる宿泊施設 ・バーベキューの際の食材は、いなべ市のものを利用する。 ・空き家が数件密集しているところであれば、ペット連れ同士の交流も可能である。 ・ペットと飼い主、飼い主同士、ペット同士が触れ合うことができるイベントを開催する。 <p>Ex:ドッグスポーツ ⇒愛犬と一緒に楽しむドッグスポーツのこと。飼い主とペットと一緒にできる競技や愛犬の足の速さを競うドッグタイムレース等、愛犬と一緒にスポーツを楽しむイベント</p>



【空き家活用の企画書】 異国風に改修

<p>コンセプト</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 空家を、外装は日本風のままで内装を異国風に改修することで、日常生活では味わえない体験を経験できるリゾート施設を作る。外国に行ったことがない人でも、日本で外国のような雰囲気を楽しむように空き家を異国風に改修する。 • さらに、外国の文化の本格的な輸入なども考慮する。たとえば、滋賀県長浜市では、商店街の活性化のために、ゼロからガラス細工を導入することとし、そのために職人を研修のためにヨーロッパ派遣することまでしたという。そのため、「文化」としてのガラス細工の輸入に成功し、いまでは地域活性化のお手本にまでなっている。
<p>ターゲット</p>	<p>市外の観光客、地元市民</p>
<p>ゴール設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 異国風のちょっとしたリゾート施設を目指す。場所は中山間部の空き家を活用することで、いなべの自然豊かな景色を一望でき、いなべの魅力の宣伝に繋がる。 • 同時に、ソフトの面（異国風の本格的な文化の輸入）も検討する。
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	
<p>(1) 県内や県外の近隣施設</p> <ul style="list-style-type: none"> • 志摩スペイン村（三重県伊勢市） • 淡路ファームパークイングランドの丘（兵庫県南あわじ市） • 滋賀農業公園ブルーメの丘（滋賀県蒲生市） • ポルトヨーロッパ（和歌山県和歌山市） • ドゥリムトン村（京都府亀岡市） • スウェーデンヒルズ（北海道）などがある。 <p>いうまでもなく、たんなる「ハコもの」施設では先細りは目に見えている。明確なコンセプトを立てたうえで、本格的なよいものが根付くよう計画を立てる必要がある。</p> <p>(2) 成果の見込み</p> <p>他では味わえない体験のできる観光地として、いなべの魅力を PR する。</p> <p>(3) 需要</p> <p>身近で海外の雰囲気を楽しむことができる為、観光客だけでなくいなべ市の方にも気軽に足を運べる場として楽しんでいただけるのではないかと考える。</p> <p>また、いなべの景色を一望できる展望スペースのような感じでも人気ができるのではないか。</p>	
<p>企画内容（企画説明・メリット等）</p>	
<p>空き家を利用して、異国風の街並みをつくり海外に行ったことがない人でも、身近で海外の雰囲気を楽しめるようなちょっとしたリゾート地をつくる。そこでせっかくの自然豊かな景色を活かして、坂や山手の空き家を利用することで、中では海外の魅力を、外では日本の魅力を同時に味わうことができる。</p> <p>また、地元の食材を使ったレストラン「フラル」と提携してフラルと施設との同</p>	

線を結び、交流と活力のネットワークをつくることで、よりいなべの魅力味わってもらおう。「フール」とは別に、いなべの食材を使って異国風料理を展開するレストランがあったら、さらに異国風を感じてもらえそう。篠立・立田地区で行われている、地域の方がゲストティーチャーとなって開かれる土曜学校の開催地として利用することで、子供の楽しめる空間となる。そのほかにも地域で行われるイベント等の開催地として活用しやすい施設になる。

いなべ市の空き家

いなべ市と「連携協力包括協定」を結び、市内で増加する空き家を調査してきた京都産業大の学生たちが、同市藤原町市場の市藤原文化センターで報告会を開いた。空き家を映画のロケ施設やライフハウス、結婚式場として活用するなど若者らしい柔軟なアイデアを出し、市の新しい観光振興策を提案した。

(河崎裕介)

調査は都市から農村部もした。人に呼び込む市の「グリーン・ツーリズム推進調査事業」として実施。京都産業大法学部の四年生九人と教員二人が昨年十一月から四回、いなべ市を訪れ、北勢町と藤原町の計五地区で空き家の件数や状態を調べた。か、周辺住民に聞き取り

ロケ地や結婚式場にいかが

空き家の活用方法について、第一に映画のロケ施設「映画村」にすることを提案し、「観光だけでなく、映像を通じて空き家の問題を社会に広く伝える必要がある」と話した。ほかに「サバイバルゲーム」の舞台、ベットと宿泊できる施設、安価に挙式できる「空き家ウエディング」の会場にする案も示した。

市外の人から見た「いなべ市の魅力」にも触れ、鈴鹿山脈の藤原岳や竜ヶ岳を「都会では味わえない壮大な景色」と評価。一方で「それだけで

観光客を呼ぶことができず、「いなべ市の顔」をつくる必要がある」と訴えに策定する。

た。

市はこうした提案や五地区の住民アンケート、さらに住民との協議などを基に、二〇一五年度から五年間の「いなべグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画」を三月中

連携協定先 京産大生が活用案



空き家調査の結果を報告し、活用策を提案する京都産業大の学生＝いなべ市藤原文化センターで

【空き家活用の企画書】 犬カフェ

<p>コンセプト</p>	<ul style="list-style-type: none"> 空家を改造して、「犬カフェ」を開設する。あわせて、これを通じて、動物保護と空き家活用と獣害対策にも配慮する。
<p>ターゲット</p>	<ul style="list-style-type: none"> 定年退職後の生き方を探している都市部のサラリーマン層で、田舎暮らしに憧れる動物好きの方たち。
<p>ゴール設定</p>	<p>空家に住み、殺処分されるかもしれない犬を保護し、同時にその里親を引き受ける。同時にその犬を番犬として活用することで、獣害対策の一助ともする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 里親になればなにかしらの手当（土地、建物に対する税金等の免除等）が出る仕組みにすることで、定住をはかるものとする。
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	<p>市と協力してカフェを運営しているところ自体調べた限りでは無い。ただ、犬、猫、フクロウといろいろな動物カフェがある中で、わざわざ人里離れたいなべ市までやって来る意義を考える必要性はあろう。</p> <p><見込み成果></p> <ul style="list-style-type: none"> 他の犬カフェとの差異を設けることで話題性をつくる。 （既に保護された犬を活用して犬カフェを運営しているところ有り）それだけでは話題性を作るのは困難？ 遠くから来る意義を→税金免除、補助金等…
<p>企画内容（企画説明・メリット等）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ただの犬ではなく“保護した犬”にすることで話題性をもつ。古民家を活かした犬カフェは、あまり例はないと思われる。 またドッグランできる場所を設けることで既に犬を飼われている人もカフェとして利用できる（田舎ならでは）。犬好き同士のコミュニティの場にする。 店員さんがメイドの格好をする。犬カフェ兼メイドカフェ的なものに。または、割烹着みたいな田舎の格好を若い子がする。実現可能性を上げるため、空家は原則そのまま活用(改修等すれば費用がかかる)。

【空き家活用の企画書】 天文台（天分観測イベント）企画

<p>コンセプト</p>	<p>県地区北部のクラインガルテンを、天文台（もしくは天文観測地）として活用する。 また、同時にクラインガルテンを簡易宿泊施設としても利用し、安価な天文台見学・宿泊ができるようにする。 こうしたことを通じて、多くの方にいなべ市を知っていただくきっかけづくりをするとともに、天文観測という教育活動を通じて、山村留学の充実化を図り、若者の流入の増加を促すことも視野に入れる。</p>
<p>ターゲット</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・名古屋や三重県の観光客、さらには子供のいる家族や山村留学生、小中学生をターゲットとする。
<p>ゴール設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いなべ市の観光客数、学生数ともに現在から 1.5 倍に増加することをゴールとする。
<p>現状分析（県内・県外の競合分析・見込み成果・どのくらい需要がありそうなのか）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地方公共団体や企業によって運営されている公開天文台は日本で 100 以上ある。一定数の天文ファンが存在すると思われる。 ・近年、夏休みの自由研究を子供にどのように取り組ませるかが話題になっており、それに特化したツアーなども企画されている（たとえば、鉄道会社が車両整備工場を見せるなど。企業にとっては広報も兼ねた重要な機会になっていると思われる）。このような動向に鑑み、天体観測を組み込んだ自然体験ツアーを企画し、親子で楽しむ、あわせて夏休みの自由研究をサポートできるような内用を盛り込むことができれば、実現できる可能性があると思われる。
<p>企画内容（企画説明・メリット等）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いなべ市と京都産業大学神山天文台が連携して実施する。京都産業大学は、もともと京都帝国大学で教鞭をとった天文学者・荒木駿馬が創始した大学であり、私立大学では最大規模の天文台を有する。そのため、天文研究に力を入れており、検討次第では連携の可能性はありうる。 ・予算が許せば、8 戸あるクラインガルテンのうち 1～2 戸に望遠鏡を設ける。必要最低限の天文台の設置にとどめ、コスト削減を行う。クラインガルテンの周囲に目立った街灯が見当たらないため、立地条件はクリアしている。 さらに、残りのクラインガルテンを安価の宿泊施設とすることで、遠方から訪れる観光客のリスクを削減する。 ・あるいは、移動式の望遠鏡等を使った天文観測イベント等も検討可能である。 とりわけ小学生をターゲットに、夏休みの自由研究等のサポートを行う（自由研究ツアー）など。

(3) 学生による最終報告

以上をふまえ、学生たちは、これまでの取組の成果をいなべ市民の皆さんの前で報告を行った。いなべ市では、平成27年3月1日にまちづくり講演会「農林業を中心とした農山村の活性化」(藤原文化センター)が実施された。その一環として、調査チームの学生メンバー3名が15分ほどのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、空き家調査の様子や空き家の数、学生たちが考えた空き家活用策、さらには学生たちから見たいなべ市の魅力や今後の課題を報告した。

(4) まとめと今後の課題

実質的な活動期間が数か月と限られており、その短い期間に5地区にわたる広大な地域を調査し、あわせて空き家を活用した企画案を作成することは、容易な課題ではなかった。しかしながら、空き家調査については、市役所による調整はもちろん、とりわけ各地区の地区長様が献身的に御協力くださったおかげで、順調に進めることができた。あらためていなべ市ならびに各地区の皆様のご協力を深く感謝申し上げる。

これに対して、空き家活用の企画提案については、困難が大きかった。学生たちは、いなべ市の歴史、文化、産業、観光などを必ずしも熟知しているわけではないので、都市部の若者の視点から、空き家調査の体験をふまえ、思い切った提案をするよう努めた。このため、現実的な具体化可能性については、あえて十分な検討をしていない。むしろ、いなべ市の外部からきた若者に、いなべ市がどのように見えたかを直に知っていただくのがよいと考え、思いつきの範囲を出ないものであってもひとつの提案として報告することとした。その意味で、今回の提案は、これから本格的に検討されるであろう、さまざまなアイデアのヒントとしてご活用いただけたら幸いである。

今後の課題としては、以下のような点があげられる。

空き家については、得られたデータを基に具体的な活用法を考える必要がある。しかし、学生たちとの議論で感じられたのは、空き家だけの活用法を工夫したのでは限界がある、ということである。空き家を改修して魅力的な施設、便利な施設にすることはできても、それを活用する人とソフト(イベントやプロジェクト)が同時にしっかりと設定されなければ、訪問者の増加は困難であろう。

他方、短い期間の調査ではあったが、地域には空き家だけではなく、寺や滝、歴史的な遺跡、廃工場等、地域活性化に活用できそうなさまざまな施設や建築物が多数存在することもよく分かった。別チームで実施している食や水、地域課題の調査とも連携しつつ、適切なプロジェクトを組むことができれば、いなべ市の魅力をより広く発信していくことが可能になると思われる。なお、特定の施設や地区を念頭においているわけではないが、いなべ市には「美しい風景」がいくつもある、ということも学生たちの共通の意見であったことを付言しておく。

また、これらインフラ面だけではなく、信仰やお祭りなど、文化的・精神的な面での伝統についても十分に評価し、次世代に伝えてゆくことも重要であろう。いなべの語り部の方のお話のなかで印象深かった点のひとつが、いなべでは昔から信仰心が篤く、それが中山間部にもかかわらず立派な寺院が幾つも建築された理由である、というお話である。名古屋経済圏の一角として近代化された企業群を有しつつも、同時に古くからの深い精神的伝統をあわせもつ点が、いなべの魅力の基盤をなしているように感じられた。

第3節 観光資源の調査（京都産業大学報告書抜粋）

いなべGTの推進にあたっては、いなべ市に何があるか、とくにどのような観光資源があるかを知る必要がある。いなべ市と京都産業大学の包括協定に基づく今回の調査では、「ふるさといなべ市の語り部の会」が編集した「ふるさとの紹介」（いなべ市観光協会、2013年刊）等の資料を参考にし、また各分野の専門家の意見もききながら、（1）いなべ市の水資源と水利用の基礎調査、（2）GTを支える伝統食文化と食資源の探索、の2つの観点から調査をおこなった。

1. いなべの水利用に関する調査

（1）水不足に苦しんだいなべの過去

いなべ市は西を鈴鹿山地、東を養老山地に囲まれた扇状地のような土地にある。養老山地を越えた東側は木曾三川が流れる日本有数の水郷地帯が広がり人びとは洪水など多すぎる水に苦しんできたが、たいへんおもしろいことにいなべ市の一部は水不足に苦しんできた歴史を持っている。ちいさな山を一つ越えるだけで、洪水に苦しんだ社会と水不足に苦しんだ社会が接しているのはたいへんめずらしいことである。いなべの人びとが水を手に入れるために苦心してきたことは、市の各地に残る史跡からも読み取れる。「ふるさとの紹介」には、いなべ市の史跡等58か所が紹介されているが、そのうち7か所が、水に関するものである。この調査でも、少ない水をいかに有効に使ってきたかを中心に調査を進めた。

なお、市内の史跡についてはすでに市などが発行した資料にも詳しい説明があり、本報告書に記載するまでもないとも考えられたが、市民の方々にも再認識、再発見のチャンスがあればと考えあえて記述した。

●片樋のまんぼ（間風）

まんぼとは珍しい名前だが、地下に掘られた疏水のことである。世界には、地下に掘られた疏水はたくさんある。中央アジアのカナート（カレズ）がもっともよく知られている。カナートやカレズが地下に引かれるのは、乾燥地帯にあって少しでも水の蒸発を防ぐためといわれている。しかし、地下にトンネルを掘るには大変な技術を要する。

まんぼのなかでも大安町片樋にある「片樋のまんぼ」は長さが1,000メートル近くあるともいわれ、現役の地下疏水としては日本有数である。片樋のまんぼの調査のために、大安町片樋の日下徳重さんを訪ねてご案内を頂いた。保存会の説明板によると、片樋のまんぼは江戸時代中期の明和年間（1770年ころ）から工事が始まり安永4（1775）年に一応の完成をみている。その後江戸末期の文久年間に拡張工事が行われて今の姿になったようである。まんぼの末端は片樋集落の中心部にある大神社の境内の池になっていて、地下部はこれから北西に約1,000メートルにわたって延びている。途中何か所か、地上に連絡する立坑（あるいは井戸）が設置されていて、ここで地下の土を地上に上げたい。国道365号線の大久保交差点付近に立坑があり、ここから上流は文久年間の工事といわれている。

日下さんにはその後、大安町平塚にあるいなべ市郷土資料館にもご案内頂いた。資料館に残された資料（地図）によると、いなべ市にはまんぼが100近くもあるといわれる。大半はもう使われていないようであるが、一度詳しい調査を試みる必要がある。



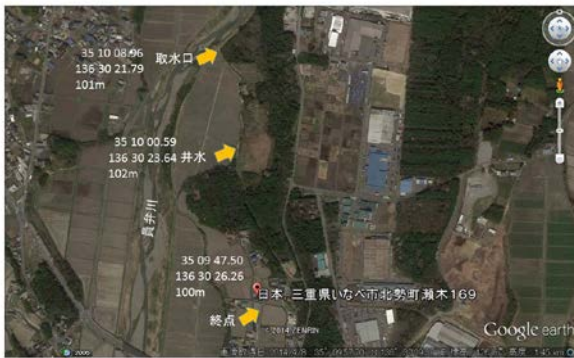
大安町片樋にある「片樋のまんぼ」。地下にアプローチできるようになっている。

■片樋のまんぼの調査位置



●畑田の井水

市内の疏水には地上部を流れる井水もある。今回はこのうち北勢町瀬木の「畑田の井水」を訪ねた。井水は北勢町京ケ野新田下で員弁川から取水しその後約 1 キロメートルを流れる井水で、250 年ほど前に建造されたものといわれる。井水のあらまは瀬木の佐藤たづゑさんにご説明を頂いた。詳しくは文書などを調査してみないとわからないが、建造の背景にはやはり江戸時代の新田開発に伴う水不足があるようだ。村では当時、水不足を理由に工事の申し立てをしたがなかなか認められず、命がけの嘆願を藩におこなったという。また、この井水による受益者の中には謝礼の意味で寺に米を奉納する習慣が最近まで続いていたとのことだった。それほどまでに井水が地域に果たした役割はおおきかったのだろう。



●刻限日影石

いなべ市員弁町笠田新田の笠田大溜（ため池）の直下に、刻限日影石がおかれている。これは桑名藩主が開いたため池と 2 つの新田の間におきた水争いの解消のため、水の配分を刻限（時刻）に応じてあらかじめ決め、その刻限を切るためにおいた日時計（のあと）である。当時、水不足は村と村の間の紛争のタネで、水不足が深刻な土地では死者を出すほどの紛争も多かったようである。2 地区の当事者たちはその後、共同で祭りを営むなど、地域同士の連絡を大切にする取り組みも始めていて、制度の面、個人レベルの面の両面から、水資源の管理をめぐる合意形成に努めてきた先進的取り組みであると評価できる。

なお、同様の制度は水不足に悩む日本各地に認められる。讃岐平野などでは、日時計に代わり線香を使った時間管理の方法が採用されていた。



(2) いなべの水質

いなべ市の水源のひとつは藤原岳のふもとにあるが、この付近に、一般に開放された水源がある。名古屋で喫茶店を営むという A さんに聞いた。水質がよく、コーヒーには適当との理由で週に 3 日の割合で採水に来ているとのことだった。いっぽう、川原地区の関係者の話では、地区の古くからの水源の水は沸かしても容器に白い結晶がつかないという。この地区の水は軟水の可能性が高く、和食には好適な水といえる（硬水でだしを取ると、うま味成分が灰汁となつてうまく出汁が抽出できない）。これらの証言を裏付けるように、いなべ市各所で採取した水の硬度は場所により大きく異なった。たとえば、市の水源地近くの「藤原町篠立水源地付近」および聖宝寺の滝から採取した水の全硬度は 110 と、硬水の範疇にも入るほど高い値を示したが、川原地区、鼎地区水源および石榑地区の河川水では 20 前後の値を示した。なお、採水の日には雪交じりの天候で、採取した水にも雪の影響（石榑地区で採取した雪の硬度は 2.8）が考えられ、季節を変えて調査をおこなえばさらに高い値を示す可能性もある。

No.		全硬度 (mg/L)	気温	水温	採取日	採取時間	天候	備考
1	川原地区水源 上流	21	-0.6	6.1	2015年2月9日	13:40	小雪	川原地区 太尾山記念石碑上
2	川原地区水源 中流	21	0.8	3.6	2015年2月9日	14:10	小雪	川原地区最初の水源地、大水の後、濁る 少量のためフタでわずかつ汲み採取
3	川原地区水源 下流	31	-1.2	12.2	2015年2月9日	14:30	小雪	川原地区
4	東林寺・白滝	18	0.1	1.6	2015年2月9日	15:10	曇り	集落内東林寺の白滝 滝壺より採取
5	鼎地区水源	22	-1.1	4	2015年2月9日	15:50	小雪	林道石塚線・鼎地区フラー上・鼎排水池の上
6	藤原町篠立水源地付近	110	-0.2	12	2015年2月9日	16:23	小雪	鈴鹿山系北部石灰岩層・地下300mより採水
7	藤原町・聖宝寺	110	0.5	8.5	2015年2月10日	10:25	雪	藤原町
8	大安町大神社	74	2.1	3.4	2015年2月10日	11:06	曇り	大安町片樋 境内の池
9	大安町石榑南	29	-0.1	3.4	2015年2月10日	11:30	雪	川橋下流
10	大安町石榑南	2.8	-0.1	-	2015年2月10日	11:35	雪	川橋下流・雪

- 全硬度は硬水、軟水を占める尺度である。WHOの基準では硬度が 120 以上を硬水と定めているが、日本では硬度が 100 を越える場所は限定されている。
- サンプル 6 の「藤原町篠立水源地付近」は、一般に開放されている水汲み場の水を採水したもの。
- サンプル 10 は、サンプル 9（石榑地区）の雪のサンプル。

(3) 水調査のまとめ

いなべ市は、現在でこそ豊かな水に恵まれた土地であるかに見えるが、その裏には過去の人びとのいのちがけの苦勞があった。中里ダムや笠田、員弁の大池などの貯水池、各地の井水やまんぼ、刻限日影石などの存在はそのことを雄弁に物語る。これらの存在は、一部の専門家には知られているが一般にはほとんど知られず、埋もれた観光資源になっている。また水質（硬度）の幅は大きく、用途に応じた水利用、その広報の必要性がある。

2. GTを支える食の資源

GTは都市はじめ地域外の人びとが当地を繰り返し訪れ、そこでの滞在を楽しんでもらう取り組みである。しかし従来のGTは、それはありていに言えば都市に奉仕する、あるいは「都市の人びとの都市の人びとによる都市の人びとのための地方のデザイン」という色彩が濃かった。

いっぽう、いなべGTは「いなべ市民のいなべ市民によるいなべ市民のためのGT」である。その基本は、まず、いなべ市民が自らの発想でみずからのために企画するGTで、ここに他地域の人びとの参画を促すものである。地方創生の成功の鍵は、地方地域の人びとが自分の地域で、地域に誇りを持ちつつさまざまな取り組みに臨むことといわれる。この観点からいえば、地域にある伝統食や食材を「再発見」し、それによって他の地域の人びとを迎えることが大切である。いなべGTはここに重きを置いて計画を策定中である。京都産業大学の調査ではこの観点から、いなべならではの、北勢地域ならではの食材や伝統食の再発見が重要と考えて、以下、市のアンケート結果の分析、予備的な聞き取りや現地調査によりその発掘にあたった。

(1) アンケートによる伝統食や地域野菜の探索

市役所がモデル地区 5 地域の住民に対しておこなったアンケートにも食に関する質問項目がある(問 14: 地域に伝わる自慢の料理、問 15: 在来野菜など)。これは回答者が自由に記載する部分で、多岐にわたる回答があった。問 14 には 55 の、問 15 には 40 の回答があった。

このうち複数の解答があったものを挙げると、1) 芋汁、山芋汁など、ヤマノイモをすって作るとろろ汁と考えられるもの、2) (葬儀のときの) トウガラシ汁、3) 「あほ炊き」の3つである。1) は全国的にみられる料理であるが、ヤマイモ(自然薯と回答したものを含める)は、この地方の特産といてよい作物のひとつであるといえる(以下(2)のハッタイモを参照)。トウガラシ汁は、東海地方から三重県北部に多い地方料理で、葬儀の際に出されるものであるという。あほ炊きとは塩抜きしたたくあんを油でいためて再び味付けしたもので、これも三重県北勢地域の地域食であるといわれる(農文協、『三重の食事』などによる)。また、「いばもち」「いばら餅」という回答が3件あったが、これはサルトリイバラの葉で巻いた餅であると考えられる。これも、西日本各地にさまざまな名称で伝わっている(地方によっては、かから団子、かからん団子、いぎのは団子などという名称が与えられている。また地方によってはこれを「柏餅」と呼ぶこともある)。

さらに、アンケートではGTの素材として農業公園の活用を挙げる意見が多く出されている。ただし、その活用法は具体的には述べられておらず、今後関係者間での合意形成のプロセスが重要である。同時に、獣害を阻害要因として挙げる意見も多くみられた。獣害が深刻であることの反映でもあり、この解決(あるいはGT推進とセットで)が不可欠である。

(2) 聞き取りによるいなべの伝統食

● 篠立生活改善センターでの聞き取りから

篠立生活改善センターで、篠立地区の皆様にご協力いただき地域の伝統食や食材について聞き取りをおこなった。その中ででてきたのが「柿酢」であった。柿酢とはカキから作る酢で、広い意味ではりんご酢などと同じ果実酒の仲間にも属する。製造法はいたってかんたんで、「甕に熟したシブガキの実をいれるだけ」という。カキ果実の糖分がアルコール発酵してできたアルコールが酢酸菌の働きで酢になったものと考えられる。柿酢はインターネットなどでも各地で商品化されているのが紹介されているが、その独特の風合いで根強いファンがいるといわれる。干柿を入れて作る「なます」にも酢が使

われるが、この酢を柿酢にするのもよいかもしれない。

いなべ市には、とくに旧藤原町でカキの木が多く残されている。米が取れなかったこの地で、旧桑名藩主が米に代わってカキの栽培を奨励した名残りではないかとのことである。カキの果実は、しかし、放置するとサルによる食害のもとにもなり、問題視されている。資源化を図るか、そうでなければ伐採するなどの措置が必要であろう。

●「JAみえきたファーマーズマーケットいなべっこ」などでの調査・聞き取りから

平成26年11月に阿下喜の「いなべっこ」を訪れた際、ヤマノイモの一品種である「ハツタイモ」をみた。これはイモの部分が球形で、かつ皮の部分が黒色の品種で、この地域の地方品種のひとつと思われる。すり下ろすと粘りがきわめて強く、また灰汁もやや強い。市が推奨しているソバと合わせてとろろそばにすれば地域の特産になるかもしれない。またハツタイモは冷蔵庫の野菜ボックスに二か月入れたままでも品質があまり劣化しなかった。

北勢線大泉駅近くの個人経営の直売所（みずほのおかげ市場）では、経営者のご主人日柴喜廣幸さん父子より、大安町石樽一帯にサトイモの品種があったと聞いた。これは京都に運ばれ伝統料理として使われていたとのことであるが、京都の伝統料理といえば芋棒のことであろう。そうだとすれば、このサトイモはエビイモの一種である。今では栽培をやめているとのことであった。

古田地区の「えぼし」（国道365号線沿い）では、地域の産品として草餅が売られている。店主の近藤正治さんが、地域産のもち米と近くでとれたヨモギだけを原料として作っているもので、国道沿いに出しているのでトラック運転手などを中心に一定の固定客もあり、しばしば売り切れになるという。

●農業公園レストラン「フラール」の北村光弘シェフからの聞き取り

フラールでは、いなべ市を中心に近隣の地町村で栽培（あるいは飼育）された食材を調理し、提供している。フラールの主な客層は、隣県の岐阜県や愛知県をはじめ、滋賀や京都、大阪など関西一円にもひろがっているという。

北村シェフは、「旬味まるごと三重」という活動を支援している。あるメニューに使われる食材のすべてを三重県産にするという活動である。これにヒントを得て、「まるごといなべ」という活動を始めてみてはどうかと語る。薬味やハーブに至るまですべてをいなべ産にするのは意外と難しいが、平地から標高が高く寒冷な気候を持つ土地が比較的豊富ないなべ市ならば可能であるという。いなべの特産として北村シェフはウメを挙げている。ただし西日本では和歌山県に梅干しの大産地があり、梅干しとして産地化するのはなかなか困難である。しかし、梅酢ならばどうかと北村シェフは語っている。先の柿酢と梅酢をセットにして商品化するのもおもしろそうである。

北村シェフは、GTとの関わりで見たとき、農産物を都市部で販売するような従来型の取り組みではなく、都市部の人びとがいなべに食べにくるモデルの開発が重要であるとしている。示唆に富んだ提案であると思われる。

●いなべ市ではそばに力を入れている。西日本の都市としては蕎麦屋が多いようにみうけられる。

またソバの栽培もよくみられるが、市内の蕎麦屋で消費されるだけの生産はおそらくなく、その拡大が求められる。

(3) ここまでのまとめ

「ここには特産といわれる食材はない」— いま日本のどの地域でも聞くこのせりふがいなべ市でもしばしば聞かれた。しかしよく調べてみると決してそうではないことがわかった。アンケートの結果を見ても、地域には多様な伝統食が残り、また豊かな食材がある。加えて地域の人びとの食への思い入れはとても深く、地域への愛着心が強いことがわかる。ただし、伝統食やその継承に関心を示すのは主に高齢の女性なので、今後はこうした人たちをターゲットに聞き取りを進めたり、こういう人たちを中心にした取り組みが必要であろう。

地理学的にみても、いなべ市は、日本列島における東西文化の境界線（若狭湾—伊勢湾線）上にある。角餅文化（餅はのしもちにして切って食べる）という東文化の特性を持つかと思えば京都に棒鱈用のエビイモを送るなど、東西文化の影響を映す食のハイブリダイゼーションをおこなっている。こうした性質はこの線上の限られた地域だけのものである。同時にいなべは関ヶ原から伊勢へ抜ける街道（いまの国道 365 号線）上に発達した町でもある。つまりここは北国街道と伊勢街道をつなぐ結節点の役目をはたしていたとも考えられる。

このような全国的な視点から今一度いなべの食をみつめ、地域の伝統食を掘り起こすことは、決して意味のないことではない。市民の視線で伝統の食材を守り、発掘し、発信してゆく動きを地道に支援してゆくことは、この地域にしかできない取り組みであるといえる。

3. 地域資源という観点 — 第3節のまとめ

GT を考えるとき、その要件として重要と思われるのは、訪ねてくる人をもてなすものを発掘すること、地域の人びと自身が取り組み、楽しめること、の2点であるといわれる。本節はこの前半部分の予備調査の結果をまとめたものだが、結論からいっていなべ市には、水、食材を含めて十分な資源が残されている。とくに食文化に支えられた食材は「再生可能資源」であり、取り組みによってはほぼ未来永劫、枯れることのない資源である。

これからの地方行政の成否を握るのは住民がどれだけ主体的に地域の生存にかかわれるかにかかっている。今どの地方地域でも高齢化が進み、活力が失われ、さまざまな活動がどんどん行政頼みになっている。GT に関する市民アンケートの回答をみても、本市でもその傾向の強いことがわかった。



第4節 地域安全調査（京都産業大学報告書抜粋）

1. 調査事項と目的

いなべ市 GT 調査「地域の安全」では、以下の2点について調査を行った。

第1に、グリーン・ツーリズム（GT）に関して、小・中学生が地域とともに参加できる可能性を探るとともに、第2に、安全・安心に関する調査を行い、GTと子どもの安全・安心や健全育成に係る教育プログラムの可能性について検討する。

2. いなべ市教育委員会での聞き取り

実施日：平成26年12月18日（木）

場 所：いなべ市教育委員会

聞き取り内容

今後の調査の対象とする小学校・中学校の紹介を依頼した。平成29年4月より、藤原中学校の敷地に、現在の5つの小学校が統合され、小・中一貫校となる。中学校としては、藤原中学校が調査対象として適切であろう。小学校としては、天然記念物の魚、ネコギギを活用しての教育をしている十社小学校が興味深いので紹介していただくことになった。

3. 藤原中学校での聞き取り

実施日：平成27年2月2日（月）

場 所：藤原中学校

聞き取り内容

【現在の課題】

平成29年4月より、藤原中学校の敷地に、現在の5つの小学校が統合され、小・中一貫校となる。現在、各小学校実施している行事を、そのままの形で統合後の小学校で実施することは困難である。従来のを活かしながら新しいものを作り上げる必要があるが、調整は難航が予想される。

各地区の行事で、中学生の時間がとられる。学校行事との調整が必要。

現在の課題や解決策を考えたときに、GTとの関連を持たせることができるものと、そうでないものがあるだろう。

【安心・安全に関する現在の課題】

中学生は、自転車で登下校をしているが、冬季は日没が早く、安全のために日が暮れないうちに下校させている。登下校時に交通事故が発生しているので、登下校時の安全確保が現在の課題である。学校行事で、日没後に下校する場合は、教員が手分けして車のライトで照らしながら、下校を補助している。下校補助の有料ボランティアの制度の導入を検討したい。道路灯の設置の検討をお願いしたい。

4. 立田地区住民へ聞き取り

1) 第1回調査

実施日：平成27年2月2日（月）

聞き取り対象：立田地区の皆様

場 所：喫茶店「やまびこ」

聞き取り内容

立田地区では、山村留学の制度を取り入れ、教育を中心として地域振興をしてきた。教育の成果は上がったと評価しているが、その結果、地区から巣立った子どもたちが戻ってこないという状況にある。その中核としての立田小学校が、平成 29 年 4 月より、藤原中学校の敷地に、現在の 5 つの小学校が統合され、小・中一貫校となるため、廃校となる。抜本的な新しい地域起こしを企画中である。良いアドバイスがあれば活用したい。

2) 第 2 回調査

実施日：平成 27 年 2 月 12 日（木）

聞き取り対象：立田地区の皆様

場 所：喫茶店「やまびこ」

聞き取り内容

(1) 立田地区における事業

立田地区には養鶏場跡地（2 ヘクタール）が存在し、その有効活用と地区活性化を図るため、来年度着工を目指し、農業と自立更生施設を兼ねた施設の建設が計画されている。建設予定地をまず、市と立田地区管理の 2 つに分け、市管理区域にはガラスハウス（しいたけ、きのこ栽培）、自立更生施設（障がい者、引きこもり、登校拒否児童対象）、食堂などを建設し、立田地区管理区域には貸農園、ビニールハウス（ハーブ、トマトの苗）、売店などの施設を建設する。

立田地区管理施設は「地元との交流を大切に」というコンセプトの下、例えば自立更生施設の人と地元民の交流を図っている。貸農園では、ただ単に農園を地域外の人に貸すだけでなく、1 件の契約につき、必ず地区の農家 1 名がついて農業指導をするなど、地元と密着した活動を目指して、現在、準備中である。

(2) 藤原中学校への統廃合の立田小学校跡の利用に関して

児童数の減少、小・中一貫校の実現のため、平成 29 年度に、藤原中学校敷地内に立田小学校が統合され、同学校区の児童は藤原中学へ通学することとなる。立田小学校は廃校となり、その跡地利用が大きな課題となっている。

同小学校は山村留学を強力に進めてきたこともあり、廃校後の山村留学の在り方もどうするのかも課題である。

同地区では上記の状況を踏まえて、校舎跡をどう活用するか検討中であるが、地区の高齢化が進行する事を見据え、福祉（地元民向け）という大きな軸を設けて、未病予防、小規模特養などの建設を考えている。

同地区では上記の状況を踏まえて、校舎跡をどう活用するか検討中であるが、地区の高齢化が進行する事を見据え、福祉（地元民向け）という大きな軸を設けて、未病予防、小規模特養などの建設を考えている。

また、山村留学に関しても統廃合後も継続していくが、簡易宿泊所を設けて、企業研修や大学生研修ができる体制を整え、半分、山村留学、残りの半分は農業体験なども検討している。教育に関しては立田地区には約 30 名の教員 OB が居住しているので、有償・無償の総合学習塾の展開を考えている。そして立田地区出身者で他府県に居住している人たちに地区新興に何か役に立

ってもらような企画をするなど、対外的な情報発信と内容の充実を図っていく。

いずれにせよ、立田地区という資格で上記事業を運営・展開していくのは難しいので、NPO法人を設立し、運営・企画をしていく計画である。

5. 十社小学校での聞き取り実施日：2月12日（木）

聞き取り対象：水貝明子校長場所：十社小学校

1) 自然と関係のある教育活動

(1) 田切川学習

田切川を舞台として、学年ごとに以下の取り組みをおこなっている。

1・2年生 田切川で遊ぼう。田切川に親しむ

2・3年生 川との触れ合いを通じて、田切川の生き物について調べる

5・6年生 田切川の水質検査や水生昆虫調べを通じて、環境保全について考える

全校児童 ネコギギについて知ろう

教育委員会生涯学習課の後藤さんを講師に招き、実際にネコギギを見せてもらいながら、ネコギギの生態や生息の現状について、お話を聞く（下図参照）。

保護者向け（夜）。ビデオを見せた後、講師のお話を聞く。

(2) 米づくり

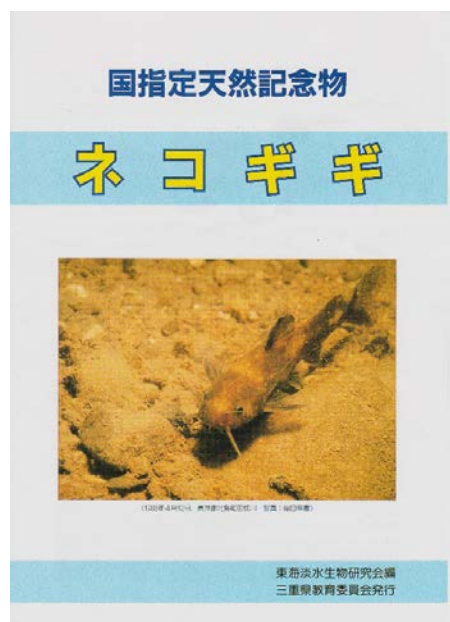
田植え、稲刈り、餅つき。季節に合わせてこれらの活動をおこなっている。

2) PTA主催の行事

魚釣り大会

星の観察（夜7時半から）

周りに街灯がないので星の観察に適している。



ネコギギの学習に使ったパンフレットの表紙（東海淡水生物研究会／三重県教育委員会）

3) その他の課題

(1) コミュニティースクール（地域からの支援）

放課後、児童の学習を見る地域からの支援等を増やしていただくことが今後の課題である。

（平成 26 年度支援者が一名できた。今後、時間をかけて地域からのご理解をいただきたい。）

(2) 通学の安全

分校が廃止され、バス通学が増加している。

6. まとめ

現在の課題や解決策を考えたときに、グリーン・ツーリズムとの関連を持たせることができるものと、そうでないものがあるだろう。

第 1 に、グリーン・ツーリズムに関するもの

1) 小・中学生が地域とともに参加できる可能性がある企画としては以下のものが考えられる。
十社小学校を利用するもの

(1) 天然記念物ネコギギについて知ろう

①田切川との触れ合い、②講師を招き、実際にネコギギを見せてもらいながら、ネコギギの生態や生息の現状について、お話を聞く企画は、子どもも大人も興味もてる企画となる可能性があると思われる。

(2) 星の観察会

周りに街灯がないので星の観察に適している。この企画は、ほかの事業、例えば空き家の活用方法と連携させる等の包括的な計画を立てることが必要だと思われる。

2) 立田地区

簡易宿泊所を設けて、企業研修や大学生研修ができる体制を整え、半分、山村留学、残りの半分は農業体験なども検討しているが、可能性が高い企画だと思われる。

教育に関しては、立田地区には約 30 名の教員 OB が居住しているので、有償・無償の総合学習塾の展開を考えているとのことであるが、これも地域の特徴を生かした実現可能性の高い企画だと思われる。

第 2 に、安全・安心に関する課題等

藤原中学校の生徒の下校時の安全確保は喫緊の重大な課題となっている。生徒は、自転車で登下校をしているが、冬季は日没が早く、安全のために日が暮れないうちに下校させている。

とりわけ下校時に交通事故が発生しているので、登下校時の安全確保が現在の課題である。学校行事で、日没後に下校する場合は、教員が手分けして車のライトで照らしながら、下校を補助している。

解決策としては、下校補助の有料ボランティアの制度の導入を検討と、道路灯の設置の検討をお願いしたい。

第5節 京都産業大学調査のまとめと提言（京都産業大学報告書抜粋）

「空き家の現状」「観光資源」「地域の課題」の3つの観点から行った本調査の結果を以下のように取りまとめます。

空き家調査の結果による学生たちの提案は10を数える。その活用を現実に図るためにはいくつかの課題もあり、これらがどの程度地域の実情に即しているかは今後の検討課題であるが、提案をみる限り学生たちの関心は単なる貸与よりは地域住民が中心となり、さまざまなイベントに活用することにあるといえよう。観光資源の調査では、いなべ市が豊かな資源や素材に恵まれている様子が浮き彫りになった。これらの資源とそれに関する情報は文字通り「地域の知」として地域にあるが、放置すれば失われゆく運命にある。また水質の調査では、いなべ市には硬水、軟水さまざまな水質の水があることが明らかとなった。それとともに水に関するさまざまな史跡の存在も改めて明らかになった。地域の課題では、地域が人口減少に伴う様々な課題を抱えつつもさまざまな取り組みをおこなっていることが改めて明らかとなった。とくに学校単位での取り組みが目をつけた。

調査期間は半年で、十分ではなかったため、可能ならば時期を変えて、さらに時間かけた調査を試みたいところではあるが、現段階でのまとめを以下のようにしておきたい。いなべ市は今回調査をおこなった北部の5地区を含め、使用可能なインフラとしての空き家、豊かな自然と歴史に支えられた豊富な資源に恵まれており、ポテンシャルとしてG Tの遂行は実現可能である。一方、日本の他の地域社会同様、少子高齢化と人間活動の低下およびそれに伴う獣害などの課題を背負っており、それは今後のさまざまな取り組みに少なからずマイナスの影響を及ぼしている。こうした事情を勘案すれば、例えば空き家を利用したさまざまなイベントの開催、また農家民宿に代表されるような食事と宿の提供などの試みが考えられる。この2つは、別々に取り組むイベントとして考えるのではなく、例えば空き家Aを活用してライブハウスをやり、また空き家Bを活用して参加者を宿泊させる、などを考えてはどうだろうか。あるいは、寒梅の時期だけ空き家Cを農家民宿に開放するといった取り組みも可能だろう。

こうした取り組みにあたって留意したいのは、取り組みはあくまで住民本位であることと、この取り組みに若い世代を積極的に参加させる仕組みを構築することである。ある事業を展開するのに、計画立案者がどこかよそにいて住民や当事者の一部はそれを手伝うだけといった旧来の方法がとられることがあるが、これでは地域おこしの事業はうまくゆかない。それに代わり、欧州の一部などで最近よく言われる共創(co-creation)、協働(co-production)といわれる原則とearly-engagement(アーリー・エンゲージメント)といわれる手法の採用を提唱したい。さまざまな当事者(ステークホルダー)を構想段階から参加させて事業を完遂するやり方で、妥協点を見つけやすいばかりか、当事者の満足度を高める効果が期待できる。

京都産業大学としては、平成27年度以降も学生を参加させ、地域の方々とともに議論しながら具体的なG T計画の練り上げと実施にあたらせたいと考える。同時に地域の歴史や史跡の学習を通じたいなべの魅力発掘の学習を進めたい。これに四日市大学等の地元大学の学生や、地域出身の高校生にも参加してもらい、講師は地元の語り部やさまざまな方にご協力を仰ぐなどして将来のG Tの担い手を育てる取り組みにもつなげたいと考える。

さらにこうした事業の展開を図るための何らかの民間組織の創設を考えてはどうだろうか。この組織が行政と協働関係のもとうまく機能すれば、地域への財政面での支援にもつながることが期待され、真に地域のための取り組みへと発展して行くことが期待できるのではないかと考えられる。

こうした一連の取り組みを「いなべ方式」として定着させることができれば、本G Tは地域の再生に真に役立つ方式として他地域の再生にもつながる成果を生むだろう。

第4章

基本方針の展開

第1節 いなべグリーン・ツーリズムを推進する際の基本的なコンセプト

【基本方針①】

いなべ市の豊かな自然を活用した、「地域(地元)に喜ばれる」「地域を愛する」グリーン・ツーリズムを推進します。

【基本方針②】

いなべ市の豊かな自然を活用した、農業体験などの参加・体験型観光を含めた、多様なグリーン・ツーリズムを推進します。

【コンセプト①】

圏域住民が自らグリーン・ツーリズムを実施(提供)する。

【コンセプト②】

圏域住民を対象にグリーン・ツーリズムを実施(提供)する。

【内容①】

グリーン・ツーリズムの場合、商業主義に基づくサービスの提供ではなく、地域資源を活用したサービスの提供を行うことで、地域に対する理解を促進するためにあるということです。

【内容②】

地域に喜ばれ、地域を愛するグリーン・ツーリズムを目指すということであり、地域(地元)の人達から認められて初めて周辺に波及することが想定されます。

【注意①】

グリーン・ツーリズムが農山漁村地域に賦存する地域の資源を活用して提供するサービスであることから、そこに住んでいる人が主体となって事業を実施することが重要となります。お客様と受け入れを行う者との間の「会話」であり、会話がなければ理解が促進されることはなく、会話によって地域を理解し、“地域” = “いなべ市に対する愛着を生む”ということになります。このような一連の行動を「交流」といい、交流を促進するためにグリーン・ツーリズムを自ら行う必要があります。

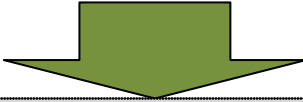
【注意②】

いなべグリーン・ツーリズムは、圏域住民を対象又は、ターゲットとした推進を行うことが重要となります。

要するに地産地消型のレクリエーションとしてグリーン・ツーリズムを位置付け、地域にある資源を地域の人達が享受し、楽しみ、理解し、愛着を育むという流れを生み出すということが重要となります。

第2節 いなベグリーン・ツーリズムの検討の方法

これまで、約20年以上にわたって、全国各地でグリーン・ツーリズムの取り組みが行われてきました。これらの多くの地域は必ずしも成功しているわけではありません。むしろうまくいかないケースの方が多いことが見受けられます。これらの地域を分析すると、いくつか共通することがあり、失敗事例の逆を考慮して検討を行うことも賢明な方法であると考えられます。今回、失敗しないためのグリーン・ツーリズムの検討の方法を次のように整理することとしました。

- 
- ① 地元での話し合いを中心に進めること
 - ② 人材と地域の資源を活用すること
 - ③ 誰がやるのか、何をやるのかを先に定めること
 - ④ お客様は身近な人たちであるということ
 - ⑤ 自分たちがやって楽しいことを事業化すること
 - ⑥ 行政は永遠にかかわり、二人三脚で歩むこと

【①地元での話し合い】

地域内での協議を中心として進めることが重要であり、その場を設けることからスタートするべきである。

【②人材と地域の資源を活用】

グリーン・ツーリズムの基本は地域に存在する資源を活用することであり、地域資源の中でも最も重要なのが人材である。

【③誰がやるのか、何をやるのか】

交流による地域の活性化である以上、何をやるか、誰がやるかが重要であり、この2つは常に一緒に考えなければならない。

【④お客様は身近な人たち】

グリーン・ツーリズムの第一ターゲットは、圏域に住む人たちであり、地域に認められ、地域に愛されることが重要である。そのうえで、地域内での需要が生じるようにすることである。

【⑤自分たちがやって楽しいことを】

人間は、人が食べておいしいと思うものを食べたいと思うものである。そのため、地域で食されているものを取り上げ、地元で楽しんでいるもの事業化することが重要である。

【⑥行政との二人三脚】

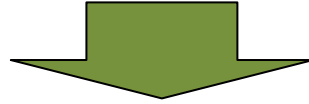
行政が推進するグリーン・ツーリズムであることから、行政は退いてはならず、事業費等の援助をしなくても、人的援助はやめてはならない。

6つのポイントを留意しながら、いなベグリーン・ツーリズムを検討、推進することで、必ず現実的で地に足の着いたグリーン・ツーリズムの推進が行われると考えます。

また、5年後の結実を目指して長い目でじっくりと取り組んでいく必要があります。

第3節 いなベグリーン・ツーリズムの対象者と内容

「いなベ市のグリーン・ツーリズムの検討の方法」で記述した“グリーン・ツーリズムの第一ターゲットは、圏域に住む人たち”の考え方をもとに、いなベ市に住むどのような人を対象にグリーン・ツーリズムを行うのか、ターゲットについて考えると、次の人たちを対象とすることが望ましいと考えられます。



【①いなベ市の将来を担う人たち → 幼児と保育園児（および母親）、小学生】

体験を中心としたグリーン・ツーリズムを提供し、より多くの経験を通して、様々ないなベ市の資源、産業、食、他を知ってもらい、楽しんでもらう。

【②いなベ市の消費を支える人たち → 30代、40代、50代の主婦】

この年代の関心は食にあると考えられることから、食に関するありとあらゆる体験や知識の提供、生活に密着した行事とのかかわりを提供する。

【③いなベ市で楽しみを見つけたい人たち → 50代、60代の男性】

いわゆる趣味等の提供、居場所の提供、そして農業においては定年就農といった新しい労働力として、楽しみながら地域とかがわってもらおうこととする。

【④いなベ市で穏やかな余生を過ごしたい人たち → 高齢者】

人生の終焉を迎えるにあたって、穏やかで安らぎと安心のある生活を地域の方々の協力のもとで提供する。

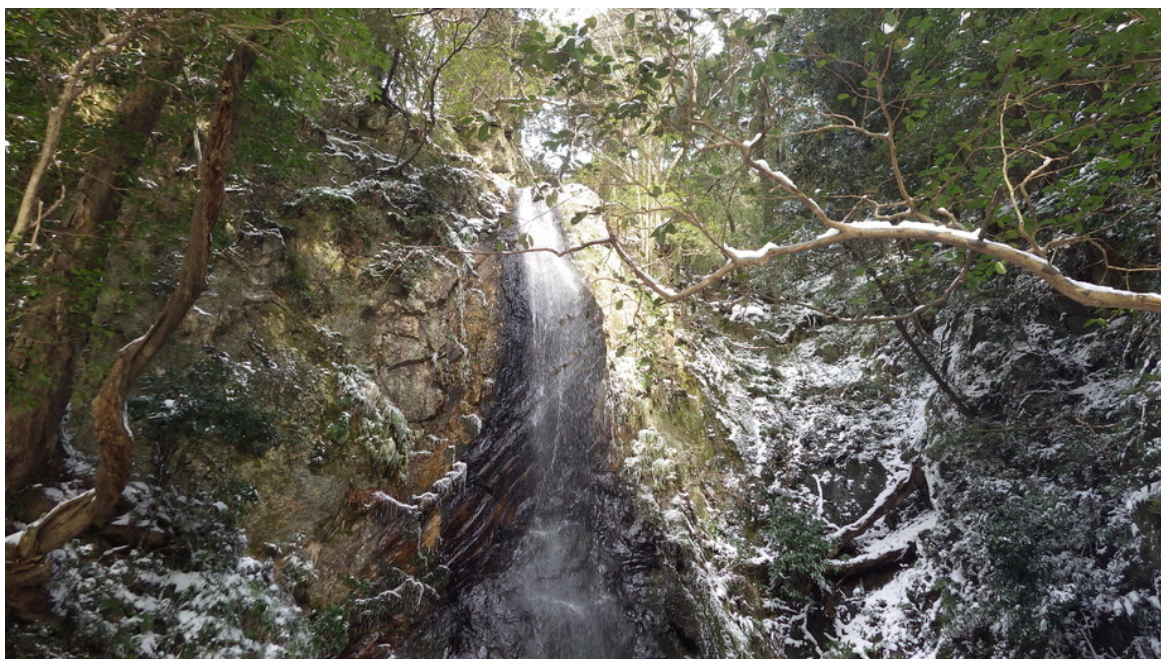
手法は、様々な考えることができますが、このような考え方を参考にして、自分たちがどのような人たちと関わりたいのか、何ができるのか、地域では何が求められているのかを相互に考え、検討していくことが重要となります。

- 1 川原地区
- 2 二之瀬地区
- 3 篠立地区
- 4 古田地区
- 5 鼎地区



【川原地区】

<p>現状と課題</p>	<p>川原地区は、地区の中心部にはランドマークの丸山神社が鎮座し、美しい田園風景の広がる地域です。観光資源にも恵まれた地区であり、東林寺白滝は、養老の雌滝ともよばれ、上流にはカジカや山椒魚も棲息しており、良質な自然環境が残っている隠れた景勝地となっています。また、川原地区には、川原白滝棚田があり、一度は衰退してしまったものの、地元有志の棚田保存会のオーナー制度により棚田を復活させました。しかし、現在は担い手不足や獣害被害により廃田となっています。獣害被害は棚田だけではなく、地区全域に及んでおり、住民へのアンケート調査でも約57%と半数以上が獣害被害を地域の課題と回答しており、早急な対応が必要です。</p> <p>また、空き家や耕作放棄地も課題であり、恵まれた自然環境と観光資源のある地区だけに、これらをいかにして活用し、誘客に繋げていくのかを考える必要があります。先行事例では、いなべ市内企業が川原地区の耕作放棄地の水田、畑地を借りて農作物をつくり、空き家を従業員が宿泊できる施設として運営しています。</p>
<p>目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 獣害対策による安定した農作物の生産、収穫とそれに伴う住民の心の安心 ・ 空き家、未利用施設、耕作放棄地の有効利用による誘客施設の整備と地域雇用の創出 ・ 観光誘客により地域に収益をもたらす。



<p>具体的な取組み</p>	<p>○獣害対策団体の組織化と追払い活動の実施 地区内の空き家を拠点とした獣害対策ボランティア団体の組織化と、猿の追払い活動について検討をすすめます。</p> <p>○OGT 観光の総合拠点の整備 地区の中央部に位置する旧分校跡地や、隣接する農協跡地の蔵及び郵便局建物の有効活用について検討をすすめます。</p> <p>○特産品の開発 農作物の地産地消や加工商品の開発などを図ります。</p> <p>○産学民の連携 大学や地元企業と連携して地域活性化の検討をすすめます。</p>				
<p>スケジュール</p>	<p>H27 年度</p>	<p>H28 年度</p>	<p>H29 年度</p>	<p>H30 年度</p>	<p>H31 年度</p>
<p>体制づくり</p>	<p>→</p>				
<p>実施計画（設計）</p>		<p>→</p>			
<p>整備</p>			<p>→</p>		
<p>受け入れ</p>				<p>→</p>	



【二之瀬地区】

現状と課題	<p>57世帯、179人が暮らす二之瀬地区は、高齢化率33%、平均年齢51歳といなべ市のそれぞれの平均を大きく上回っています。人口の25%を占める60歳代が地域自治や文化伝統の中心的役割を担い、当該年代層の女性がこれを支えています。耕作放棄地が発生しないよう、これらの層を中心に構成する農家組合が農地の管理をするなど、地域は地域の手で守っていかこうとする取組みが進められています。しかし、この年代層も10年後には後期高齢者となり、次世代（50、40歳代）の担い手育成や地域文化の伝承を急がなければなりません。また、次世代のさらに次の世代を担う30歳台以下が少なく、地域自治を継続するにはこの年代層の増加が必要であります。</p> <p>養老山地にいだかれ二之瀬峠へと続く南濃北勢線は、一年を通してドライブや遠足、サイクリングで訪れる人も多く、二之瀬峠から望む景色は都会人だけでなく地域住民の心も打つものです。二之瀬日尾神社や庄屋屋敷など魅力的な地域資源もあり、グリーン・ツーリズムの可能性を持った地域と言えます。</p> <p>このような地域の現状と特徴を踏まえ、グリーン・ツーリズムの推進にむけた熟議を次年度以降も進めていく必要があります。</p>
目的	<ul style="list-style-type: none">・次世代を担う人材の育成・地域の文化、伝統の継承・若者、よそ者との交流による新たな地域の魅力発見



具体的な取組み	○グリーン・ツーリズムによる地域活性化に向けた地域ぐるみの話し合い ○農作業や環境保全活動、地域の伝統文化行事への大学生など若者の受入れ ○大学生との連携した地域の活性化イベントの検討				
スケジュール	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度
体制づくり	→				
GT 推進の検討	→				



【篠立地区】

<p>現状と課題</p>	<p>篠立地区は進む少子化に歯止めをかけるため地域が立ち上がり、豊かな自然のなか教育を核とした地域づくりを進めてきました。昭和63年から始まった山村留学や新貝団地の開発により20歳代の人口が増える一方で、この世代より一つ上の30歳代が総人口の7%と極端に少なく、現在の少子化の要因となっています。これらが地域の人口バランスに大きな影響（ひょうたん型）を及ぼしています。今後はこの人口バランスを少しでも安定したものとするため、再び少子化に歯止めをかける必要があります。また、これまで培ってきた教育を核とした地域づくりや地域の伝統を、次世代へと確実に継承できる担い手の育成が課題です。</p> <p>また平成29年に、これまで地域の教育を担い、地域コミュニティの中核をなしてきた立田小学校が廃止されることから、これに代わる新たな立田地域の拠点づくりについて、古田地区と連携しながら検討していく必要があります。</p> <p>篠立地区では遊学祭などの地域行事があり、風穴や西山林道などの自然資源も豊富であることに加え、秀真の会などの地域活性化組織の基盤も確立していることから、これらの強みを活かし、地域活性化を進めていく必要があります。また、いなべ市が進める「農と福祉の活性化事業」との連携が更なる地域活性化の推進力になるものと思われます。</p>
<p>目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・農と福祉の活性化事業の「農」の分野を活用した地域活性化 ・遊学祭など体験プログラムを活用した交流人口の拡大 ・立田小学校に代わる新たな「地域の柱」の創出



<p>具体的な取組み</p>	<p>○遊学祭など体験プログラムを活用した交流人口の拡大 遊学祭などの体験イベントをグリーン・ツーリズムのプログラムとして確立を図るとともに、地域外への積極的な発信により交流人口の拡大を図ります。</p> <p>○農と福祉の活性化事業の「農」の分野を活用した地域活性化 舞谷地内に整備される地域活性化施設を管理運営できる人材を全国に広く求めるとともに、都市住民を対象とした市民農園や農業体験プログラムなどを開発し地域雇用と交流人口の拡大を図ります。</p> <p>○空き施設や空き家の有効活用 企業と連携し、“ふじのいち”などの休眠施設を有効活用した雇用の創出に取り組むとともに、都市住民の移住や二地域居住に対応するため空き家の有効活用を図ります。</p> <p>○小学校跡地の利用検討 立田小学校の跡地利用について、古田地区と協働しながら地域・交流の拠点となるような検討を進めます。</p>				
<p>スケジュール</p>	<p>H27 年度</p>	<p>H28 年度</p>	<p>H29 年度</p>	<p>H30 年度</p>	<p>H31 年度</p>
<p>遊学祭等の拡充</p>	<p>—————→</p>				
<p>実施計画（設計）</p>	<p>————→</p>				
<p>整備</p>	<p>————→</p>				
<p>外部人材の募集</p>	<p>————→</p>				
<p>学校跡地利用検討</p>	<p>————→</p>				



【古田地区】

現状と課題	<p>これまで古田地区は、合併前から農地の集積や6次産業化などをすすめるとともに、地域の有志による組織「ほうすけクラブ」を結成し、6次産品の製造、農産物直売所の運営や農業体験の受入れなどグリーン・ツーリズムの取り組みを進めてきました。これらの取り組みは毎日新聞社主催の「グリーンツーリズム大賞」を受賞するなど全国的にも高い評価を受けています。しかし近年ではこれまで地域を支えてきた担い手の高齢化と次世代の担い手の不在が課題となっており、次の世代の担い手を育成し技術文化を継承していくことが急務となっています。いなべグリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート調査においても、他の地区と同様に「高齢化」「少子化」は上位に位置しており、地域の課題として意識されています。</p> <p>また平成29年に、これまで地域の教育を担い、地域コミュニティの中核をなしてきた立田小学校の廃止が予定されていることから、これに代わる新たな地域の拠点づくりについて、近接する篠立地区と連携しながら検討していく必要があります。</p>
目的	<ul style="list-style-type: none">• 地域の担い手の世代交代• 体験受入における持続性の高いビジネスモデルの構築• 立田小学校に代わる新たな「地域の柱」の創出



<p>具体的な取り組み</p>	<p>○新たな担い手の育成 後継者の不在が地域の課題となっていることから、地域おこし協力隊制度を活用するなど、地域にやる気のある若者を呼び込むことで後継者の育成を図ります。</p> <p>○地域ビジネスの活性化 現在の農産物直売所での物販に加えて消費期限の長い新規商品の開発に取り組み、食に関心が高い層をターゲットに新たな販路開拓を図ります。</p> <p>○農作業体験・自然体験の受入体制充実と収益性の確保 これまで実施してきた田植え体験、稲刈り体験、炭焼き体験、陶芸体験などの体験受入について、安全管理の徹底やインストラクターの養成などを行うことでサービスの質の向上を図ります。また行政や大学のチャンネルを活用して広く発信し、大学生を対象とした展開も併せてすすめることで収益性の確保を図ります。</p> <p>○小学校跡地の利用検討 立田小学校の跡地利用について、篠立地区と協働しながら地域・交流の拠点となるような検討を進めます。</p>				
<p>スケジュール</p>	<p>H27 年度</p>	<p>H28 年度</p>	<p>H29 年度</p>	<p>H30 年度</p>	<p>H31 年度</p>
<p>外部人材の募集</p>	<p>→</p>				
<p>販路開拓</p>	<p>→</p>				
<p>農作業体験の拡充</p>	<p>→</p>				
<p>学校跡地利用検討</p>	<p>→</p>				



【鼎地区】

<p>現状と課題</p>	<p>鼎地区における合併後の人口推移では、総人口の約 20.8%にあたる 55 名が減少しています。</p> <p>現在の人口で社会動態を加味せず 10 年後の平成 37 年(西暦 2025 年)で推計すると、高齢人口は総人口の約 45%から約 60%に増加することや生産年齢人口(15 歳から 64 歳)中の結婚・出産・子育て年齢世代の中心となる 20 歳から 39 歳では、女性 10 名、男性 6 名と予測されます。この年代は、就学や就職により転出が考えられることや、特に女性は、結婚による転出が考えられます。</p> <p>また、いなベグリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート調査においても、回答者の約 70%の方が、「集落の人口が減少している」と答えており、「高齢化」や「少子化」もそれぞれ約 46%、32%と回答されていることから、人口関係の問題は、地区内で共有された課題となっていることから、早急に人口対策に取り組む必要があります。</p> <p>なお、地区内では、地区出身者が再び故郷に戻ってきてほしいと望んでいるニーズもあることから、JターンやIターンではなく、Uターン促進を中心に取り組むことが重要となっています。</p> <p>「鳥獣害で困っている」では、回答者の約 51%の方が回答しており、鼎地区の大きな課題となっています。</p> <p>また、興味があること、地域を盛り上げていく活動についての設問は、地区内に 27 戸の空き家があることや、京都産業大学による空き家の調査もあったことから「空き家の賃貸」が最も高く、次いで「高齢者のケア」、「体験農園」を回答した方が多くなっており、地区住民のニーズも踏まえて地域で何ができるかを検討することも重要となります。</p> <p>これらのことから、地域活性化を行うため、地域内で優先順位を決めて取り組むことが必要となります。</p>
<p>目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少の克服 ・鳥獣害被害防止に向けた地域内の体制づくりの強化 ・グリーン・ツーリズムの推進の具体化



<p>具体的な取組み</p>	<p>○移住促進 空き家を活用したUターンの促進を中心にJターンやIターンの促進について検討を進めます。 また、耕作放棄地などを活用した近隣企業の社員向け住宅開発について検討を進めます。</p> <p>○鳥獣害対策 高齢化による担い手不足の問題から、大学や他地区と連携した有害鳥獣の追払い、行政や猟友会などと連携した有害鳥獣の駆除に向けた地区内の体制づくりについて検討を進めます。</p> <p>○高齢者のケア活動 交流拠点における高齢者の生きがいづくりや、ケア活動などについて検討を進めます。</p> <p>○グリーン・ツーリズム推進による地域活性化 農業公園のクラインガルテンを活用した農作業体験の受け入れなどについて検討を進めます。 タケノコの産地直送販売などについても検討を進めます。</p>				
<p>スケジュール</p>	<p>H27 年度</p>	<p>H28 年度</p>	<p>H29 年度</p>	<p>H30 年度</p>	<p>H31 年度</p>
<p>体制づくり</p>	<p>→</p>				
<p>獣害対策の検討</p>	<p>→</p>				
<p>高齢者ケア検討</p>	<p>→</p>				
<p>GT 推進の検討</p>	<p>→</p>				
<p></p>	<p></p>				

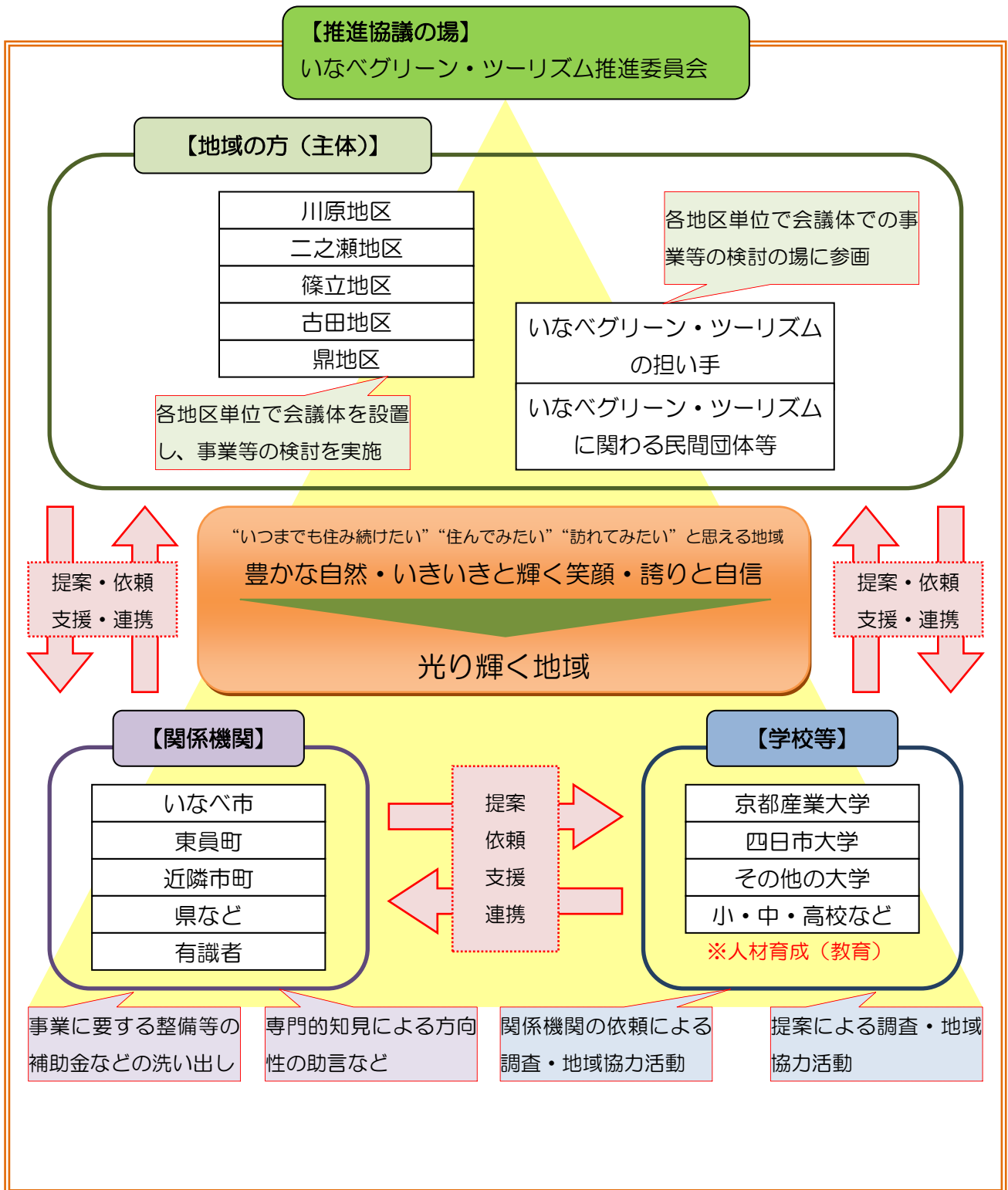


第6章

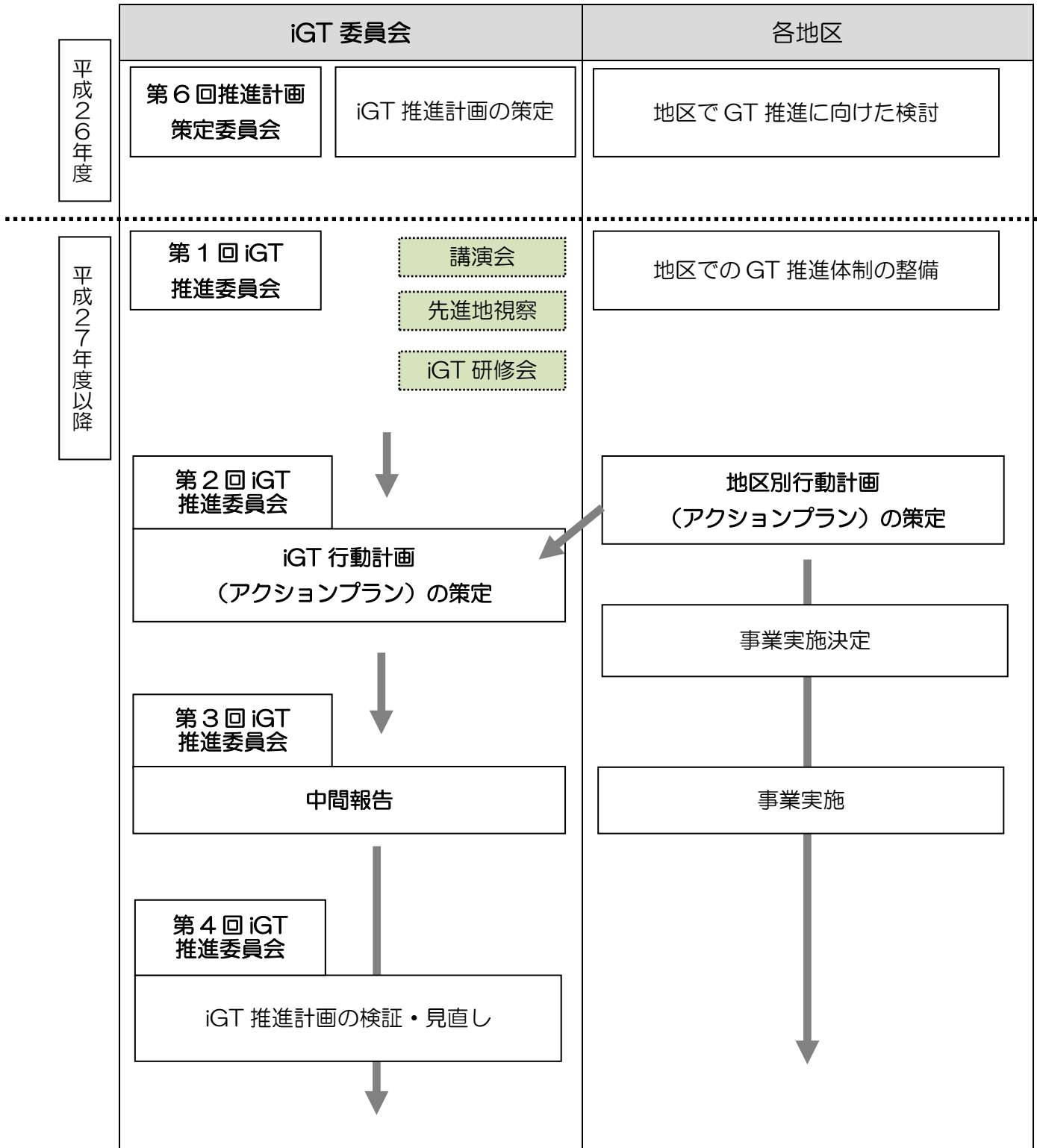
グリーン・ツーリズムの推進に向けて

第1節 推進体制

地域の方を中心として、市、関係団体、学校等が「連携・支援・協力」し、いなベグリーン・ツーリズムを推進していきます。



いなベグリーン・ツーリズム (iGT) 推進事業の流れ



※ は、随時

第2節 目標指標

No.	指標名	目標/実績	H26	H27	H31
1	グリーン・ツーリズムの拠点数	目標値	—	2箇所	5箇所
2	誘客人数	目標値	—	150人	500人
3	空き家・未利用施設の調査施設数	目標値	10施設	—	—
		実績値	55施設		
4	地域活動日数	目標値	15日	—	5日
		実績値	16日		
5	地域課題への協力日数	目標値	15日	—	25日
		実績値	0日		

【参考指標】

No.	指標名	目標/実績	H26	H27	H31
1	学生等の活動延べ人数	—	78人		

◎空き家・未利用施設の調査施設数

専門事業者ではありませんが、大学生が地域住民の立会いのもと、空き家の状況調査を実施し、目標を達成することができました。学生と地域住民が交流し、共に区内を歩き、空き家調査を実施することで、改めて区内の空き家の多さを感じることができたとの意見もあり、課題認識の観点からは、一定の効果を得ることができました。

◎地域活動日数

今年度は、事前調査や本調査を中心に活動を行ったことから目標を達成することができました。年度当初から地域活動内容調整等を行うことで、次年度以降は、今年度より多くの活動を行うことが可能になります。

◎地域課題への協力日数

今年度は、初年度ということもあり、地域調整が困難であったことから目標を達成することができませんでした。今後は、地域間調整などを年度当初から実施し、活動日数を増やしていきます。

第3節 今後の展開

今回実施した“いなベグリーン・ツーリズム”推進のためのモデル事業における、いなベグリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケートの結果から見る各モデル地区の方向性は、次のとおりとなります。

- ・川原地区：地域全体を活用した農業公園的な展開
- ・二之瀬地区：農村生活サポート型の交流活動
- ・篠立地区：食や食育を中心とした地域内循環活動
- ・古田地区：体験を中心とした援農型対外活動
- ・鼎地区：体験をベースとした発展的ストーリー展開

これらは、全ての地区の人達と話し合いによって決めたものでないことから、各地区の実際に行う又は地域性に特化したグリーン・ツーリズムの内容ではありません。

しかし、希望した内容の上位をまとめると上記のイメージになるということは、大筋では外れてはいないと推察することができます。

グリーン・ツーリズムを一步でも前に進めるためには、「やりたい者」、「やる気のある者」を中心にして、地域の合意形成を行わず具体的な事業の効果を発現させることも必要となりますが、“いなベグリーン・ツーリズム”は、地域全体の合意形成のうえで、地域の課題と向き合い、地域課題解決のために行政をはじめとする関係機関及び他地区との連携を図りながら具体的な活動へと展開していくことに重点を置いています。

今年度の“いなベグリーン・ツーリズム”の検討については、モデル地区の住民に対して情報提供とグリーン・ツーリズムの意向確認を中心に、研修会、先進地視察、アンケート調査、講演会などを実施してきました。

現在、委員会において、地域の課題に対する回避に関する意見や、主体的な活動のための方法論などの意見が多く出されるようになり、1年間の大きな成果となりました。

しかし、グリーン・ツーリズムの推進でなく、地域活性化に向けて地域住民が目覚めた1年であり、今後このような地域住民の意思を尊重し、短期間で結果を求めるのではなく、それぞれの地域ごとに、地域に合わせたやり方で、地道に活動を続けていくことが重要となります。

このことから、事業を進めていくための手順とそれぞれの段階で注意していくことを整理します。

【その1】：周知、報告

委員会において、「地元に戻ると、どのような話しが進められているか、聞かせてほしい」と言われるが、自分達では説明できないという意見があります。

委員の苦悩の様子がよくわかる意見であることから、地区ごとに説明・報告会を開催し、その場で「グリーン・ツーリズムとは何か」や、アンケート調査の報告などを実施するとともに今後の進め方について協議を行うことが重要となります。

【その2】：承認

今後の進め方についての協議について、出席者からその場で意見が出てくることは少ないと考えられます。また、鳥獣害対策のような地域の守備的なことに対する意見が主流となっては前向きな議論ができなくなることから、先に行動のための賛否を問うことが重要となります。

例えば、「高齢者を対象とした農家レストラン、弁当、総菜の宅配のような事業を始めたいと思うがどのように考えるか」など、必要だと思う人、やりたい人はいないか、といったことに対する意見交換を行うとともに、検討するためのチームを立ち上げることとします。

このような具体的な推進のための小チームを構築し、そのことに対する承認を得ることで、地域に周知されたグリーン・ツーリズムとなります。

なお、この段階で構築される小チームは、グリーン・ツーリズムやアンケート調査の結果にこだわる必要はありません。

【その3】：個別検討始動

「その2」で記述した小チームが、多く構築されることは大切ですが、個々の活動に任せていると、議論が小康状態に陥ることが予想されます。このことから、中立的な立場の外部の方（ファシリテーター）などを参加させ、実行に向けての議論を活発化させることが重要となります。

また議論はやがて議論のための議論になることが考えられることから、いずれかの段階で実験的な事業実施の機会を創出することが必要となります。この場合の機会はイベントが想定されます。

例えば、農家レストラン検討チームが市内のイベントにミニ農家レストランとして試験的に出展します。これは飲食の提供の現実、原価、収益、必要な人数、そして実際に核となる人材等を明確化することができます。

※ファシリテーターとは、促進者ともいわれ、中立な立場を守り、参加者の心の動きや状況を見ながら会議等を進行する人であって、参加者の気づきを促せる人をいう。

【その4】：報告と共有化

「その3」で記述した活動などは、定期的に委員会で情報の共有を行うことが重要となります。情報共有をおこなうことで、それぞれの地区の刺激につながるほか、今後の連携にもつながります。

【その5】：実行①

協議も進み、イベントへの出展などの実験的な事業も終わり、現実理解を行うことで、実際に事業を進めることとなります。

この段階になると許認可や出資、場所の特定、事業費の算定など各種専門的な領域が発生することとなります。地権者、専門家、行政、受益者などが参画しての共同作業となります。

また、この段階で気になるのは、地域の住民がどれだけ参加しているかになります。特に立ち上げにある程度の費用が必要となるのであれば、国や県の補助金などの支援がない限り、自己資金で賄うこととなります。その場合、事業の内容にもよりますが、できるだけ補助金などの支援に頼る

ことなく、自分たちで賄うことを前提として検討することが大切になります。補助金などの支援は一過性のため、一度利用すると習慣化する恐れがあり、依存の体質となってしまいます。

補助金などの支援がなくても健全に事業が進められることが重要となります。

【その6】：実行②

許認可関係が進み、施設整備などの調整となれば、次は本格的な実施の準備となります。

本来なら、「その3」で実施するものですが、事業に賛同し実行に携わる人たちの組織化が必要になります。事業規模により異なりますが、一般的には組織化するケースが多く、主に参加するうえでの規定、事業計画や予算、決算などがあります。

また、収益の分配や賃金に関することの取り決めも重要となります。従事する者のシフトといった雇用条件についても規定する必要があります。

これらは決して大げさなものではなく、既に地域にある任意団体の規約等を簡略化したものや、これまで積み上げてきた議論をまとめたものでも良いと考えます。

【まとめ】

“いなベグリーン・ツーリズム”により地域での話し合いなどの寄り合う機会を増やし、お互いの顔が見える関係の再構築することにより、「お互いのこと」、「地域のこと」、「地域の農産物」、「歴史」、「文化」、「産業」などを資源として、人との関わりを構築することで地域への愛着が深まり、人口減少や少子高齢化に対する効果につながることを期待できます。

新たな地域ビジネスを創出することも必要ですが、地域行事などを見つめ直し、拡充することで、地域の方ができるだけ参加できる“いなベグリーン・ツーリズム”を目指すことが重要となります。





附 属 資 料

- ・「若手企業人地域交流プログラム」を活用したこれまでの取り組み
- ・いなベグリーン・ツーリズム推進計画策定モデル地区委員会設置要綱
- ・いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会名簿
- ・いなベグリーン・ツーリズム推進にむけた経緯
- ・いなベグリーン・ツーリズム推進事業説明会、計画策定委員会

「若手企業人地域交流プログラム」を活用したこれまでの取り組み



【平成 24 年度】

【おいしい！いなべ産品簡単料理コンテスト】

市内で生産・収穫された産品や、これを加工したいなべ産品の地産地消とブランド化を推進するために、簡単料理コンテストを実施しました。

1



【金賞】

【銀賞】

【銅賞】



【観光まちづくり基礎講座】

いなべ市は農業のまち、工業のまちとして発展してきたこともあり、観光をまちづくりの戦略として展開し、外に向かってアピールすることは、市の職員にも十分に根付いているとは言えませんでした。

2



【旅行企画者から見たお客様が選ぶ「おみやげ」「お店」「観光地」講演会】

日頃、会う機会のない旅行の企画者から見た、お客さまが喜ぶおみやげ、お店、観光地などの情報に、地域のお店、施設の関係者や商工観光にたずさわる自治体職員が触れ、また人脈を作ることにより、地域の活性化を図ることを目的に講演会を実施しました。

3



【いなべ産品利用応援事業（いなべを食す）】

いなべ産品を積極的に使用し、又は取り扱う飲食店等について、いなべ産品使用宣言の店として登録し、その取組を応援することで、いなべ産品を利用拡大し、地産地消の推進を行っています。

4



【平成 25 年度】

1

【三重フェア参加&元気づくり交流研修】

一般社団法人元気クラブいなべに所属する元気リーダーなど 30 名が、いなべ市のブランドである「元気づくりシステム」の全国発信及び普及を目的に、三重フェアが行われた埼玉県越谷市イオンレイクタウンや群馬県川場村を訪れ、オリジナル体操を実演するなど交流を深めました。



2

【幸福な田舎のつくりかた講演会】

“地域の魅力を見つめ直し、一人でも多くの人に伝えていくにはどうすれば良いのか”をテーマに地域の飲食店や観光施設など商工関係者を対象に講演会及び交流会を開催しました。

～講師～

食環境ジャーナリスト・食総合プロデューサー

金丸 弘美 講師

～交流会～

【参加者】講師、うりぼう役員7名、篠立自治会7名、市長、副市長、職員4名

◎いなべ市には各々で頑張っている人が大勢いる、

そういう人達が繋がり一緒に頑張っていけるまちにしたい。

◎アドバイスのあった内容を検討し、実現していきたい。

◎農商工連携したまちづくりを目指す。



【里の旅プランナー研修】

いなべ市内の資源は地域の魅力ある宝であり、観光まちづくりのための大切な資源であることから、「里の旅プランナー」として地域の宝を磨きあげて、集客のためのプログラムをつくり、観光まちづくりを担う人を育成するため、約8か月にも渡る研修会を実施しました。

(1) 第1回 講座

なぜ観光なのか？観光を進めていくうえで大切なことは？

(2) 第2回 講座

①元気な街づくりに向けて

②「観光地域づくりの現場から（下田・南伊豆のケース）」

③「ニューツーリズム商品企画作りのポイント」

(3) 第3回 ワークショップ、プレゼン、講座

①ワークショップ

・「いなべの良いところ」、「いなべの10年後」についてまとめる

②プレゼンテーション

③資源活用の手順、資源調査の流れについて1

④資源活用の手順、資源調査の流れについて2

(4) 第4回 フィールドワーク

(5) 第5回 フィールドワーク

(6) 第6回 企画づくりワーク

3




【いなべ旅プランコンテスト】

圏域には地域特有の自然景観、生活文化、産業遺構、農産物など様々な資源が多数存在しており、こうした資源は地域の魅力ある宝として、観光による地域づくりのための有効な資源であるといえることから、コンテストでは、圏域の観光地域づくりへの機運の醸成と「いなべ」ならではの観光企画の商品化を目指すために、地域の魅力ある資源を活用した観光商品の企画を広く募集し、商品化にむけたコンテストを行いました。

4



5	<p>【mont-bell（モンベル）フレンドタウンいなべ市】</p> <p>大阪市のアウトドアメーカー「モンベル」の会員向けサービス「フレンドタウン」にいなべ市が県内で初めて登録されました。</p> <p>このことから、いなべ市内の「藤原岳」や「竜ヶ岳」を活用した玄人・素人向けの自然PRを行っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期間：平成25年4月～平成26年3月（その後も1年ごとに更新） ・全国に約30箇所、東海地方では飛騨市が登録済み
6	<p>【いなべ市観光等のPR活動】</p> <p>東京都の日本橋にある三重県のアンテナショップ「三重テラス」において、いなべ市の魅力発信イベントを行いました。当該イベントの企画調整も行いました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花の百名山 藤原岳に咲く花の紹介 ・滝巡りの宇賀溪 竜ヶ岳の滝の紹介 ・いなべ市に咲く花とその果実の紹介 ・アウトドアシーンで有効なロープワーク教室 ・西日本人気 No.1 の青川峡キャンプパークの魅力紹介 ・バードコール作成 ネイチャークラフト教室 ・モンベル×三重県立いなべ総合学園高等学校（山岳スキー部）による春夏ウェア・ギア ファッションショーの開催 ・国指定天然記念物「ネコギギ」の展示と保護活動の紹介 
7	<p>【モンベルを活用したいいなべ市フェア】</p> <p>藤原岳に咲く花々・竜ヶ岳の滝めぐりなどの写真を展示し、モンベルのお店を訪れる方にいなべ市をPRするイベントを開催しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京橋店 平成26年2月28日～3月13日

【平成 26 年度】

1

【里の旅プランナーを中心としたサロン】

里の旅プランナーを中心に月に1回程度の会議を実施し、地域の観光づくりに
ついて意見交換及び情報共有を行っています。



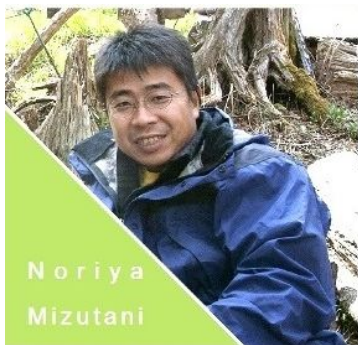
2

【モンベルを活用したいなべ市フェア】

- 京都駅前店 平成 26 年 7 月 5 日～21 日
- 名古屋店 平成 26 年 9 月 6 日～23 日

～内容～

『水谷のりや写真展 鈴鹿の山セブンマウンテン』



3

【いなベグリーン・ツーリズム推進調査事業】

○先進地視察（和歌山県田辺市（秋津野ガルデン）

- 平成 26 年 9 月 21 日（日） 参加者：21 名



【いなべ市フェア in イオンモール東員】

日時：平成27年2月21日～3月1日、午前10時から午後7時まで

場所：イオンモール東員 2F イオンホールA



4



～今後の予定～

【いなべ市フェア in Tokyo】

日時：平成27年3月20日、午後6時から午後8時30分まで

3月21日から22日、午前10時から午後5時30分まで

場所：三重テラス（東京都中央区日本橋室町2-4-1 YUITO ANNEX 2F）

～趣旨～

いなべ市の豊かな自然とアウトドアの魅力を伝えるイベントを発信力のある東京日本橋「三重テラス」で開催することにより、多くの方にいなべ市を知っていただくきっかけづくりをします。

また、東京といなべ市を繋ぐ企画により、いなべ市へ実際に足を運んでいただくお客様の増加を目的とします。

～内容～

いなべ市の自然の魅力を伝える写真展とワークショップ

○水谷のりや写真展「鈴鹿の山々～7 マウンテン～」

鈴鹿の山の写真家水谷のりや氏による「いなべ市の自然の魅力を伝える写真展。

1 ○いなべ市×ランドネ トークショー

山女子向けアウトドア雑誌のトップランナー「ランドネ」。

山大学や取材を通じてランドネ編集部が感じたいなべ市の魅力紹介のほか、春からの山の楽しみ方、最新山ファッションなど山女子必見の情報満載です。

○はしもとみお作品展・トークショー・ワークショップ

いなべ市在住の有名彫刻家「はしもとみお」氏の作品展、トークショー、ワークショップ。

トークショーは移住者の目線でいなべ市の魅力を語ります。ワークショップはいなべ市ゆかりの動物「猿」の手のひらサイズ彫刻を開催します。



（目的）

第1条 いなベ市が持つ豊富な地域資源を活用し、地域住民を主体としたグリーン・ツーリズムにより、地域の活性化を図るためのいなベグリーン・ツーリズム推進計画の策定に当たり、市民の意見を反映させるため、いなベグリーン・ツーリズム推進計画策定モデル地区委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（組織）

第2条 委員会は、委員20名以内をもって組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから市長が委嘱し、又は任命する。

（1）学識経験を有する者

（2）モデル地区の代表者

（3）その他市長が特に必要と認めた者

3 市長又は会長は、特に認める場合、委員の交代及び追加をすることができる。

（会長及び副会長）

第3条 委員会に会長及び副会長を置き、委員の互選によってこれを定める。

2 会長は、会務を総理し、委員会を代表する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。

（委員の任期）

第4条 委員の任期は、平成26年10月7日より平成27年3月31日までとする。

（会議）

第5条 委員会の会議（以下「会議」という。）は会長が招集し、その議長となる。

2 会議は、委員の定数の半数以上の委員が出席しなければ、これを開くことができない。

3 会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

4 会議において必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

5 会長が適当と認めた場合は、公開とする。

（会議録等）

第6条 会議録には、次の各号に定める事項を記載しなければならない。

（1）会議名

（2）開催日時

（3）開催場所

- (4) 出席した委員等の人数
- (5) 発言の内容
- (6) その他委員会が必要と認める事項

2 会議録は、会議終了後、速やかに作成し、市のホームページ等により公表しなければならない。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、企画部広報秘書課において処理する。

(雑則)

第8条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は別に会長が定める。

附 則

(施行期日)

1 この要綱は、平成26年10月1日から施行する。

(経過措置)

2 この要綱の施行後最初に開かれる会議は、第5条の規定にかかわらず、いなべ市長が招集する。

いなべグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会名簿

【委員】

No.	委員	氏名	役職等
1	会長	佐藤 洋一郎	京都産業大学 フューチャーセンター教授
2	副会長	吉野 睦	いなべ市副市長
3	委員	三羽 守夫	篠立地区代表者
4	委員	高橋 賢次	篠立地区代表者
5	委員	藤田 勝義	古田地区代表者
6	委員	藤田 久光	古田地区代表者
7	委員	伊藤 憲朗	鼎地区代表者
8	委員	西脇 一也	鼎地区代表者
9	委員	小寺 日出見	川原地区代表者
10	委員	近藤 和美	川原地区代表者
11	委員	川崎 宗幸	二之瀬地区代表者
12	委員	斉藤 数行	二之瀬地区代表者
13	委員	耳野 健二	京都産業大学 法学部教授

【オブザーバー】

No.	氏名	役職等	分野
1	小西 肇	三重県桑名農政事務所 副参事兼課長 (桑名地域農業改良普及センター)	行政
2	日置 貴久	東員町企画部政策課課長補佐	行政
3	仲田 大介	東員町建設部産業課産業振興係長	行政
4	奥村 靖之	京都産業大学 学長室課長補佐	大学
5	吉岡 靖二	一般財団法人都市農山村交流活性化機構	アドバイザー
6	上野 美帆	一般財団法人都市農山村交流活性化機構	アドバイザー

いなベグリーン・ツーリズム推進にむけた経緯

年月日	実施事項	内容等
平成 26 年 7 月 24 日 ～7 月 30 日	推進事業説明 (モデル地区自治会長 他)	いなベグリーン・ツーリズム推進に至った経緯などの事業説明
平成 26 年 8 月 9 日	推進事業説明 (二之瀬地区)	いなベグリーン・ツーリズム推進に至った経緯などの事業説明
平成 26 年 8 月 27 日	京都産業大学との連携協力に関する包括協定調印式	
平成 26 年 9 月 3 日	合同事業説明会	いなベグリーン・ツーリズム推進に至った経緯などの事業説明
平成 26 年 9 月 21 日	先進地視察	和歌山県田辺市(秋津野ガルデン)
平成 26 年 10 月 7 日	第 1 回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会	市長あいさつ 委員等紹介 会長、副会長について 会長あいさつ 説明及び報告事項 ・これからの会議の進め方について ・京都産業大学の調査について
平成 26 年 10 月 7 日	いなベグリーン・ツーリズム推進研修会	・グリーン・ツーリズムとは何か ・グリーン・ツーリズムの実践事例
平成 26 年 11 月 1 日	推進事業説明 (篠立地区)	いなベグリーン・ツーリズム推進に至った経緯などの事業説明
平成 26 年 11 月 7 日	京都産業大学市内視察等	篠立地区の代表者から、地域活動や歴史などについて説明を受ける
平成 26 年 11 月 8 日	推進事業説明 (二之瀬地区)	いなベグリーン・ツーリズム推進に至った経緯などの事業説明
平成 26 年 11 月 13 日 ～14 日	地域資源発掘調査 (水あしらいの歴史)	市内史跡等の調査
平成 26 年 11 月 16 日	推進事業説明 (川原地区)	いなベグリーン・ツーリズム推進に至った経緯などの事業説明
平成 26 年 11 月 17 日	第 2 回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会	説明及び報告事項 ・スケジュールについて ・前回会議の振り返り ・各種調査受入の意向確認 ・推進計画策定委員会によるアンケート調査について ・京都産業大学による調査について

年月日	実施事項	内容等
平成 26 年 11 月 21 日 ～平成 27 年 1 月 5 日	いなベグリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート調査	配布～回収 ・各世帯 2 部
平成 26 年 11 月 26 日	空き家事前調査	篠立地区数戸を実験的に調査
平成 26 年 12 月 5 日	空き家事前調査	・川原地区→二之瀬地区 ・クラインガルデン→鼎地区→篠立地区
平成 26 年 12 月 18 日	地域の課題等調査 (地域の安全)	教育委員会において、今後の調査方法等の検討
平成 26 年 12 月 20 日	四日市大学市内視察	いなべ市視察
平成 27 年 1 月 20 日	獣害対策研修会	「平成の里人」 講師：酒井 義広 氏
平成 27 年 2 月 2 日	地域の課題調査 (地域の安全)	藤原中学校長からの聞き取り調査
平成 27 年 2 月 3 日	地域資源発掘調査 (在来野菜調査)	農業公園レストラン フラールの北村シェフへのインタビュー など
平成 27 年 2 月 4 日	地域調査	みずほのおかげ市場において日紫喜親子から聞き取り調査
平成 27 年 2 月 4 日	地域調査	語り部さんから歴史・伝統の聞き取り調査
平成 27 年 2 月 9 日	第 3 回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会	説明及び報告事項 ・京都産業大学による調査の経過報告について ・いなベグリーン・ツーリズム推進に向けた市民意向アンケート調査の集計結果報告について ・各自治会の取り組み状況報告について ・いなベグリーン・ツーリズム推進計画の骨子案について
平成 27 年 2 月 9 日 ～10 日	地域資源発掘調査 (水あしらいの歴史)	市内約 10 箇所の水質調査
平成 27 年 2 月 12 日	地域の課題調査 (地域の安全)	十社小学校長からの聞き取り調査
平成 27 年 2 月 18 日	第 4 回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会	説明及び審議事項 ・前回の追加説明について ・京都産業大学の調査について ・モデル地区における人口分析 ・いなベグリーン・ツーリズムにおける基本目標と基本方針の展開

年月日	実施事項	内容等
平成 27 年 2 月 19 日 ~20 日	四日市大学市内視察等	川原地区交流会、地区内視察等
平成 27 年 3 月 1 日	京都産業大学活動報告	空き家調査報告
平成 27 年 3 月 1 日	まちづくり講演会	「農林業を中心とした農山村の活性化」 講師：安田 喜憲 氏
平成 27 年 3 月 4 日	第 5 回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会	説明及び審議事項 <ul style="list-style-type: none"> ・モデル地区別計画について ・今後のいなベグリーン・ツーリズムの推進体制について ・京都産業大学の調査について
平成 27 年 3 月 17 日	第 6 回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会	・いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画書 市長へ授与

1 いなベグリーン・ツーリズム推進事業説明会

○日 時：平成 26 年 9 月 3 日（水）19:30～

○場 所：いなベ市藤原文化センター

○参加者：いなベ市関係地区代表者 18 名、いなベ市役所 7 名、まちむら交流きこう 1 名

（1）挨拶 吉野副市長

（2）説明

① グリーン・ツーリズムについて 説明：北川、吉岡

② 今後の進め方について 説明：北川

③ 先進地の視察について 説明：吉岡

（3）質疑応答

質問：事業の主体は誰なのか。

回答：事業の主体は住民の皆さんである。

そのため、地域から事業の内容を提案していかなければならない。

しかし、住民だけでなく、行政、外部が協力し合って進める。

これまでと違うのは、皆さんと話をしながら進める事業であること。

質問：平成 27 年度の予算の具体的な内容は？

地域で必要な経費は出してもらえるのか？

回答：視察等の研修の経費は予算としてみている。

今後の検討の中で、必要な事業費等があれば、今回の事業は市の多くの部にまたがっているので、必要な予算は各部に投げかけて検討を行う。

質問：この事業を受け入れても、何の資源もない中でその体制が作れるか不明だ。

当地区（県）地区だけは他の地域と離れていて人もいないので実施できるかわからない。

回答：大学生等と一緒に地域の中に入って行くので、その段階で課題を明確にしたい。

地域の人達と話し合う中で、何らかのできることわかるかもしれない。

質問：各地域で何人を集めるということは決まっているか？

回答：何人かに集まってもらうが、人数はやることによって変わってくる。

質問：視察研修の 21 日は地域の一斉清掃日なので参加ができない。

回答：当日の様子を紹介や第 2 回目の研修などを検討する。

質問：鳥獣害の被害等の現実の課題に直面しており、その課題の解決が先決である。

回答：そのような課題も今回の調査で明確にしていきたい。



2 第1回いなべグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会

○日 時：平成26年10月7日（火）19:00～

○場 所：北勢福祉センター 大会議室

○参加者：策定委員等11名、いなべ市役所13名、京都産業大学3名、東員町2名、
まちむら交流きこう2名

(1) 挨拶 吉野副市長

(2) 説明 いなべ市グリーン・ツーリズム推進計画策定についての説明（いなべ市 北川）

(3) 先進地視察についての説明（まちむら 吉岡）

(4) 京都産業大学の調査についての説明（京都産業大学 耳野）

- ・教員5名、学生10名程度で、地区の調査を行いたい。
- ・テーマは、①空き家の調査（今後の活用について）、②観光資源（いなべ市市民の水の使い方について）、③地域の安全・防災の状況、独居老人の有無など。
- ・世間知らずの学生もいるかと思うが、その時は厳しく指導いただきたい。

(5) 質疑応答

質問：川原地区代表

自分自身、今回の説明でやっと理解したが、この内容について大字全員に説明するものは無理。次の会議（11月17日）までの日にちも短く、区長としては判断しにくい。市役所なり、説明できる人が、集落に来ていただいて、説明してほしい。

回答：要望に対応する。

質問：全員を集めての説明は不可能。住民には伝わりづらい。

まずは地区の色々な長単位で説明をし、地区全体には、概要を書いた紙を配る等で対応は出来ないか。

田辺市での視察で、3年間徹底した獣害駆除を行った話（獣害ブランド化）について、いなべ市の担当課へは伝えて貰ったか。

回答：担当部局へは伝えて確認した。いなべ市も同じような対策があるとのこと。地元一丸となって取り組むことが重要。

質問：まちむら交流きこうと京都産業大学との関係は。連動はあるのか。

回答：連動する。

質問：まずは自治会に話をして賛同を得るのが先ではないか。

地区でも、守る会、中山間地域直接支払など、色々なグループがあり、それぞれで活動があるので、代表を集めて説明してはどうか。

回答：この事業は、3月までに推進計画を立てるというもので、すぐに何かに取り組むというものではないし、地区の賛同なしに進めるものでもない。アンケートを実施するなど、地区の資料を集めて、みなさんで考えてほしい。

質問：獣害も多いが、地区には立派な森林があり、伏流水で良い水があると汲みに来る人もいる。

水を売るかどうか、そういうことも含めて、獣害対策を徹底的にやるなど、住民や地区のいろんな組織に早急に呼びかけをして、協力してくれる人を中心に進めていきたい。

調査への地区の合意と、地区のやりたいことを出すのは、同時進行か。

草刈の人手、獣害対策では、活性化までつながらない。やりたいことを出せと言われても難しい。ある程度、順をおっていないと、到達点が先にあるのでは、出来ない。

回答：まずは調査について地域での合意を頂きたい。その上で、色々な課題や要望などが出てく
ると思う。その中で、これならできる、これは難しいと、まちむら交流きこうのアドバイ
スを頂きながら、進めていければと思う。

会長：今出た意見は、どの地区も共通の課題かと思う。

事務局でよく調整し、段階を踏んで進めていきたい。



3 第2回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会

○日 時：平成26年11月17日（月）19:00～

○場 所：北勢市民会館 視聴覚室

○参加者：策定委員等9名、いなべ市役所11名、京都産業大学2名、三重県1名、
東員町2名、まちむら交流きこう1名

(1) 挨拶 佐藤会長

(2) 説明

① スケジュールについて 説明：岡部長

② 前回会議の振り返り 説明：佐藤会長

③ 調査の受け入れに関する意向確認

・篠立地区 調査実施の説明済み

・古田地区 事業の詳細については未説明だが、過去にグリーン・ツーリズム大賞を受賞
しているのでこれからも進めたい。

・鼎地区 いいことなので空き家調査を含めて受け入れなどを前向きに進めたい。

・二之瀬地区 回覧で全地区に回し、調査の実施について説明済み。

・川原地区 内容理解には至らず反対はないが不明な点が多く具体的な説明が必要。

④ アンケート調査について 説明：北川

(3) 質疑応答

質問：配布から回収まで10日間しかないが期間が短すぎないか。

他の行事と併せて配布したいがそれではだめか。

回答：物理的に難しいようであれば各戸配布を郵送で対応が、それでは回収率が下がる。

質問：対象は全戸か。

回答：全戸を対象にしている。幅の広い意見を聞きたいことが目的である。

質問：2部の配布は不要ではないか。

回答：1部の配布で対応する。

質問：緊急配布では周知と理解が厳しく、理解されないまま進めるのはアンケートの信憑性が問われるのでやめた方がよい。

質問：回収率をどれくらいに考えているのか。

質問項目も多いし、自治会長が回収するには問題が多い。

質問：自治会長あての依頼の回覧文を先に送ってもらえないか。

質問：回答できる人だけ回収ということではダメか。

会長：それぞれの地区ごとに対応が異なるので配布、回収については再考をする。

また、12月の委員会で集計結果を発表することになっているが、期間が伸びることになったのでそれに合わせて後半の委員会開催が増える可能性があるが了解をいただきたい。（参考：篠立、古田、鼎、二之瀬は自治会で配布、川原は郵送を希望）



4 第3回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会

○日時：平成27年2月9日（月）19:00～

○場所：北勢市民会館 視聴覚室

○参加者：策定委員等9名、いなべ市役所10名、京都産業大学3名、三重県1名、まちむら交流きこう2名

(1) 挨拶 佐藤会長

(2) 説明

① 京都産業大学による調査の経過報告について 報告：耳野教授

- ・地域への調査に関する地域の協力への御礼
- ・空き家の調査、水の調査、在来野菜の調査、地域の安全に関する調査の4つの調査を実施中
- ・学生が行った調査については、学生自ら報告できるよう調整している

② 市民アンケートの集計結果の報告 報告：桐山

—資料により報告—

③ 各地区の取り組み状況について

- ・篠立地区 小学校の統合に併せて地域の将来を考えるプロジェクトが始まった。19名のメンバーで毎月検討を行っている。農業部は養鶏場の撤去と跡地利用について、教育部は山村留学を行っているのでその検討、他を行っている。運営費については地区の財

産の活用を検討している。

- ・古田地区 篠立地区と一緒に活動している。かつてグリーン・ツーリズムの計画を立てたいきさつがあるが、その後のことは不明である。
- ・鼎地区 空き家調査に関する御礼。グリーン・ツーリズムに限った検討は行っていないが、必要性は常に問いかけている。
- ・川原地区 空き家に関する調査を踏まえて、活用についてはまだ未定である。観光や農業資源と併せて地域の活性化を検討していきたい。地域全体を巻き込むのは大変なので、いろいろな人に声を掛けて、やりたいという人と一緒にやっていきたい。しかし鳥獣害対策なしには考えられないので、空き家対策と併せて実践するようなことを考えたい。また、グリーン・ツーリズムをすすめようとする地権者との関係が必ず発生するので、いろいろな人たちを関わらせて進めていきたい。

長く、きちんと進めるためには委員会方式が必要だと思う。

- ・二之瀬地区 空き家調査の対象家屋が家は立派だが老朽化が激しいので活用は難しい。活用できそうな神社があるので、それを使ってはどうかという意見が出ている。

④ グリーン・ツーリズム推進計画の骨子案について 説明：岡部長

—資料により説明—

⑤ 質疑、意見交換

意見：空き家の活用が議論されているが、仏壇があるため借りたり、活用したりはできない。

意見：家の貸し借りについては、市との協力により進められるとありがたい。

意見：全国に様々な事例がある。テレビでも地域活性化の番組がやっている。

意見：空き家でも都市に移り住んでいるだけの人もいるので、そういう人に戻ってきてもらうという手もあるのではないか。

質問：市の本気度や、グリーン・ツーリズムを推進するための特典はないか？

質問：アンケートの結果は開示してよいか？

回答：定量調査だけ開示して、フリーアンサーは開示しないということでどうか。

回答：報告書ができた段階で、その内容を公表してはどうか。

市：自由意見などの記載内容を精査してから公表するという事どうか。

質問：構想を持って地域住民に問いかけ、実際に自分の意志でやってくれる人を募って、やろういという人たちと一緒に進めていきたい。

質問：アンケートの結果に表れている積極的にやりたいという人は本当にいるのか？

市：行政も一体となって進めていくのが当然であるので、補助金などの活用も検討しながら進めていきたい。また地域おこし協力隊制度の活用も含めて検討を進めていきたい。

意見：アンケートの実施を知らない人が地域にいるので、全ての意見が集約されているわけではない。そのためその他の人の意見も聞きながら進めていきたい。

(3) その他

- ・まちづくり講演会についての参加、協力依頼について
- ・四日市大学との連携について

(4) 今後のスケジュールについて

5 第4回いなベグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会

○日時：平成27年2月18日（水）19:00～

○場所：北勢市民会館 視聴覚室

○参加者：策定委員等7名、いなべ市役所10名、京都産業大学2名、その他1名、
まちむら交流きこう1名

(1) 挨拶 佐藤会長

(2) 説明

事前報告

・アンケートの取り扱いについて：内容を精査して、公表できるような内容に整えたので、本日10部を配布する（追加対応可）。

・三重県より「三重の里いなか旅のスヌメ」の冊子の説明

① アンケート内容の追加説明 説明：吉岡

－資料により説明－

② 京都産業大学の調査の状況 説明：佐藤会長

－資料により報告－

③ モデル地区における人口分析 説明：和波課長

－資料により説明－

④ いなベグリーン・ツーリズムの基本目標と基本方針の展開 説明：岡部長

－資料により説明－

⑤ 質疑応答

意見：グリーン・ツーリズムを進めることで話しをしているが、獣害がひどいので、獣害対策を先に始めなければ農産物を育てるに至らない。したがって耕作できる地域づくりを行いながらグリーン・ツーリズムを進めていくようにしたい。

意見：小さな発言はあるが、小さな意見をまとめる人がいない。農産物の獣害を受けると、気力も失ってしまう。

意見：地域内での行事が多くて忙しすぎるという意見もある。

意見：これまで協議に参加してきたが、少し先がわかってきたので、地元での協力を得て進めていきたいと思う。

意見：市役所からの直接的な支援についての返答がほしい。

意見：地域の人達にどうやって話しを進めていくか、それが自治会が主導するのか、核になるところをどこにするのが難しいので、これから具体的な話しをしていきたい。

質問：私達はグリーン・ツーリズムを進めるうえで何をし、役割としてどのようなことを担えばよいのかが知りたい。

回答：外部の意見、地元の意見を聞いてこれからまとめていく。

質問：地区ごとに個別にするのか、全体で必ず実施しなければならないのか。

回答：必ずしも何かをやらなければならないというわけではない。

意見：地域に持ち帰った時に、委員会の結果を伝えた時に、全員参加は難しいが、全体での参加と協力の合意は得たので、一人一人に何をやりたいかを拾い上げ、集めて、束にして事務局に持っていきたいと考えている。できたらいいねを吸い上げて、希望を持ってもらって進めている。

会長：グリーン・ツーリズムの実施は難しく、全国でも必ずしもうまくいっているわけではない。

それでも実施しているところもあるので、事例を学びながら進めるという手もある。行政だけに委ねるのではなく、若い人を中心にして、中心となる人が数人いて推進するケースが多いと思うので、少しずつ進めていく必要がある。

少しでも前に向かって、知恵を出しながら進めていってほしい。

(3) 今後のスケジュールについて



6 第5回いなべグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会

○日 時：平成27年3月4日（水）17:30～

○場 所：藤原文化センター

○参加者：策定委員等 11名、いなべ市役所 11名、京都産業大学 2名、三重県 1名、東員町 1名、まちむら交流きこう 1名

(1) 挨拶 佐藤会長

(2) 説明

① モデル地区別計画説明 説明：和波課長
—資料により説明—

② 今後の推進体制について 説明：岡部長
—資料により報告—

③ 京都産業大学の調査について 説明：佐藤会長
—資料により説明—

(3) 質疑応答

質問：第2回目の報告とは文書にして報告するのか。

回答：27年度の各地域での活動を踏まえて、まとめたものを報告してほしい。

会長：27年度は新しい委員会になるのでその協議の内容を報告してもらう。

質問：鼎地区の水の資源調査について採取の場所は。

回答：市役所より場所について回答。

質問：川原地区は概ね賛成をいただいているが、具体的な取り組みの中で文末が断定的になっているが、地区ではすべてを了承されているわけではないので少し対応に困る。

回答 内容については今後検討するが、表現方法については再検討を行う。

(4) 今後のスケジュールについて

7 第6回いなべグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画策定委員会

○日 時：平成27年3月17日（火）19:00～

○場 所：北勢福祉センター 大会議室

○参加者：策定委員等9名、いなべ市役所5名、京都産業大学2名、

（1）挨拶 佐藤会長

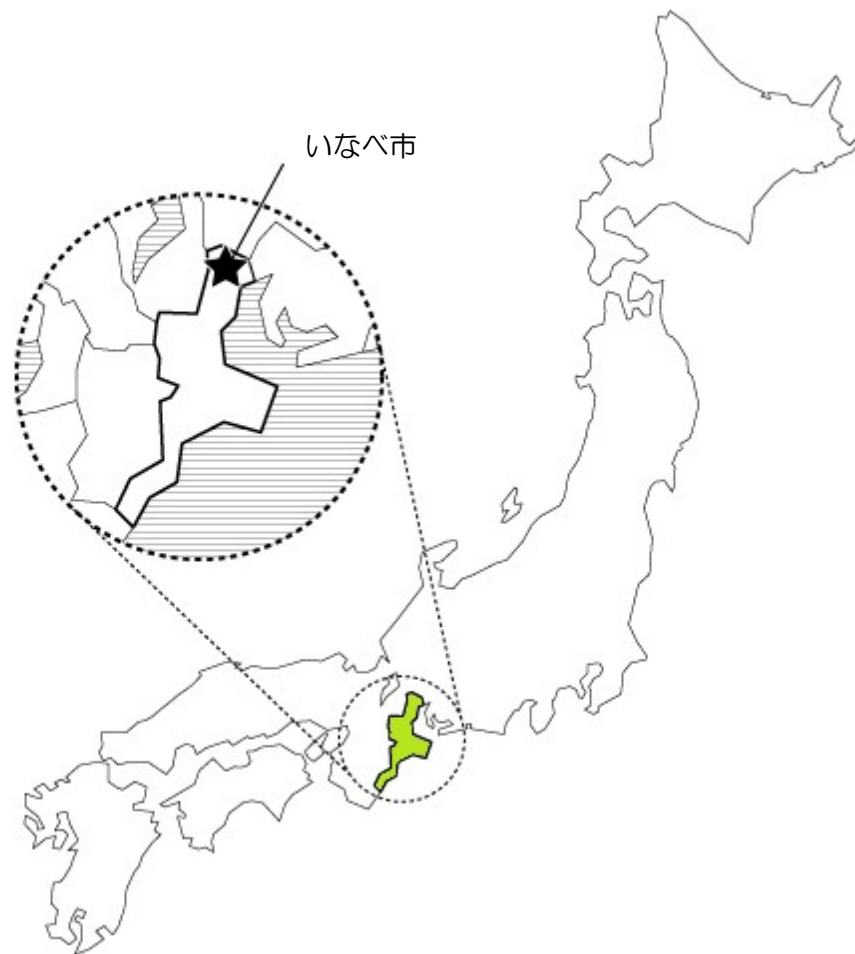
（2）いなべグリーン・ツーリズムモデル地区推進計画 市長へ授与

（3）推進計画概要説明

（4）市長あいさつ

（5）意見交換会





いなべグリーン・ツーリズムの推進 に向けた地域の拠点づくり成果報告書	
モデル地区	川原地区、二之瀬地区、 篠立地区、古田地区、鼎地区
発行日	平成27年3月17日
編集	いなべ市企画部広報秘書課 〒511-0293 三重県いなべ市員弁町笠田新田 111 番地 電話 0594-74-5820 http://www.city.inabe.mie.jp
協力	学校法人京都産業大学 一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構